

ハ概シテ有権資格ノ当否ニ関シテハ本法第八百五十条ノ規定アルニモ拘ハラズ除権ナシモノハ發成セサレハナリ又無効宣言ニ因テ新タニ証券ヲ調製シ得ルキキ否ヤハ権利者ノ債務者ニ對スル関係ノ如何ニ依リテ定ムル一キモノニシテ民事訴訟法ニ於テ規定スル一キ所ニ依リサレナリ

即ケ公示催告ニハ証券ノ所持人カ只世權利ヲ届出シヘリ及ヒ世証券ヲ呈出スルハシト催告セラルルノミ但第三者ハ自己ノ為メ滅失ニ属シタル証券ニ付キ更ニ完美ナル權利ヲ持テツ、世申立人ノ資格ニ對シテ争ヘ得ルノ意アルヲモ右ノ催告中ニ包含スルナリ而シテ世ノ第三者ノ争アルカ又ハ申立人カ呈出セラレタル証券ハ催告シタル証券者速ナリト名認メサルハ即チ本法第八百三十条ニ於ケル場合ニ同レク特別ノ審判手續ヲ以テ其争ヲ結了スヘキナリ世ノ他ニ於テハ催告手續ハ証券ノ呈出アルハ即チ結局ニ付キモノト知ルハシ

第三條 公示催告 公示催告ヲ為スニハ申立ノ許否ニ付キ先ツ決定ヲ為スル要トス本法第八百二十四条第一條第三十七條第一條以下各条而シテ催告ノ要旨トシテハ本文第八百四十一条ノ外第八百二十四条ノ第一項ニ示スルノ要ス蓋該条ノ第一項第三項四項本文第八百四十一条ニテ補充シアルナリ而シテ届出ハ催告期日ノ經過後ト雖モ除権判決ヲ宣渡スマリノ向ハ之レヲ為スノ許スナリ本法第八百二十八条各条

第四條 公告 本文第八百四十二条ノ規則ハ本文ニ掲グル証券ノ性質ヲ觀察シツ、本法第八百二十五条ノ規定ヲ更ニ擴張シテ本法第八百三十七條第一項各条ハナク相場會所ノ存在スル地方ニ在リハ

其公告ニ催告ノ正本ヲ揭示シ且催告ノ全文ヲ少クモ三回帝國官報ニ掲載シ此ノ他各地ノ公告紙並ニ此ノ他ニ選定スヘキ公告紙ニ掲載セシムルナリ上ノ第一條及ヒ本法第八百二十五条第八百二十六条第二條第三條第八百三十四条乃至第八百三十六条第五條第七條第八條第九條第十條第十一條第十二條第十三條第十四條第十五條第十六條第十七條第十八條第十九條第二十條第二十一條第二十二條第二十三條第二十四條第二十五條第二十六條第二十七條第二十八條第二十九條第三十條第三十一條第三十二條第三十三條第三十四條第三十五條第三十六條第三十七條第三十八條第三十九條第四十條第四十一條第四十二條第四十三條第四十四條第四十五條第四十六條第四十七條第四十八條第四十九條第五十條第五十一條第五十二條第五十三條第五十四條第五十五條第五十六條第五十七條第五十八條第五十九條第六十條第六十一條第六十二條第六十三條第六十四條第六十五條第六十六條第六十七條第六十八條第六十九條第七十條第七十一條第七十二條第七十三條第七十四條第七十五條第七十六條第七十七條第七十八條第七十九條第八十條第八十一條第八十二條第八十三條第八十四條第八十五條第八十六條第八十七條第八十八條第八十九條第九十條第九十一條第九十二條第九十三條第九十四條第九十五條第九十六條第九十七條第九十八條第九十九條第一百條

ノトス
除権利ノ言渡前申立人ハ証券ヲ發行シタル官廳金庫又ハ場局ニ於テ紛失シタルコトヲ明示セシ^時以來新ナル証券ヲ發行セシムル為メ証券ヲ差出サシコト及ヒ申立人ヨリ他人ニ新ナル証券ヲ發行セシリレコトニ付キ六月ノ期限經過後交付シタル証明券ヲ呈出ス可キモノトス

第八百四十四条 (全上)

利息票又ハ利益配当票ヲ四年ヨリ長キ時間ノ為メ^時以後ニ交付シタル有價証券ニ在リテハ其催告期日ハ紛失シタルコトヲ明示セシ時以來其票ノ中四年ノ為メニシタルモノ、支拂満期トナリ^時以後ニ満期トナリタルモノ、支拂満期以來催告期日マテニ六月ノ經過スル方法ニ依リ定ムルヲ以テ足レリトス利息又ハ利益配当票ノ支拂ハサル時間ノ票

ハ之ヲ限外トス

除権利決ノ言渡前申立人ハ其交付シタル官廳金庫又ハ場局ニ於テ前
項ニ記載シタル四年限リ及ヒ四年以後ニ於テ支拂満期トナル票ヲ申
立人ヨリ他ノ者呈出セサリレコトニ付キ六月ノ期限経過後ニ交付シ
タル証明券ヲ呈出ス可キモノトス催告ヲ發シタル以後ニ於テ新ナル
票ヲ交付シタル時ハ其証明券ニ於テ八而四十三条ノ項ニ記載シタル
コトヲモ亦明記ス可シ

第百四十五条 (全上)

利息票又ハ利益紙者票ヲ交付シタルモ復タ更ニ之ヲ交付セサル有價
証券ニ在リテ第百四十三条第百四十四条ノ要件アラサリレ時ハ其
催告期日ハ其後ニ交付シタル票ノ支拂期日以來催告期日マデニ六月
ノ経過スル方法ヲ以テ定ム可キモノトス

第百四十六条 (支拂期日ヲ定ムル債務証券ニ付テノ条)

獨乙帝國官報ニ催告ノ第一回ノ掲載ヲ為ス時未タ開始セサル支拂期
日ノ債務証券ニ記載シタル場合ニ於テ第百四十三条乃至第百四
十五条ノ要件ノ存セサル時催告期日ハ其支拂期日以來六月ノ経過ス
ル方法ヲ以テ之ヲ定ム可キモノトス

第百四十七条 (催告期限ニ付テノ条)

獨乙帝國官報ニ催告ノ第一回ノ掲載ヲ為シタル日ト催告期日トノ間
ハ少クトモ六月ノ時間アラサル可カラサルモノトス

(制定沿革理由説明及ヒ鮮紙) 各草案相同シ但國務院委員會ニ於テ

第三者ノ利益ヲ期シ有價証券ニ附著セシメタル利息票又ハ利益配
当票カ短期又ハ長キ期限ノ為メ、發付セラルルニ付テ差別ヲ立テ
サルコトニ修正ヲ為シタル所ハ他ノ中梅ニ異ナルトシ本條九例ヲ
十一回参照)

但ルニ利息票又ハ利益配当票カ十年三十年又ハ九十年ノ期限ノ為
メ發付セラルルニ証券モ之レアルナリ乃チ國議院委員^{三條ノ原案}第七
百八十九條ニ依リ總体ノ期限ノ經過スルノ時^点以テ催告期日ト定
ムヘキカ如キ感想^{ヲ抱キタリ}シタルニシテ然レモ是レ實際ニ行ハ雅
キ所ナリ)

庭加セラレタル本文第八百四十三條第八百四十四條第八百四十五
條ニ於テハ即チ利息票又ハ利益配当票ヲ發付セラルル又ハサレ氏發
付セラレタル所ノ証券ノ無効宣言ニ付テ定メタルモノニシテ而シ

テ本文第八百四十六條ニテハ支拂期限ヲ証券其モノニ明記シアル
所ノ証券ニ付テ定メタルナリ)

本文第八百四十三條第二項ニ於ケル利息票及ヒ利益配当票ノ外ニ
尙ホ票札ヲ交付レタル場合ヲ想像シタルナリ蓋票札ノ所持人ハ亦

原証券ヲ有セサルモ能ク新^{利息}票及ヒ利益配当票ヲ交付テ受ケ得
ル代^リ而シテ或ル者^{債權者}既ニ右ノ交^付受^付ケタル場合ニ在テハ

原証券ノ不生産力ナリノ原因^ノ何レタル推測ソモ起^るカスヘ
カラサルモノトス

本文第八百四十四條第一項ノ主股ハ即チ原証券ノ不生産力ニ原因
シテ惹キ起ス推測カ利息又ハ配当利益ヲ支拂ハサル中ニハ自ラ消
滅スルト云フノ趣意ヨリレテ規定シタルモノナリ又本文第八百四
十四條第二項ノ末股ノ場合ニ於ケル本文第八百四十三條ニ掲ケル

ル期限ヲ俟ツノ必要之レアラス

又本文第百四十五條ニ於ケル証券其モノニ支拂時期ヲ記載シテ
ラズトハ其モ豫告又ハ抽籤^{ニ用テ}ノ為メ更ニ新ナル証券ヲ
交付スル能ハサルノ短期ニ支拂期限ノ迫リタル証券カ亦四年ノ長
キニ存在セサル場合ニ付キ定メタルナリ本條ノ場合ハ本文第百
百四十三條第百四十四條ノ之レヲ通用スヘカラス且催告期日ノ
元資金ノ支拂期日ニ從ヘテ定ムルヲ得サレトシ何レトシレハ即チ
所持人ハ新ナル証券ヲ取得スル為メ其証券ヲ呈出スル以前ニ於テ
豫告又ハ抽籤ノ之レアリタルコトヲ知ラセサルコト之レアリ得ヘケレ
ハナリ

本文第百四十六條ノ原案ニテハ第百四十七條中ニ明定セラレ
アリレテ別條ニ為サレリナリ是レ本文第百四十三條乃至第百

百四十五條ノ^{本條}根柢法ト相連係セシメント為シタルニ由ル之レニ及

シテ原案第百七十八條ノ第一項ヲ本文第百四十七條ト為シ以
テ手續ニ因スルノ一規則トシテ最終ニ編入セラレタル蓋世ノ條ハ
實ニ本文第百四十三條乃至第百四十六條ノ場合ニ因係スルノ
コトヲス第百二十七條ニモ應用セラルヘキモノトス但催告期限
ヲ六月マデニ延長ヤリ(本法第百二條參看)

紛失レ又ハ破滅シタル利息票又ハ利益賦者票又ハ票札ノ無効宣言
ハ千八百六十七年十一月九日及ヒ千八百七十年^七月二十一日ノ北
部獨乙聯邦公債法^{並ニ}獨乙帝國千八百七十一年四月二十六日及ヒ
千八百七十三年五月十二日ノ公債法ニ於テ又帝國銀行條款第九條
ヲ以テ之レヲ禁止セリ必竟本文第百四十三條乃至第百四十五
條ハ帝國法又ハ各聯邦法ニ依リ無効宣言ヲ為シ得ヘキモノヲ要件

ト为ロル^ルト^ク志^ル一^カラス^ル區^ノ訴^訟法^ナルモノニテハ本法^第八
百三十七^条第一^項ノ除^キ無^効ノ宣^言ヲ为^シ得^ルト^キ付^テ規定^シタ
ルニ非^ラサルナリ(本法^第八百三十七^条第一^解未^定)

第^百四十八^条 (除^権判決ニ付^テノ^条)

除^権判決ニ付^テハ^ハ証^券ヲ無^効ナ^リトスルノ宣^言ヲ为^ス可^シ
除^権判決ノ重^要ナル旨^趣ハ^ハ独^乙帝^国官^報ヲ以^テ之^ヲ公^告ス可^シ
不^破訴^訟ニ因^リ言^渡シタル判決ノ公^告ハ其^ノ判^決確^定シ^テル後^ノ前^項ト
同^一ノ方^法ヲ以^テ之^ヲ为^ス可^シ但^レ判^決ヲ以^テ無^効ノ宣^言ヲ取^消シ^タ
ル時^ニ限^ル

第^百四十九^条 (規^定ノ^通用ニ付^テノ^条)

第^百四十三^条乃至^第八百四十八^条ノ規^則ハ第^百三十七^条第一^項
ニ掲^ケタル証^券ノ外^ノ無^記名^証券又^ハ象^券ヲ移^轉スルコトヲ得^ルモ
ニシテ^ハ向^地象^券ヲ傷^ムル証^券ニモ亦^之ヲ通^用ス但^レ証^券ヲ登^行セ
シメタル清^水カ^土地^公簿又^ハ入^質公^簿ニ登^記セラレサ^リシ時^ニ限^ル
公^示催^告手^続ニ付^キ尚^モ他^ノ要^件又^ハ更^ニ一^層嚴^格ナル要^件ヲ掲^ケ
ル規^則ハ前^項ノ規^則ノ为^メ変^更シ得^ルコトナ^シ

第^百五十^条 (除^権判決ノ効^用ニ付^テノ^条)

除^権判決ヲ为^サシメタル者ハ証^券ニ依^リテ其^ノ務^ヲ負^担シタル者ニ対^シ
テ証^券ヨリ生^スル權^利ヲ執^行スルノ權^{アリ}モノトス

(第一^解制定ノ沿革及^ヒ理由ノ説明) 本^文第^百四十八^条第一^項第^一解

三項ノ規定ハ字漏生國中株及ヒ北部独乙聯邦中株ニ之レヲ掲ケス
其他ノ中株ハ本文第ハ而四十八條第ハ而五十一條ト同文ナリ又國議
院委員会ニ於テ異議ナリ採用シタリ而シテ本文第ハ而四十九條ハ
セラレリルナリ是レ有價証券ノ取引上ノ利益ヲ如シ帝國法又ハ聯
邦法ニ於テ無効ノ宣言ヲ為シ得ヘキモノニシテ而カモ本法第ハ而
三十七條第一項ニ掲クル証券ニ屬セザル証券ニ付テノ公三催告手
続ニ関スル特定^規則ヲ定メシカガメナリシ
第ニ解公告 本文第ハ而四十八條第二項ニテハ本法第ハ而三十三
条ノ規則ニ異ナリテ陰權判決ノ掲載ヲ帝國官報ニ定メナリ又其第
三項ニ於テハ不服再訴ニ因レル無効宣言取消ノ判決ノ確定レリル
モノニ擴充レタリ本法第ハ而三十四條ニ參照ス

其之レヲ掲載スルハ判決文ノ全文又ハ其摘要ヲ以テスヘキ事否ヤ
又其公告ハ時^{々適宜ニ}表式ヲ用ヘテ之ヲ為スヘキ事否ヤニ付テハ
其事件ノ情况ニ從ヘテ趣合スルヲ必要トス
費用ニ付テハ本法第ハ而二十五條第ハ而二十六條第三解ヲ參照ス
ヘレ公告ヲ制限スルノ効力ニ付テハ本法第ハ而三十四條乃至第ハ
而三十六條第解ヲ參照スヘレ
第ニ解本文第ハ而四十九條(上)ノ第一項ニ參照ス 本文第ハ而四十九條
ノ規定ハ單ニ本法第ハ而四十三條乃至第ハ而四十八條ニ關係ヲ有
スルノニ故ニ例之ハ本法第ハ而四十二條ノ規則ノ如キハ本法第ハ
而三十七條第一項ニ掲ケタル証券ノ外ノ証券ニ對シテハ強制的ノ
適用ヲ為シ能ハサルナリ○三四ノ公告ヲ為スニ要スル費用ハ小額
ナル証券ニ對シテハ過重ナルヘシトノ意見アリ

此ノ第八百四十九条第二項ニ付テハ本法第八百二十三条第四解第一
三項ノ条々スハレ〇各聯邦ニ於テハ本法ニ同一ナル又ハ更ニ一
層嚴格ナル規則ヲ定メ得ハレ然レモ^{本法ヨリ}氏^宛ナル法律ハ定メ能ハサルナ
リ

〔第四解無効宣言ノ効力(本文第八百四十八条第一項第八百五十二条)〕
此ノ無効宣言ノ効力ハ申立人トモ証人ニ依リテ及ブシムニ於テ若ト
ノ向ノ關係上ニ局限シテ而シテ第三者ノ權利ニ更ニ影響ヲ及ホサ
ズルナリ尚モ須ク本法第八百四十一条第八百四十二条ノ第一解ヲ
参看スハレ

何人カ証人ニ依リテ債務ヲ負擔スル者ナルヤハ民法上ノ規定ニ依
ルニキナリ乃チ為替手形ニ関シテハ手形ノ支拂承渡人(兼商人又ハ
振出人ニ非ラス)紛束手形ノ振出人(兼商人ニ非ラス)ハ為替法上無効

ヲ宣言セラレシムル為替ノ支拂并債務ヲ及ブナリ(為替法第七十三
条第九十八条第九十九条)又商法第三十一条第三十二条ニ掲グル商業
証券ニ関シテハ即チ商法ニ於テ只指圖旨ヲ受取ルル者及ヒ債務証
券ノ發行者ヲ債務ヲ及ブコトヲ明示セシムルニ而シテ為替証券ノ振出
人又ハ受取人並ニ兼商人及ヒ債務証券ノ^{支拂}振出^人ニ付テハ債務ハ
各聯邦法ノ規定ニ從フニキナリ

此ノ義務ヲ及ブコト者ハ若シ申立人カ為替法第八十三条ニ依リテ
不当利得訴訟ヲ提起シシキ本法第八百三十九条ニ從ヒ相當管轄
ノ催告裁判所コトヲ定メシムル無効宣言ノ判決ヲ認諾セザル可カラ
サルナリ(本法第八百二十三条第五解以下参看)

本文第八百五十二条ノ趣意ハ純粋完備ノ判決ノアリシムルコトヲ必要ト
スルナリ若シ其判決ニ留保条件アル人(本法第八百三十条参看)即チ

裁判法ノ効用ハ義務ニ対スル中止スルノ帝國高等商事裁判院裁
判録第十四卷第五十八号巻尾

第十編 仲裁判断手續

第八百五十一条 (仲裁契約ノ有効要件ニ付リノ条)

或ル事ノ判断ヲ一名若クハ数名ノ仲裁人ニ頼テ為サシム可レトノ合
意ハ当事者双方カ係争物件ニ付キ和解ヲ為スノ権利アル場合ニ限り
法律上其効力ヲ有ス

第一解第十篇ニ対スル創意 (仲裁判断手續ヲ採用シテハ理由ヲ述

一テ且説明シテ曰抑字漏生国裁判通則第一篇章第六十七條

乃至第六十六條第一篇章第三十條第四十八條乃至第六十六條ノ規

則ノ不完全ナルトハ蓋掩フヘカラサル所ニシテ而レテ之レカ改良

ヲ以テ目今ノ必需ト為スハ輿論ナリトハ即チ字漏生国商法中條ニ

対スル理由説明ニ於テ明ニスル所ナリ又尙耳我國章程ノ報告ニ於

テハ法部西国商法第六十三條乃至第六十二條ノ論レテ目今ノ數

種ノ混雜衝突ヲ醸生スル泉源ニ至シテ何レトナレハ其手續頗

ル繁雜ニシテ本来ノ企圖ニ目的ニ到達スルヲ得サルナリト詳セ

リ殊ニセネウ府法典ノ理由説明ニ於テベルト氏ハ更ニ一層其非

ヲ爭論シタリ而レテ復来ノ獨乙普通法ニ於ケル規定ハ甚ク不完全

ナルノミナラス現時ノ必需ニ為スルニ足ラザル所アリ之レアナン

リ是ニ於テ幸即チセネウ法典第三百三十五條乃至第六十七條

バデン国商法第六十一條乃至第六十七條及ヒバイルン国商

千三百十九條乃至千三百四十四條ヲ以テ細大泄サス改良ヲ爲シ
又之ルテムベシク國許訟法中條千八百四十七年ノ序而七十五條乃
至序二而八條字漏生國商法中條千四百四十六條乃至序千六百三十三條及
七訟法中條序千三百六十一條乃至序千三百八十九條自耳英國中
條並ニ北部獨乙聯邦中條序千五百五十五條乃至序千七百七十八條ヲ以
テ吾人ニ美良ナル模範^範ヲ開示シテリ而シテ以上ノ改正法典及七改
正條ヲ觀察スルニ何レモ皆從來ノ法制ニ於テ局限セル究屈ナル限
界ヲ撤回セント企期スルノ趣一揆ニ出ルカ如ク然ルナリ乃チ本
法ニ於テモ右ノ企望ニ賛成シテ以テ^能其末ノ仲裁判斷ナル法制ノ精
神及七目的ヲ^體其手續ヲ努トメテ單簡ニ且便宜ニ組織シテ正
當ナル需求ニ適応シ得ヘク而シテ適者ナル仲裁人ヲ選定スルヲ得
ハ^自本^法完全美良ナル成績ヲ見ニ至テサレ可カラサルヲ^豫慮^也シテ
ルナリ

軌近社會交通ノ頻繁發達ヲ致スニ隨伴シテ此ノ仲裁判斷ノ法制ヲ
シテ實際ニ十分ナル効用アラシメント期スレハ即チ必ス其仲裁手
続及七仲裁判斷ハ獨乙全帝國ニ於テ一揆ノ法制ヲ是認シテ之レノ
實施スルニ非ラサレハ蓋能ハサルナリ乃チ仲裁判斷手續ノ共^同一
揆ハ必要ナリトス而シテ此ノ法制ハ之レヲ訟法中ニ編入セサル
可カラス如何ニトナレハ特リ訟法中ニ編入スルニ依テ其要件規
定即チ仲裁手續ノ實行ノ爲メ法律上ノ共助並ニ仲裁判斷ノ執行ヲ
果^地行シ得ヘキノ規則ヲ奠定シ得ルヲ以テナリ然リ而シテ今ヤ其要
件規定ヲ編纂スルニ方テヤ即チ仲裁手續ノ許否並ニ仲裁判斷ニ付
スル不破ニ關スル問題ハ之レヲ不問ニ付シ去ルヲ得ルナリ是レ
於テ本法ニ於テハ純粹ノ手續上ノ規則ノミニ局限シテ止ル能ハ

サレニ至リテ即チ仲裁判断契約ノ有効及ヒ仲裁判断取消訴訟ノ要
素ニ付ケル規則マデモ茲ニ規定スルノ必要ニ遭遇セリ

本法ニ於テハ其第百五十一条乃至第百六十二条ヲ以テ或ル事

ヲ一名若クハ数名ノ仲裁人^{判断}ヲシテ^{判断}裁断セシムル^{判断}ノ合意ニ因リテ

起ル仲裁手続ニ関シテ規定シ又其第百六十二条ハ^七ハバイル^七ニ国^七

訟法第千三百四十四条ニ倣ヒテ臨終ノ意思又ハ其他合意ニ出テサ

ル処分ニ依リ法律ニ許サレタル方法ヲ以テ設ル仲裁判断所ニモ此

ノ規則ヲ適用スヘキコトヲ定メタリ

抑仲裁人^{判断}ナルモノト評定人ナルモノトハ之レヲ明別セサルハカラ

ス帝國高等商事裁判院裁判録第^三四卷及ヒ第^三四卷^三終^三而シテ評定人

ニ関スル本法上ノ規則ハ本法ノ干渉セサル所ナリ

〔第二節 仲裁判断人及ヒ評定人〕 盖仲裁人ト評定人トノ差ハ較大ナ

リ抑評定人ニ付テハ何人モ自己ノ事件ヲ裁判官タルヲ得ストノ原

則^{通用}ル^{通用}場合之レアラヌ^{通用}法蘭西民法第千五百九十二条千八百五十

四条帝國高等商事裁判院裁判録第^三十六卷第^三百九号^三終^三而シテ評定

人ノ宣言ハ通例甘後スヘカラサル^三ト云フヲ理由トシ

テ之レニ対シ不服ヲ主張セラレ得ルモノナリ然レ者事者向^三於テ

一定ノ範圍ヲ限り不服ヲ唱ヘサン^三旨^三ノ合意^三ニ得^三ヘシト^三由^三モ^三其^三紛^三雜

ヲ致スニ方テハ此^三ノ合意^三ニ^三用^三立^三タ^三サル^三ト^三アリ^三元^三末^三評^三定^三人^三ハ^三事^三者^三

ヲ親聽スルヲ要セス且邦法ニ拘束セラレ^三ト^三之^三レ^三アラ^三サル^三ト^三帝

國高等商事裁判院裁判録第^三三卷第^三十三号^三終^三

或ル場合ニ付テ仲裁人トシテ判断ヲ受ケタルモノナル字又ハ評定

人^六事實ノ裁判官^六ノバザン^六國^六第^六千^六五^六十^六五^六条^六第^六千^六六^六十^六六^六条^六帝國^六高等^六商

事裁判院裁判録第^一八卷第^一十五号^一終^一依^一託^一シ^一タ^一リ^一シ^一キ^一ハ^一事實^一向

事裁判院裁判録第^一八卷第^一十五号^一終^一依^一託^一シ^一タ^一リ^一シ^一キ^一ハ^一事實^一向

是ニ属セリ然レ其疑アハニ方ナハ即チ为レタル宣言ノ目的物ニ就
テ推究スレハ容易ニ解答スルヲ得ヘキナリ乃ケ^仲定人ハ目的物件
又^ハ評損害ノ額ヲ評定シ或レハ契約中合意ノ明カニセズ未定ニ付シ置
キタル点ヲ確定シ又ハ争ノ或ル点例之ハ証拠ニ関スル問題ノ要ニ
付キ判定スルモノニシテ而シテ全般ノ争ニ付ケハ之レヲ裁判スル
ヲ能ハサシムトス

然レモ本条ノ行文ニ或ル争ノ判断トアル所ニ依レハ即チ仲裁人ハ
必ス争全般ノ为メ選定セラシムルモノトモ定メ難キナリ例之ハ賠償
ノ争ニ付キ仲裁人ノレテ未ダ其賠償義務ニ付キ裁判アラサル以前
ニ在リモ単ニ其損害ノ多寡ノミヲ判断セシムルヲ許スナリ然レ而
シテ此ノ多寡ノ確定ハ評定人ニ依テモ亦之レヲ为サシム得ル如
クナルヲ以テ其行為ノ目的ニ從ヘキト仲裁人ト評定人トノ別必成
ント之レアラサルナリ

仲裁人及ヒ評定人ト全ク^相別セサルハカラサルハ即チ勸解人是レ
ナリトス抑勸解人ナシ者ハ当事者間ニ有効ノ和解ヲ为サシムルヲ
メ選定セラシムルモノニシテ即チ裁判権ハ全ク之レアラサルモノト
ス而シテ此ノ勸解人ニハ本職ノ裁判官ヲ選定スルモノ固トヨリ妨ケ
サルナリ

第三條 仲裁判断新契約ノ効力及ヒ通常裁判所ノ除任 仲裁判断新契約
ハ謂フ所ノ契約ノ抗弁ナシモノヲ提出スルハ裁判所ニ於テ本件ヲ
審判スハカラサルノ効力ヲ有ス本法第二百四十七條第二及ヒ帝國
高等商事裁判院裁判録第一卷第六十五号同上第二卷第六十九号同
上第十九卷第四十九号各條但被告人ヨリ通告ノ時期(本法第二百四
十七條第二項各條ニ於テ妨許抗弁トシテ提出スルヲ要ス^{而シテ其}

証拠トシテ証存ヲ呈出シ之レニ依リテ現ニ合意ノアルヲ明ナル場
合ニ於テハ裁判官ハ取推ヲ以テモ之レカ審査ヲ為シ能ハサルモノ
ナリ然レトモモ裁判官ハ其抗弁ヲ却下シ自ラ亦件ニ付キ審判スル
ノ権限ヲ有スル旨ヲ宣渡スノ推アルトハ勿論其ヲ俟タズ帝國高等
商事裁判院裁判録第八卷第五十五号及ヒ本法第八百六十七條第一
款(卷)

元來仲裁人ノ判断ハ一ノ特定規則ナルヲ以テ仲裁判断契約ハ必ス
精確明瞭ニ相開示シアルヲ必要ト為スナリ

(第四條理由ノ説明及ヒ制定ノ沿革第八百五十一條) 理由説明ニ曰
第八百五十一條ノ規則ハ字漏生國訴訟法中條第三百六十一條句
耳及國中條及ヒ北部獨乙聯邦中條第三百五十五條ニ相同シキモノ
ニシテ而シテ元來和解試ト頗ル相類似セルモノナリ

各聯邦法制ニ於テ和解ヲ為スコトヲ許ス事ニ付テハ亦仲裁判断ノ
目的物件タラシムルヲ得ルナリ而シテ今ヤ茲ニ仲裁判断契約ヲ果
行レタル場合ヲ列挙スルトハ猶ホ彼ノ法例西訴訟法第四條バテ
ニ國訴訟法第六十三條第六十四條又ハバイルニ國第三百三十二
十條ニ於ケル如クニ必要ニアラサルヘク思實ニ為シ能ハサル所ナ
リトス

当事者ニシテ和解ヲ為スノ能力アルモノハ亦自ラ仲裁契約ヲ為ス
ノ能力アリ又和解ヲ為スニ或ル制限ヲ受ケ又ハ或ル條件ニ從テ為
シ得ルモノナルハ仲裁契約ヲ為スニ付テモ亦右ニ同一ナル制限
又ハ條件ニ從屬セザル可カラズ故ニ例之ハ法律上代理人ニシ
テ和解ヲ合意スルニ付テ特ニ代理権ノ委任ヲ要スルモノナルハ
即チ仲裁契約ヲ結フニ付テ同撮十人委任アルヲ必要トナスナリ

クセシ国民法第九百七十七条バヤルニ国诉讼法第九百三十一
法初西国民法第九百六十七條第二千四十五條參看

訴訟代人ニ付典々^ト代任状ニハ本法第七十七條參看仲裁契約ヲ為
スノ権利ヲ包含セシメヤルハ勿論本法ノ趣意トスル所ナリ云々
法第九十七條第九十八條參看

各州皆同レ国議院委員会ニ於テ異議ナク採用シ

「第五條仲裁契約ヲ許スコト」上ノ理由説明ニ依テ本條ノ不明瞭ナ
ル趣意ヲ了解スルヲ得ヘシ即チ^是主觀的若クハ彼觀的ニ和解取結ニ
付テノ要件ノ存在シアラザルハカラザルノ意旨ナリトシ乃チ例之
ハ^{國法ニ關ス}純然タル私法上權利ルモノニ付テハ私ノ和解ヲ許サズ從テ仲裁
契約ヲモ為シ得ザルモノトス(本法第四十條第二項參看又法初西國
民法第九十二條四十五條ニ依レハ法律上代理人ハ和解ヲ為サントスル

各場合ニ高等法院廳ノ委任アルヲ要スル而シテ本法ニ於テハ此ノ
事^ル和解ニ付テハ本法第五十二條ヲ以テ^殊之レヲ用セスト雖モ
「本法第五十二條參看」仲裁契約ニ付テハ仍ホ之レヲ要スルナ
リ

蓋法律上代理人及ヒ訴訟代人ニ和解取結ヲ許スモ仲裁契約ハ之レ
ヲ許サ^ルル所^ハ即チ仲裁契約ヲ是認セザルニ同弊ノ遺爪ニレシ
頗ル妥當ナラザルモノナリ上ノ第一條參看

各聯邦法制ニ於テ本條ノ規則ヨリ以外ノ度ニ於テ仲裁契約ニ付テ
限制ヲ為スルハ之レヲ許サ^ルルナリ

「第六條參看」本條ニ於テハ^争決^テ用^ヒ且本法實施法第三條ニ
依テ行政上ノ争ヲ包含セザルナリ(裁判所編成法第十三條參看)
而シテ裁判所編成法第十四條本法實施法第三條參看ニ依テ特別

裁判所ニモ仲裁手續ヲ許サ、ルナリ

第百五十二条 (将束ノ章ニ付テノ仲裁契約)

将束ノ章ニ関スル仲裁契約ハ一定ノ権利関係及ヒ其権利関係ヨリ生
スル争ニ関セサル時ハ法律上其効力ヲ有セズ

〔第一解理由ノ説明〕 予リノ現行法ニ於テハ将束ノ章ニ関シテ仲裁
契約ヲ^{為ス}許サ、ルナリ^{為ス}予漏生国裁判通則第一編第二章第六

十七条ニテハ単ニ当事者ニ現出スル争ニ付テ規定シ又法内西国法
法第百六条ニ於テハ許訟物件ノ明記ヲ必要トセリ然レニ独乙国

ノ實際ヲ觀レハ羅馬法ニ同シク将束ノ章ニ関スルモノト雖モ契約
上相関係スル権利関係ヲ明示スル限りハ仲裁人ヲシテ其争ニ付テ

判断セシメントノ契約ヲ法律上有効ト看做シ来リタリ此ノ証徴ト
為スハキモノ教々^{即テ}即テ邦名ノ認可シタル会社又ハ組合ノ約

款ニシテ其中ニ上ニ述フル如キ仲裁契約ノ性質ノモノ性ニ之レア
ルヲ以テ見ルハシ乃ケ本法ハ此ノ旧習ヲ襲キ且新定訴訟法典ニ據

依シタルナリ^ババ^テテ^ン国第百六十二条^バイル^ン国第百三十九条^北

却独ニ聯邦中^第百五十六^条参照
〔第二解制定ノ沿革及ヒ解題〕 各草案皆同シ国設院委員会ニ於テハ

異議ナリ採用セラレタリ
一定ノ権利関係ヨリ生スル^{將束}争^ノ争ニ関スル仲裁契約ノ有効ナル

一キコトハ上ノ第一解ニ述フ^ル理由ニ依リ更ニ疑ヲ容シサルナリ
是レニ付テハ尚モ本法第百四十条第三解第一項ヲ参照スハシ

第百五十三条 (仲裁契約ノ存面上ナルコト)

民法ノ規則ニ從ヒ口頭ヲ以テ締結シタル仲裁契約カ其効力ヲ有スル
場合ニ於テハ当事者ノ^各方ハ其契約ニ付テ証言ヲ作ルコトヲ求ムル
ヲ得

〔第一解理由ノ説明〕 法動西国訴訟法第千九条バテニ国同上前千六
十八条バイルレ国第千三而十九条ニ於テハ仲裁契約ノ適式トシテ
各面上ノ証拠ヲ必要トヤリ而シテ四字漏生法制ニ亦此ノ主分ヲ採
リ若シ仲裁契約ノ物件百五十マルクノ額ヲ超過スルハ^各各面上ノ
契約ヲ要シテ^各然ルニ本法ハ既ニ字漏生国訴訟法第千三而六
十三条ニ於テ右ノ主分ヲ廢用スルニモ拘ハラズ断然之レヲ採用レ
得サント^各何ントナレハ獨乙商法第千三而七条ニ於テハ既ニ各面
ノ要件ヲ廢シタル以上今復々特ニ商事上ニ屢現出スルキ仲裁契約
ニ關シ各面契約ヲ要スル^各ニ定メ雅キヲ以テ^各加之概シテ權利
上行^各為ニ各面式ヲ必要セサル處ニ向テ特ニ此ノ手續ニ付^各テノミ
各面^各ニ必^各シテ施行シ能ハサルナリ^各故ニ仲裁契約ノ程式ニ付^各テハ
一ニ民法上ノ規定ニ放任セサル可カラサント^各又本法第千六而六十
八条ノ規則ニ依^各テ仲裁判断ノ執行ハ彼ノバイルレ^各ニ国訴訟法第千三
而三十七条字漏生国全上中條第千三而八十一條以下ニ於テル如^各リ
当事者ノ一方ノ申出ノ^各ニ^各因^各テ之^各レヲ言渡シ能ハサルナリ^各然レ之
レカ^各為メ各面ヲ必要スルノ理由即チ仲裁契約台^各ニ執行文^各下付^各ノ申
請^各ヲ添付シテ提出スルノ必要ハ^各自^各ラ清減シ^各ルナリ^各而^各シテ到底亦
法第千六而六十三条第千六而六十七條ノ規則ニ^各因^各テハ口頭上取結^各リ
仲裁契約ノ要件ヲ各面ヲ以テ証明スルハ^各当事者ノ利益^各ノ^各ハキナ
リ^各是ニ於テキ即チ本法ハ北部獨乙聯邦中條第千五十七條ニ^各依^各テ
仲裁契約ヲ各面ニ作ルコトヲ求メ得^各ル權利ヲ^各当事者ノ各方ニ付^各共

スルノ規則ヲ定メタリ

〔第二解制定ノ沿革及ヒ解状〕 各按相同蓋字漏生國中按ヲ除クナリ
国法院委員会ニ於テ異議ナク採用シタリ

本法実施法第十四条ヲ以テ凡ソ各聯邦ノ訴訟手續上ノ法律ヲ廢止
セシメタルヲ以テ及令通聯邦法ニ於テ唇面式ヲ要スルノ法令之レ
アリシ氏今ヤ之レヲ應用シ得サルナリ然レト雖モ其新旧ノ向ハス
一例之ハ字漏生(国内)通法第一一篇第五章第三十一条(如モ民法上ノ
規定ニシテ唇面式ヲ要スルノ定マアルモノハ世商法第三而十七條
ニ抵触セサル限リ仍ホ其効力ヲ保有スハシ

本条ハ前項ニ依テル特別ヲ別ニシテ口頭上ノ仲裁契約ヲ是認シ且
〔商法第三而十七條ヲ變更シ之レヲ唇面ニ作ルコトノ請求權ヲ定
メタルナリ〕

本法ニ於テ世程式ニ付テ明定スル所ナキヲ以テ仲裁契約モ稀モ他
ノ契約ノ如ク暗黙ニテモ之レヲ結ブヲ得ヘシ然レト雖モ此ノ仲裁
契約ニ付テハ明確ニ言明カスコトヲ要スルナリ〔本法第八而五十一
条第三解以下矢括〕

第八而五十四條 〔仲裁人ノ選定ニ付テル條〕

仲裁契約中ニ仲裁人ノ選定ニ関スル規定アラサル時ハ当事者ハ各一
名ノ仲裁人ヲ選定スルモノトス

第八而五十五條 〔同上〕

仲裁人ヲ選定スルノ權カ当事者双方ニ属スル時ハ先ニ手續ヲ為ス一
方ハ相手人ニ唇面ヲ以テ世選定シタル仲裁人ヲ指示シ同時ニ一因ノ

期限内ニ相手人モ同一ノ手續ヲ為ス可キ旨ノ催告ヲ為ス可シ
右期限ヨ空リ経過シタル後ハ管轄裁判所ハ先ニ手續ヲ為ス一方ノ申
立ニ因リ仲裁人ヲ選定ス

第八百五十六条 (全上)

当事者ノ一方ハ相手人カ仲裁人選定ノ通知ヲ受ケタル後ハ五ニ相手
人ニ対シテ其選定ニ羈束セラレモノトス

第八百五十七条 (同上)

仲裁契約ヲ以テ選定シタルニ依ラサル仲裁人カ死亡シ又ハ其他ノ理
由ニ因リ欠缺シ又ハ仲裁人タルノ職務ノ引受若クハ施行ヲ拒絶スル
時ハ其仲裁人ヲ選定シタル当事者ノ一方ハ相手人ノ催告ニ因リ一週

期限内ニ他ノ仲裁人ヲ選定ス可シ其期限ヲ空ク経過シタル後ハ管
轄裁判所ハ手續ヲ為ス一方ノ申立ニ因リ仲裁人ヲ選定ス可シ

(第一解制定ノ沿革) 政府第一回第一回ノ二原案ハ本文ノ四條ニ同
シ空瀟生國中條ニ同シト雖モ本文第八百五十七條ヲ缺クナリ又北
部独乙聯邦中條ニハ本文第八百五十七條ノ規則ヲ定メス且其第千
而五十八條第二項ニ於テ仲裁人ノ選定ヲ当事者ノミニ限リ又其
第千而五十九條ニ於テハ選定シタル仲裁人ヲ相手人ニ合面ヲ以テ
通知スヘシト命レ且其第千而六十一条ニ於テ公然ノ職官吏ハ其資
格ニ於テ仲裁人タルヲ得ザル旨ヲ明言セリ

本文四條ニ付テハ國議院委員会ニ於テ別ニ異議ナク採用シタル
第二解理由ノ説明) 羅馬法並ニカノーン法ニ拠レハ允リ仲裁人ト
為サンニハ仲裁契約中ニ其人ヲ定メテ指名セサル一カラストナリ

又法蘭西国訴訟法第六百六条に於て仲裁契約に仲裁人ノ氏名ヲ明
定ス可シ若シ之レヲ為サレハ仲裁契約ハ無効ナリトノ制裁ヲ付
セリ而シテ字漏生国裁判原則ニテハ此ノ点ニ付ト更ニ明定スル所
ナレト雖モ實際ノ判決例ニ依リテ即チ仲裁人ヲ指名シアラサル仲
裁契約ト雖モ之レヲ選定指名スルノ方法ヲ明確ニ記載シアル所
該契約ヲ有効カト認定セルナリ(帝國高等商事裁判院裁判録第一卷
卷尾又彼ノ獨乙普通法ノ主文及ニ實際ノ手續ニ至テハ更ニ其範圍
廣闊ナリ)乃チ將來ニ起ルヘキ争ニ付テハ仲裁人ヲ留保スル仲裁契
約ナレバ其當ニ訴フヘキ事柄ヲ以テシテ仲裁人ヲ選定スル意味ヲ
有スル念意ナレバ五ニ之レヲ有効カノモノト名認メタルナリ)同
上裁判録第一卷卷尾

本條第六百五十二条ニ明定スル如ク仲裁契約ハ將來ノ争ニ因レテ
モ之レヲ許サルヲ以テ其契約中ニ仲裁人ヲ選定シ置クヲ必要ト
セス何レトナレハ争カ起リハ此ニ方テ初テ通告ナリ仲裁人ヲ選定ス
ルヲ以テ通例トスレハナリ殊ニ豫メ之レヲ指定スルハ必要ハ
將來ニ起ル争ニ因レテハ之レアラスト為ス以上ハ彼ノバイルン国
第六百十九條バダレノ第六十二条第六十八條ニ倣テ其仲
裁契約カ已ニ争ニ繫ル事件ニ付テハ場合ニ付テ契約中ニ指定スル
ノ必要アリトレト因執スルノ理由モ亦判然ナリト云フ一カラス加
之又字漏生国訴訟法中第六百三十四條ニ於ケル如ク同国從來
ノ判決例ノ主文ニ依ラサル可カラザル所以モ之レアラサルナリ必
竟帰著スル所ハ即チ此ノ仲裁判斷手續ナル法制ノ發達ト共ニ前者ノ
利益トテ企及スルニ在テ而シテ獨乙普通法ノ主文慣行ニ於テ執行
シ末レル方針ニ拠リ仲裁契約ナレモ一ノ羈束能力ヲ與フルハ

適當ニシテ且當事者ノ目的トスル所ニモ合適スルナラン後令商契
契約中ニ仲裁人ヲ指定シ付テ規定レアラサルモ尚ホ之レヲ認許シ
又当事者ノ意思ノ陳供ニシテ不足スル所アルモ法律ヨリ以テ之レヲ
補充セリトテテ其契約ニ竊束カク共ツンテ良レトス一キナシトバイル
ニ国第千三百二十五条乃至第千三百二十九条第千三百三十一條北
却独ニ聯邦中條第千五百五十八條第千五百五十九條中條生國商法中條
第千四百七十七條參看

本文第八百五十四條ニ於テ仲裁契約ヲ補足スルノ規則ヲ定メタル
ハ即チ當事者各方ノ意思ヲ相付度シタルナリ又本文第八百五十五
條ニ定ムル手續ハ即チ仲裁契約ヲ實地ニ履行スルカ爲メ適當ナル
方法ト云フハシ蓋此ノ方法タルヤ往々仲裁契約ニ於テ實際合意
心_レ中_レ仲裁判断所ノ組織ノ方法ニ相符合スルモノナリ(空漏生國商

法草摺ノ理由説明參看)而シテ本文第八百五十七條ハ當事者ニ於テ
仲裁判断所ノ構成ヲ爲サントシテ遂ニ能ハス若クハ仲裁人其人ニ
原因スル事由ノ爲メ仲裁判断ヲ宣言セラルトニ至ラサル時其仲裁
契約ハ廢止シタルモノト看做サ、ルコトハ實ニ當事者ノ意思ニ疾ル
場合ニ付キ定メラレタル所ナリ蓋仲裁契約ニ指定セサル仲裁人カ
其義務ヲ不当ニ遲延セシムル事ニ於テモ亦右ノ場合ニ於ケル如ク同
一ナルハシ然レ共ノ場合ニ付テハ本法第八百五十八條第二項ニ依
テ忌避ノ原因ト爲スハキナシ)但其忌避カ成立ツ以上ハ即チ其仲裁
人ハ欠缺スルニ至ル故ニ本文第八百五十七條ニ依ラサル一カヲサ
ルナリ
又本法ニ於テ更ニ其補充規則ヲ擴張シテ以テ当初ヨリ仲裁契約ニ
一定ノ人ヲ指名シテ仲裁人ニ選ハサル場合ニ付テモ是亦之レヲ補

足スルノ規則ヲ設ケ置クモ以テトス即チ之レニ反シ^{仲裁}契約ニ一
 定ノ人ヲ指名シアリタル場合ニ於ケル補足規定ヲモ設ケサルハカ
 ラストスルハ蓋多クニ非ラサルナリ如何ントナレハ即チ一定ノ人
 ヲ指名シアリタルハ当事者元末其指名シタル仲裁人ニ限り判断
 ヲ受ケント欲スルモノト認定セサル可カラサレハナリ是ノ故ニ指
 名シタル仲裁人ノ一人カ欠缺シ又ハ此レニ委属シタル職務ヲ引受
 ケス若シテハ施行セサル場合ニ方テ当事者更ニ合意ヲ為シ是レカ
 救護ヲ計ラサルハ即チ該仲裁契約ハ遂ニ無効力ニ帰セサル可カ
 ラサルナリ(本法第八百五十九条第一條)查
 公然ノ職官負ハ仲裁人ニ選定セラレ得ハキヤ否ノ問題ニ付テハ獨
 乙普通法ハ之レヲ是認シ字漏生国訴訟法草案第千三百六十六条及
 七北部獨乙聯邦草案第千六百六十一条ニ於テハ之レヲ否認セリ即チ
 本法ノ原則ハ公然ノ職官負ヲ選定スルヲ禁止セスト解答セサルヲ
 得ス然レ到底公然ノ職官負ハ果シテ仲裁人ノ選定ニ應シ得ルヤ否
 ヤハ各聯邦ニ行ハルニ法律ノ規定スル所ニ恪遵セサルハカラサル
 ナリ
第三條 本法ニ於テハ即チ仲裁契約ニ一定ノ人ヲ指名シテ仲裁人
 ニ選ミアルト否トノ二箇ト場合ニ付テ區別ヲ為スナリ而シテ(從末
 ノ法制ニ反シテ)後令仲裁人ヲ指名シアラサル仲裁契約ナリ之レ
 ヲ有効カトナス(上ノ第二條參看)蓋之レヲ仲裁契約ニ於テ仲裁人ヲ
 指定シ置キタルハ其契約カ無効ニ帰スルニ比スレハ即チ当初ヨリ指定
 セサル場合ニ於ケル仲裁人適欠缺ヲ為スモ尚ホ其契約ハ無効ニ至
 ラサルノ便利アルナリ(本文第八百五十七條及七本法第八百五十九

条第一項並ニ其第一卷益蓋本文第八百五十四條乃至第八百五十七
條ハ仲裁人ヲ指定シテアラサル仲裁契約ニ付テ規定シタルナリ
第四條選定權 仲裁契約ニ於テハ當事者ノ仲裁人選定權ニ付テ隨
意ナル合意ヲ為シ得ルナリ即チ當事者ノ一方ノミニ之レヲ全委シ
得ルニ是レ本法ハ北部獨ニ聯邦中條第九百五十八條第一項ニ於ケ
ル制限主義ノ規則ヲ採ラスレテ而カモ本文第八百五十五條ノ冒頭
ニ於テ當事者ノ一方ニ全委スルノ合意モ有効ナル意ヲ暗示シレ
タル所ナリ實ニ此ノ場合ニ付テノ規則トテハ特更ニ明定セズ只選
定權ヲ有スル者ハ本文第八百五十五條ニ依リ其選定ヲ相手人ニ通
知シ又相手人ハ其選定ヲ怠ルル場合ニ方テ有權者ニ對シテ本文第八
百五十五條第一項第八百七十一條ノ規定ニ準拠シ訴ヲ提起ス可キ
ナリ

又當事者間ニ於テ第三者ヲシテ仲裁人ヲ選定セシムルキヲ契約
シ得ルナリ而シテ此ノ場合ニ於テ其第三者カ右ノ依頼ニ應ジ得サ
ルカ若クハ應ズルヲ好マサルハ即チ其仲裁契約ハ無効ニ歸スル
ナリ(本法第八百五十九條第一ニ均シ)○法蘭西民法第九百九十
二條卷益若シ第三者カ仲裁人ヲ選定シタルハ即チ本文第八百五
十七條ヲ適用シテ必要ノ場合ニ方テ第三者カ後々他ノ仲裁人ヲ
選定スルキナリ

第五條 解判断上席人(一) 本法ニ於テハ此ノ如キ當事者ノ意思ヲ補充ス
ル規則ヲ設ケテ摺ケサルナリ(本法第八百五十九條第一條卷益乃チ
バダン國第九百七十七條サツセシ民法第九百四十四條第二十三條第九百
二十四條ニ於ケル如キ規則ヲ採用セザルナリ)殊ニ本文第八百五十
四條第八百五十五條ニ依レハ當事者ノ各方同數ノ仲裁人ヲ選定ス

ハクシテ而シテ仲裁人ノ意見可否同敷ニ付カル、此ノ仲裁契
 約ハ^{若シ}契約中^{此ノ}場^{合ニ}付テノ救済処分ヲ定メアラサレハ^{本法}
 第百五十九條第一項^項ニ依リテ仲裁判斷ノ効力ヲ失フナリ^{本法}第百
 五十九條第二項^項ニ依リテ^{此ノ}如クニシテ以上ニ述フル^{此ノ}聯邦法ノ規定
 廢止シ^テハ^{本法}實施法第十四條^ニ依リテ

第六條^ニ依リテ公然ノ職官^並事務者ヨリ之レヲ選定スル場合
 ハ勿論裁判所ヨリ選定スル^ハ在リテ何人モ必ズ選定ニ應セ
 サル^ルハカラサルノ義務^{アリ}ト爲サ^ルルナリ^ニ但^シル^ルニ國第百三而二
 十三條第一項^ニ依リテ蓋^シ本法第百四十五條^ニ依リテ而^シ七十二條^ニ依
 リテ規定ハ揭^ケアラサルナリ^又此ノ主^クタルヤ公然ノ職官^並並ニ裁判
 所ニモ及^スル所^トス^ルハ^{本法}第百三十八條^ニ依リテ而^シ三十九條^ニ依
 リテ^帝帝國法ニ依^リテ印^テ帝國大審院ハ仲裁判斷所ノ選定ニ應スルヲ得

ルナリ^乃テ帝國高等商事裁判院ハ私法上及^ヒ公法上ノ争^ニ付キ屢
 仲裁人ノ職務ヲ執行シ^{タリ}
 上ノ理由説明ニ付^テ公然ノ職官^並ニシテ仲裁人ノ選定ニ應シ得ル
 ト否^ヤハ各聯邦法ノ規定ニ一任^スト^ス云^フト^ス虽^モ上ノ^第二條^ニ依
 リテ^必免^有効ニ^現行セ^ラル^ニ、聯邦法ヲ指^スニ^過キ^ケル^ノニ^{本法}
 實施法第十四條^ニ依リテ^此ハ^巴バ^チン^國第百七十七條^ニ依リテ^此ハ^實ニ^其効
 カ^ヲ保^有セ^サレ^ハナ^リ

仲裁人ノ選定^シタル者^ハ必ズ^其仲裁人ト^シテ^其職務ヲ^行ハ^スル^ニ必^ズ
 該人^ノ職務^ヲ執行^シテ承諾^シ且^ニ此ノ契約ヲ^破ラ^サル^ハキ^コト^ヲ
 セサル^ル可^カラス^ル也^ト本文^第百五十七條^ニ依リテ^其仲裁人^ノ職務ノ
 施行ヲ^拒絶^スル^キヲ^以テ他^ノ仲裁人ヲ^選定^スル^ノ理由^トナ^セル^所
 ニ依^リテ^印印^テ及^令一^トニ^シテ^之レヲ^承諾^セル^モ其^其仲裁人ニ^對シ^テ強

制的ノ権ヲ逞フスルヲ欲セサル本法ノ主事ナルハ判然ナリ(本法
第百五十九条第^三條卷^三第^三條)此ノ主事ニ付テハ字漏生国草案ノ理由
説明ニ於テ明言セリ又本法ニ於テハ⁷バイルン国第^三百^三十^三条
バデン国第^八十七^七条及ヒ⁷ザクセン国民法第^四百^二十^四条ニ於
ケル如ク或ル人当事者若クハ裁判所ノ選定ニ應シ仲裁人トナリ
ルモ遂ニ²其取ノ義務ヲ尽ケニルハ該仲裁人ハ賠償義務ヲ負フヤ
否ヤノ向題ニ付テ更ニ規定スル所ナシ蓋此ノ事タルヤ猶ホ仲裁人
ヨリノ報酬並ニ立替金²以²請²ノ請求ト共ニ民法上ノ規定ニ属スヘキ
モノトス(バイルン国第^三百^二十^三条卷^三第^三條)而シテ²独²乙²帝国裁判所^上
費用法中按ニハ仲裁人ノ手数料其他ニ付テ規定スル所アルヲ見サ
ルナリ)

(第七條頁面上ノ通知(本文第^八百^五十^五條)) 相手人ニ為スヘキ²頁面
上ノ通知ハ任意ノ方法ヲ以テ之レヲ得ルナリ但手續ヲ為ス者ハ世
通知ヲ為シタル事實及ヒ²頁(時)日ニ付テ十分ナル証拠ヲ保存シ置キ
テ以テ空ノ一週ノ期限ヲ経過セシメタル場合(本法第^二百^三十^一條卷^三第^三條)ノ
需用ニ供セサル可カラズ此ノ故ニ通知ヲ為スニハ²執行吏ノ公文(本
法第^二十^二條第^五十二^二條以下卷^三第^三條)若クハ裁判所登記ノ調卷ノ謄
本ヲ送付スルヲ便宜トス(本法第^四百^六十二^二條第^四百^六十三^三條第^八
百^七十^一條卷^三第^三條)

(第八條裁判所ニ為ス申立(本文第^八百^五十^五條第^二項)) 本文ニ於テ
ル申立ハ本法第^八百^七十^一條ノ仲裁人選定ニ関スル訴訟ニ同ク該
条ニ掲ケル裁判所ニ之レヲ為ス可キナリ而シテ訴訟ハ相手人仲裁
契約ニ付テ争フ時ニ於テ²其契約ヲ承認セシムル為メニ之レヲ提起
シ若クハ之レヲ擴張セサル一カラサルナリ(本法第^二百^三十^一條第^三條)

二五五十三条参看何レトナレハ裁判所ハ確乎タル仲裁契約之レアラサレハ仲裁人ヲ選定シ得サレハナリ

〔第九解通知ノ効力(本文第八五十六條)〕字漏生国草案ノ理由説明

ニ曰仲裁人ノ選定ハ通知昏ヲ相手人カ受取りタルノ時期ヲ以テ其効力ヲ生スルナリ其之レヲ受取ルマテハ通知昏ヲ取戻スコトヲ為

得レハナリ(商法第三而二十条参看)

選定者ノ有スル忌避権カ通知昏ヲ送達シタル為メ如何シノ程度ヲ以テ減却スルヤニ付テハ本法第八五十八條第四解ニ就テ會得ム

一レ

〔第十解補充仲裁人〕抑本文第八五十七條ノ主文トナス所ハ即チ

契約ニ因ラステテ本文第八五十五條第一項ニ從ヒキ事者ヨリ選定セラレ又ハ第八五十五條第二項ニ從ヒ裁判所ヨリ選定セラレ

タル仲裁人カ適欠缺或ル理由例之ハ本法第八五十八條ニ因リテモスルト虽モ敢テ仲裁契約ノ無効ニ歸スル理由ヲ成サスト云フニ

在ルナリ(上ノ第二解参看而シテ此ノ欠缺シタル場合ニ付テハ手續ニ関シテハ本文第八五十七條ニ於テ唯其選キタル仲裁人カキ事

者ノ選定セル者ナリキニ限り明定スルノミ然レモ右ノ主文タルヤ裁判所ヨリ選定シタル仲裁人ニ関スル場合ニ在テモ亦此レニ基^拠キ

ケル可カラサルハ敢テ喋々ヲ要セザンモノト云ハサル可カラズ但更ニ他ノ仲裁人ノ選定スルナラズニ至テ仍ホ^再選定セシムハ

ハキニ非ラス必ズ其申立ヲ為シテ直ニ裁判所ヨリ選定セシムハキモノニシテ即チ是レ必ズ契約承認ノ訴訟上ノ第八解参看ニ對シ

テ言渡シタル判決ヲ執行スルト云フノ事實ニ外ナラサルナリ

第百五十八條 仲裁人ノ忌避ニ付テノ條

仲裁人ハ裁判官ノ忌避スルノ推利アルト同一ノ理由及ヒ要件^{ニ因}以テ忌避セラレハコトヲ得

其他忌避ハ仲裁契約ニ於テ選定セルニ非ラサリレ仲裁人カ其義務ノ履行ヲ不當ニ遲延スル時モ亦之ヲ為スコトヲ得

未成年者^{婦女}若シテ啞者及ヒ公権ヲ剝奪セラレタル者ハ之ヲ忌避スルコトヲ得

第一解理由ノ説明 羅馬法ニ於テハ或ル人妻ヲ定メテ之レヲ仲裁人タルノ能カナキ者ト規定セリ而シテ法朗西國法制ハ無制限ニ字漏生國法制ニ於テハ幾多ノ制限ヲ立テ何人モ仲裁人ノ選定ニ應ズルヲ得セシメタリ然ルニ字漏生國訴訟法草案第千三百六十六條及ヒバイルン國訴訟法第千三百二十二條ニ於テハ即チ獨乙普通法ノ

慣行並ニ近末ノ實驗ヲ參照シテ仲裁人ニ不適當ナル人妻ニ付キ規定スルヲ必要トナシタリ

然レ法律ヲ以テ持更ニ被選能カニ付キ制限ヲ定メサル以上ハ此ノ仲裁^判裁斷手續ノ性質ニ於テ制裁ナキヲ當然トナス一ニ唯概シテ仲裁人タル者ニ必要ト為ス一キハ即チ思慮慎重ニシテ論說適正ナル

ニ在リ此ノ他ニ至テハ當事者カ自ラ信用ヲ措^{キ且其人ノ意見及ヒ}能カヲ敬崇スル^{人ノ選定スルニ}作シテ可ナリ人ヲ選定スル可ナリ而シテ補充的ニ

管轄裁判所カ選定スル中ハ本法第百五十五條第百五十七條參照^{必要}即チ裁判所ハ適當ナル人物ニ就テ選拔スルモノト豫期ス一キナリ又國家ハ之レニ對シ監督ヲ為スノ責^{必要}アルス只國家ハ若シ當事者若クハ裁判所ヨリノ選定ニ過失アル場合又ハ當事者ノ一方カ其對手人ニ對シテ自^身許サレタル權利ヲ障害セントスルカ如キ濫用ヲ

企ツル場合ヲ防禦スル為メニ範圍ノ汎博ナル忌避推ナル法制ヲ規
 定シテ以テ豫備ヲ為セハ即チ其責ヲ尽スルニ足レルナリ(注)漏生国
 商法章條ノ理由說明卷三右ノ趣旨ハ即チ本法ニ於テ一ニハバテ
 ン国訴訟法北部独乙聯邦章條法^{ザネウ}西市法典及ヒ白耳美國章條ノ先
 蹤ニ倣ヒ此ノ仲裁人ノ被選能力ニ制限ヲ設ケス一ニハ忌避ハ當ニ
 裁判官ヲ忌避スルト同一ノ理由及ヒ要件ニ因レルノミナラス(示)法
 第四十三條第四十四條第四十五條第三項參看尚ホ且独乙普通法字
 漏生国訴訟法中條及ヒバイルン国訴訟法ニ於テ回避ノ理由トナレ
 タル場合ニ於テモ忌避ヲ為サレハルヲ許シタル所以ナリトス
 (第三解制定ノ沿革) 北部独乙聯邦章條第六十二條ハ其第三項
 ニ於テ當事者ノ一方ハ其自ラ選定シタル仲裁人ニ付キ忌避ノ理由
 カ選定ノ後始テ成立ケ又ハ之レヲ知ラシムル中ニ限り其仲裁人ヲ
 忌避スルヲ得ル旨ヲ規定ス此ノ他ハ各中條相同シ又国議院委員
 会ニ於テ異議ナク採用シタル(下)第四解參看
 (第三解仲裁人タルニキ能力) 本條ニ於テ仲裁人ニ選フ人物ニ關レ
 テハ一ニ書事者及ヒ裁判所ニ放任セリ上ノ第一解參看後テ又忌避
 ニ付テノ規則ヲ必要スルノ結果ヲ見ルナリ而シテ「カ」クセシ国民法
 ニ於テハ婦女ハ仲裁人タルヲ得サルノ規定アレ氏亦法實施法第十
 四條ニ依リ今ヤ廢止セラレタルハレ
 本法第四十二條第一項ニ照セハ即チ本法第四十一條ニ拠テ法律
 上裁判官ノ除任セラレ、所ノ理由モ亦忌避ノ理由ト為シ得ルナリ
 然ルニ本法第四十二條第一項以テ彼ノ何人モ自己係ル事件ニ付キ
 裁判官タルヲ得ハカラストノ古格言ヲ採定シアル所ニ依レハ即チ
 此ノ主事ハ亦仲裁人ノ判断ニモ適用セシムルモノ、如シ^{然リトス}殊ニ^本

法第百六十七條ヲ^{視レハ}故ラニ本法第五而四十二條第二ニ於ケル
判決無効ノ理由ヲ除キテ摺ケ^ス本法第百六十七條第一條^ニ於テ
仲裁人ノ無能力ナル^ト又ハ忌避セラル^ルハ^ヤ仲裁判断ニ對ス
ル不服申立ノ理由タル^ハカラサル^ト是レ蓋本法第百六十三條
ノ規定ニ因リテ右ノ事項^ヲ本法第百六十七條第一中ニ包含セシ
メ難ク^レハナ^ク

而シテ本法第百五十一條ニ於テ^テ親キ^キ明カサ^ルル仲裁契約ナ^リ且
其資質ニ於テ必ス一名若クハ数名ノ第三者^ヲシテ判断ヲ為サシム
ル^ノ主要件ト為ス^ハキナ^ク然レハ即チ争ヲ為ス者^者カ^ハ白^ク其^レ繫
争事件ニ付テ^テ仲裁人ニ^ニ選定セラ^ル得^ルル^ノ主要ハ相撞著スル^ルヲ知
ル^ハ是^レニ於テ^ハ如ク相撞著抵^格ス^ルル^ル規則ハ向來終^ニテ無効
タル^ハク從^テ其^レ如キ無効法制ニ依^リテ為^レタル^ル判断ハ決^シテ仲
裁判断ト為ス^ニ足^ラサル^ト乃^チ及^テ令^之レ^ニ對^スル^ル不服訴訟ヲ為
サ^ルル^ルモ初^ヨリ効力^ノ之^レナ^キモ^ノタル^ト

又本法第四十一條ノ^ハ他^ノ回避理由ハ仲裁判断手續ニ於テ^ハ單
純ニ忌避ノ理由タル^ハキナ^ク然レ^レテ^ハ實行ス^ルニ^ハ方^テハ^ハ反^テ利
便ナル^ハシ^テ次^ニ第四條^ニ於^テテ

公選取^ル官員ノ仲裁人タル^トニ付テ^ハ本法第百五十四條乃至第百八
百五十七條第六條^ヲ參^照ス^ルハ^シ

第四條^ニ於^テテ^ハ回避^ノ理由^ハ上^ノ第二條^ニ述^ベタル^ル北^部獨^乙聯邦^中條^第百^六
十二條^第三^項ニ^ハ明^定ス^ル規則^ニ付^キ字^漏生^固中^條ノ^理由^ヲ說明^ス
テ^ハ無論^ノト^トシ^テ若^シ忌^避ノ^理由^ヲ知^ラズ^シア^リト^カラ^ズ選^定シ^テ
ル^ハ自^ラ忌^避推^シテ^ハ筋^合ナ^レハ^ナト^ト說^明セ^ル而^シテ
我^カ内^閣代^理員^モ亦^同ノ^意見^ヲ演^ヘテ^ハ然^レモ^モ本法^ノ理由^ヲ說明^ス

モ之レニ付キ況ヲ為サス又本法ニモ此ノ如キ規則ヲ設定スルヲナ
シ反テ本法^第第一項ニ付^{（説明）}本法第三而七十一條第一項ニ及ビ回避ノ
要件ニ関シ本法第四十一條乃至第四十三條及ヒ第四十四條第四項
ノ規則ヲ指示シタリ然レハ本法第四十三條ニ照ラシ^時事者任意ニ
仲裁ヲ受ケ始メタル以上ハ独リ偏頗ノ嫌疑ニ関スル^時回避權ハ消滅
スルモ本法第四十二條第二項^時危急仍ホ回避ニ関スル^時回避權ハ本法
第四十一條及ヒ第四十二條第一項^時危急消滅セザルナリ本法第四十
一條第一解第二項第四十三條第三解^時危急
右ノ趣^時ハ殊ニ上ノ第三解ニ況フル所ニ緣由シテ必ス仲裁人ニ付
テモ固ニ適用セラレザル可カラザルナリ乃チ仲裁判断ニシテ未
当事者ニ送達セラレザル向ハ本法第八而六十五條^時危急当事者双方
ハ各本法第四十二條第三項^時危急本法第四十一條ノ回避理由ニ因リ
其仲裁人ヲ当事者ノ一方自ラ若リハ相手人カ又ハ裁判所カ之レヲ
選定シ^時ルモノニ論テ^時回避シ得ハキナリ然リ而シテ右ノ送達ノ
時期以後^時ハ即チ本法第八而六十三條ノ第八而六十七條第一ト共ニ
適用セラレ^時裁ハザル限リハ上ノ第三解ニ述フ所ヲ除外例トシテ
回避理由モ亦其効力ヲ有セザルモノトス
本法第四十三條ニ依レハ即チ自ラ仲裁人ヲ選定シ^時ル当事者ノ一
方ハ其判断ヲ任意ニ受クル以前ニ方ニ本法第四十三條^時危急其^時回避
ノ理由カ選定以後始テ成立テ又ハ始テ之レヲ知^時ルモノトシテ明示
（本法第二而六十六條^時危急スルニ非ラサレハ偏頗ノ嫌疑ノ理由トス
ルノ^時回避ヲ申立ルノ權ヲ失フモノトス而シテ裁判所ノ選定シ^時ル
仲裁人ニ付レテハ当事者双方共ニ偏頗ノ嫌疑ノ理由トシテ^時回避ス
ルヲ得ハシ本法第四十二條第三項^時危急右ノ場合並ニ相手人ノ選

定シタル仲裁人ヲ忌避シタル場合ニ付テハ本法第四十三條及七
四十四條第四項ヲ準用シ得孰レノ場合本法第八百六十三條ト第
八百六十一條第一トノ場合ヲ除クニ於テモ仲裁判断ノ送達セラル
ト其ニ彼ノ忌避理由ヲ有効ニ申立ルノ機會ハ之レアラサル
上ノ第三解本法第八百六十六條第八百六十七條及本條第三項
ニ因スル忌避モ亦判断送達後ハ申立ルノ効能ナシ本法第八百五十
五條ノ場合ニ局限セシモノ尙ホ本法第八百五十九條第一及之レ
ニ及^シ本條第二項ニ於ケルモノハ仲裁人仲裁手續開始ノ後初テ生
スヘキモノニシテ即ケ本法第四十三條ノ適宜セサル所ナリ但性質
質上亦仲裁判断ノ宣言後ニ至リテ消滅スヘシ

第五解忌避訴訟 忌避ノ理由ハ本法第八百七十一條ノ規定ニ拠リ
訴訟ノ以テ之レヲ申立テサル可カラズ殊ニ裁判官カ仲裁人ノ選定

ヲ判決ヲ以テ本法第八百五十四條乃至第八百五十七條第一及第二
項申渡シタル場合ニ於テモ亦然リトス然レ其判決宣渡以前ニ成立セ

若クハ当事者ノ知ラズル所トナリレ忌避理由ニ因スルハ其ノ判
決ノ確定ハ当事者之レニ對シテ上訴ヲ提出セシテ暗黙ニ其仲裁人
ニ服従スル限リ忌避訴訟ノ提起ヲ遮断スヘシ本法第四十三條第四
十四條第四項及但上告ヲ許サレサル控訴審ノ判決又ハ上告審ノ
判決ニ於テ初テ仲裁人ニ指定セラレタル間ニ於テハ其ノ
限ニ在ラス

偏頗ノ嫌疑ニ因レル忌避ハ必ス本法第四十三條ニ於ケル豫案手續
ヲ省略シ且本法第八百六十七條第一及第二項不服ハ百六十三條トノ不服
申立ノ方法ヲ以テ確保スル為メ仲裁判断所ニ申立テサル可カラサ
ルナリ又当事者注意ヲ為セント欲セハ本法第四十一條ノ場合即ケ

上ノ第三解ニ於テ述ヘタル場合ニ方テモ尚ホ仲裁判断所ニ申立ルヲ美トス

仲裁判断所ハ本法第八十七一条ニ依リ忌避ニ付キ自ラ裁判ヲ為サ、ルニシ然レ忌避ノ申立アリタリトテ本件ニ付キ審理シ且判断ヲ宣言スルヲ妨ケサルナリ(本法第八十六三条及ヒ其第一解参見)

第八百五十九条 (仲裁契約ノ廢罷ニ付テノ条)

仲裁契約ハ当事者ノ合意ヲ以テ左ノ場合ノ為メ豫メ処置ヲ定メサリシ時ハ其効力ヲ失フモノトス

第一 契約ニ於テ一定ノ人ヲ仲裁人ニ選定シ其仲裁人中ノ或ル人カ死亡シ又ハ其他ノ理由ニ因リテ欠缺シ又ハ其職務ヲ引受クルコトヲ拒ミ又ハ其仲裁人ト取結ヒタル契約ヲ解キ又ハ其義務ノ

履行ヲ不当ニ遲延シタル時

第二 仲裁人カ其意見ノ可否同敷ナルコトヲ当事者ニ通知シタル

時

(第一解理由ノ説明) (本条第一ニ對スル理由ハ往々本法第八百五十

四条乃至第八百五十七条第二解第四項中ニ説明セリ) (本条第二ノ規

定タル意見ノ可否同敷ノ効力ニ付テハ即チ法例西国诉讼法第九十

二条字漏生国同上中條第九百六十八條及ヒ北部獨乙聯邦中條第

千而六十三條ノ主クニ同シキナリ) 而シテ獨乙普通法並ニ字漏生国

裁判通則第一節第二章第七十條ニ於テハ仲裁人意見可否同敷ナ

ルハ及令其仲裁人等カ豫メ其重者口リ之レカ委任ヲ受ケアラハ

サル場合ト雖モ更ニ上席人ヲ選定シテ決スルノ趣ヲ明定セリ然

レ其ハ救助方法ニシテ蓋必ス仲裁判断ニ依リテ其ハ可カラサル

強制的仲裁判断所ニハ適當スヘント由ニ任意自由ノ仲裁手續ニハ
 妥當ナラサルヘシ蓋意見ノ可不同ナルハハ更ニ一ノ判断上席判断人ノ選定
 コリモ寧口上席判断人ヲ選ハントスルコトモ當事者ニ於テ処理スヘ
 キナリ既ニ選定セラレタル仲裁人ニ付共ニタル職務内ニハ上席人
 ヲ選ハノ權利ヲ包含シアルナルヤ明カナリ李福生国商法ノ理由説
 明書長巻及令其依托条件中ニ上席人ノ選定權ヲ以テシタルモノト
 ナス其選ハル、上席人其人ノ如何ニ依リテハ仲裁人間ニ相當
 ノ意見ニシテ多數ヲ占メサルコト之レアルヘク後テ先ニ善良ナル目
 的ヲ達シ得サルコトアルヘシ是レニ付テ又説ヲ為シテ曰此ノ如キ場
 合ノ為メ法律ヲ明定シ置テ必要トス乃チ意見ノ可不同數ナルハ
 上席人ヲ選定センコトヲ手續ノ為メ當事者ヨリ管轄裁判所ニ申立テ
 談裁判断之レヲ選定スルヲ要ス外此レ此ノ趣意タルヤ仲裁契約中
 ニ一定ノ人ヲ仲裁人ニ選定シアル場合ニ於テハ即チ當事者ノ意思
 ニ抵触スルノ方法ト云フヘキナリ此ノ理由ニ因リハデン国訴訟法
 第千七十七條バイルン国第千三百三十五條ニ於テナル仲裁人ハデン国
 法又ハ當事者バイルン国法ヲシテ五ヶニ上席人ヲ選定センメント
 ノ規定カ採用セラルヘシ至ラズシテ即チ意見可不同數ノハ仲裁
 契約ハ最早実行スヘカラス故ニ消滅ニ帰シシムモノト看認セルノ
 趣意ノ最モ穩當ト為スナリ本法第八百五十四條乃至第八百五十七
 条第四條參看
 法蘭西国訴訟法第千十二條李福生国商法草案第千五十二條及ヒバ
 デン国訴訟法第千八十五條ニ於ケル仲裁判断カ一定ノ期限向ニ宣
 言セラルヘシ至ラサルハ仲裁契約ハ消滅スヘシト云フノ規定ハ
 必竟繫争事件ノ万差千狀決シテ一概ナラサルコトヲ知ルハ妥當ノ規

則ト云フ一カラス是ニ於テ乎即チ本法ニ於テ仲裁人不当ニ責務ノ
施行ヲ遅延スルヤ其仲裁契約ニ違反セラルルニ仲裁人ナリト志
避ノ理由トナシ本法第八百五十八条第二項各号又仲裁契約ニ指名
セラレタル仲裁人キル件ハ契約消滅ノ理由トナス^規定ヲ設ケテ
ルナリ

独乙普通法ニ於ケル仲裁契約カ相続人ニ及ホサレル限法^西國許
訟法第九百十五條ニ於ケル^ル終体ノ相続人カ未成者ナリ限^ル其契
約ヲ為シタル当事者死亡スルカ為メ該契約ハ廢棄スルトノ規則ハ
妥當ト云フ一カラス蓋判断ニ付スヘキ事ノ原由タル權利上關係ハ
權利者其者ノ如何ニ拘ハラヌ自ラ仲裁判断ヲ為^サルハルノ成素
ニ適合スルモノ之レアレハナリ今本法ノ採レル主義ハ即ケバイル
ニ國訴訟法^新滿生國南法草按北部獨乙聯邦訴訟法中條及ヒ白耳
國草按ノ採レル所ノモノニ同シ

当事者ノ一方破産ニ係レルニ因リ仲裁契約ノ廢棄ヲ採用セサルモ
亦前項ノ理由ニ因レルナリ
第二條制定ノ沿革 字滿生國中條及ヒ北部獨乙聯邦中條ニテハ本
條ノ規定ノ單一ニ仲裁契約ニ仲裁人ヲ指定シタル場合ニノミ局限セ
リ^其他各中條相同シ而シテ本條ハ國議院委員ニ於テ異議ナリ採
用セラレタル

第三條仲裁人ノ退任 抑本條第一ノ規則ハ當事者ノ意思ヲ忖度シ
テ定メタルモノニシテ即チ仲裁契約ニ違反セ^ル仲裁人ヲノミ指ス
ナリ^本法第八百五十四條乃至第八百五十七條第二條第四項各号又
先何人ト雖モ仲裁人ノ職ヲ執ラザン可カラストノ義務ヲ被ケラス
^本法第八百五十四條乃至第八百五十七條第六條各号而シテ仲裁人

自ノ更締結シ契約契約ノ解キタル片ハ即チ本条第一ニ依リ仲裁契
約ノ消滅ヲ致タスノミ乃チ仲裁人ニ対シ強制的ノ推利之レアラス
只各聯邦法ニ從ヒ賠償義務ハ之レカ为メ生スルコトアルヘシ本条第
八五十四條乃至第八五十七條第六條參見

本条第一ニ「其他ノ理由」因リテ欠缺シトアル明文ニ照セハ元來其
退身ノ理由ハ必スシモ重大ナルヲ要セサルナリ乃チ彼ノ忌避ノ理
由ヲモ州ノ中ニ含蓄スヘシ本条第八五十八條第四條參見

「第四條仲裁契約ノ消滅」本条第一ノ意ハ「於ケル契約ノ廢止ハ本
法第八五十一條ニ從ヒ必ス訴訟ヲ以テ申立テサル可カラス而シ
テ州ノ起訴ニ付テハ本法第八五十八條ノ第五條ニ於テ忌避訴訟
ニ関シ述フル所ヲ適用スヘキナリ」其職務ノ邊延カ即チ不当ノ處为
ナルヤ否ヤニ付テハ裁判所其場合ノ情况ニ從ヒテ判断ヲ为スヘキ

所ナリ「上ノ第一條第二項參見」○本条ニ明記スル外ノ消滅理由ハ其
契約ニ関スル一般ノ原則ニ係ラサル限リ消滅ノ理由ト看認メサル
ナリ「上ノ第一條第三項第四項參見」而シテ當事者双方ハ仲裁契
約ニ合意シ以テ廢止得ヘリ「バレン」国第八十五條第二項參見
果作偽又ハ無能力ヲ理由トシテ不服ヲ申立ルコトモ亦為レ得ヘリハ
更ニ并テ要セサルナリ「本法第八五十一條第八五十三條第八
六十七條第一第八六十八條第二項參見

「第五條意見ノ同數」意見ノ比較的多數ハ亦本条ニ於ケン可否同數
ト看做サルナリ「本法第八五十四條並ニ第八五十三條第八
六十四條ノ第三條參見

第八百六十條「仲裁判断所ノ手續ニ付ケル條

仲裁人ハ仲裁判断ノ宣言前当事者双方ヲ審訊シ且争ヒノ原因トシ事
 件内係リ索知ス可シ但其實知ハ之ヲ必要ナリト認めル時ニ限ル
 仲裁手續ニ付キ当事者ノ合意ナキ場合ニ於テハ仲裁人更見込シ以テ
 其手續ヲ定ムルモノトス

(第一解理由ノ說明) 法例西国訴訟法第千九条第千十九条字漏生国
 裁判通則第一篇第二章第百七十一条字漏生国商法中第千五十四
 条第千五十九条バイルレ国第千三百三十二条ニテハ当事者更仲裁
 契約ニ別段ニ定メアラサルハ仲裁人ハ訴訟法^{規定ニ後之レ}及民法^{規定ニ後之レ}
 後才判断ヲ为ト^ルキ旨ヲ^テ判定ス判断ス可シト^ル明定又又バ^レ国
 訟法ニテハ訴訟法云々ノ規定ナリ偏^ニ民法ノ規定云々ノ明文アリ
 字漏生国訴訟法草案ハ二法ノ規定ニ從フヘキ旨ノ明文アリバ^レ
 国第千七十三條第千七十五條字漏生国訴訟法中第千三百七十七條
 第千三百七十三條々々免ゼヌウ存法典自^ニ耳^ニ国中^ニ梅及^ニ北部^ニ独^ニ乙^ニ琳
 和草案ハ右ノ二法ノ規定云々ノ明文ヲ掲^ケル
 抑^テ当事者双方^ノカ一ノ^ニ仲裁判断ニ服從スル所^ノ顯况ニ於テ^ハ当事者ハ
 或^レ緊急事件ノ程^式上ノ内係ニ付キ不^レ羈自由ナル取扱ヲ受ケント欲
 スルノ意思ナルトハ既ニ明白ナリ殊ニ^ハ其^ニ契約中^ニ一定ノ人物^ヲ仲裁
 人ニ選定スル場合^ニ在^リル^ニ必スシモ世人^ノハ訴訟法上ノ規定ヲ恪^テ遵
 スヘルト豫^メ観^テシ^テ履行^スル^レハ豈^ニ之^レア^リ得^ヘケンヤ^ハ此^ノ故^ニ元^來仲裁
 判断ナルモノ、本^色ト^レシ^テハ其^ノ手續ニ^テ内^レシ^テハ仲裁人ニ^テ尤^モ不^レ羈
 任意ナル位地^ヲ付^ル其^レヲ^ハ訴訟法上ノ拘束ヲ脱^スル^ニ獨^リ不^レ當
 事者ノ審訊ヲ^ハ為^サス^ル事^件ノ^レ原因^ノハ内係^ヲ索^知スル^ヲナク^テ
^テ判断^ヲ為^サント^スル^ヲ禁^スル^ノ制裁^ヲ付^スレ^ハ即^チ頗^ル其^ノ商^事
^ヲ得^テリ^トス^ルハ^レ

又当事者カ仲裁判断ニ依テ紛争ヲ解理スヘシト合意スルノ意思ヲ
推究スレハ即ケ現行ノ法律ニ依レハ頻々続出スヘキ所ノ困難及ヒ
煩雜ヲ避ケ^且仲裁人カ公正ノ心証ヲ以テ定メタル所ノモリハ当事者
間ニ於ケル^定心理ナリト甘後セント欲スルニ外ナラス乃チ自耳^定固
中^定按^定明言スル^定如ク^定仲裁人ヲ^定当事
者向^定ノ^定平等^定ノ^定媒^定公平ナル^定調停者ト名^定做ス^定ヲ^定通例ト^定ス^定殊ニ^定当事
者カ自ラ法律ニ^定熟達セサル^定人ヲ^定選定シテ^定仲裁人ニ^定指名シタル^定場合
ノ如キハ^定必ス^定果シテ^定勉ル^定モノト^定做サ^定ル^定可カラサル^定ナリ^定是ニ^定於テ
係^定仲裁人^定カ^定判断ヲ^定必ス^定シ^定ヒ^定民法ヲ^定規定ニ^定従^定ヘ^定テ^定爲^定ス^定一^定キ^定ノ^定義
務^定アリ^定ト^定云フ^定テ^定初テ^定仲裁タル^定ノ^定本^定旨^定ヲ^定得^定タ^定リ^定ト^定云フ^定ヘ^定シ^定ハ^定下^定ノ^定第
五^定解^定卷^定第^定五^定條

本法ニ於テハ上^定末^定述^定フ^定ル^定所^定ノ^定主^定旨^定ヲ^定採^定用^定レ^定テ^定之^定レ^定ヲ^定明^定定^定ス^定ル^定ヲ^定猶
豫^定セ^定ス^定レ^定テ^定以^定テ^定當^定事^定者^定ニ^定合^定意^定中^定法^定令^定ニ^定反^定ス^定ル^定モノ^定ヲ^定モ^定定^定メ^定得^定セ
メ^定タ^定リ^定且^定之^定レ^定カ^定為^定メ^定仲^定裁^定判^定断^定ノ^定不^定破^定申^定立^定ニ^定関^定ス^定ル^定向^定題^定ニ^定対^定シ^定テ^定モ
容^定易^定ニ^定解^定答^定ス^定ル^定英^定一^定得^定ヘ^定キ^定位^定置^定ヲ^定保^定タ^定レ^定タ^定ル^定ナ^定リ

允^定ソ^定訴^定訟^定法^定上^定ノ^定規^定則^定ハ^定仲^定裁^定判^定断^定所^定ノ^定手^定続^定ニ^定於^定テ^定準^定用^定セ^定ラ^定レ^定サル^定ノ
中^定ニ^定執^定テ^定モ^定缺^定席^定手^定続^定ノ^定如^定キ^定ハ^定頁^定本^定末^定ノ^定性^定質^定ニ^定於^定テ^定且^定仲^定裁^定手^定続^定ノ^定主
旨^定ト^定相^定容^定レ^定サル^定所^定ナ^定リ^定以^定テ^定殊^定ニ^定之^定レ^定ヲ^定適^定用^定ス^定ル^定ヲ^定許^定サ^定ル^定ナ^定リ
抑^定當^定事^定者^定ノ^定一^定方^定カ^定審^定訊^定ニ^定応^定セ^定サル^定ヲ^定ハ^定仲^定裁^定人^定ノ^定判^定断^定ヲ^定為^定ス^定タ^定メ^定必
要^定ナ^定ル^定事^定件^定上^定内^定係^定ヲ^定察^定知^定ス^定ヘ^定キ^定責^定務^定上^定ニ^定毫^定モ^定影^定響^定ヲ^定及^定ホ^定サ^定ス^定然^定レ^定
ト^定テ^定又^定事^定体^定及^定ヒ^定争^定ノ^定本^定体^定ヲ^定定^定ム^定ル^定為^定メ^定ニ^定當^定事^定者^定ノ^定一^定方^定カ^定執^定審^定セ^定サ
ル^定ヲ^定場^定合^定ノ^定情^定况^定ニ^定従^定ヒ^定適^定当^定ニ^定判^定断^定ヲ^定為^定ス^定ノ^定權^定利^定モ^定亦^定敢^定テ^定妨^定害^定セ
ラ^定ル^定ヲ^定之^定レ^定ア^定ラ^定ス^定既^定ニ^定字^定漏^定生^定固^定訴^定訟^定法^定中^定按^定第^定千^定三^定百^定七^定十^定條^定ニ^定於^定テ^定
本^定條^定ニ^定採^定用^定セ^定ル^定所^定ノ^定上^定末^定述^定フ^定ル^定主^定旨^定ノ^定成^定績^定ニ^定付^定キ^定特^定ニ^定明^定文^定ヲ^定掲^定ゲ

タリ本法ハ之レヲ勿論ノトナシテ明定スルニ至ラス且此ノ理由ニ依リテバイルレ国訴訟法第千三百四十一条及ヒ字漏生国同上中梅片千三百七十四条ニ於ケル故障申立ハ之レヲ仲裁判断手續ニ準用セストノ明文ヲ掲示セサレナリ

〔第二解制定ノ沿革〕 各章称相同シ而レノ国議院委員会ニ於テ異議ナク採用セラレタリ

〔第三解法律上ノ審訊〕 審訊ノ方法ハ之レヲ仲裁人ノ定ムル所ニ任ス但審訊ヲ為サレル片ハ其仲裁契約ニ別段ノ定メナキ場合ニ於テ訴訟若クハ抗弁ヲ以テ仲裁判断ニ対シ不服ノ申立ヲ為シ得ルナリ〔本法第八百六十七条第四及ヒ第二項第八百六十八条第二項参照〕 第四解合意及ヒ上訴 上ノ第一解第四項ニ継キテ説明シテ曰裁判官ノ為レシムル判決ニ対シテ為スヘキ上訴ニ依テ仲裁判断ニ不服ヲ申立ルトハ蓋仲裁判断ニ性^付典^{スル}トシテ事件ノ終局トシテ和解ニ齊シキ性質ヲ以テレシムル趣意ト相抵触スル所ナリ又實際専事者ニ於テ上訴ヲ許サル、場合ニ在テモ自^高ラ之レヲ抛棄スルト多シ之レニ依テモ^既仲裁判断ニ対シ控訴ヲ許サルルヲ妥当トスヘシ加之訴訟法ノ主^旨ニ於テ之レヲ許シ能ハサレナリ乃チ本法ニ於テ仲裁人ハ訴訟法ノ規則ニ従ヘテ審訊シ且民法ノ規則ニ従ヘテ判断スヘキノ義務ヲ被ケラサレテ以テ上訴セントスルモ其基礎ヲ缺クテ以テナリ此ノ故ニ該事件ハ控訴裁判所、於テ新ニ審理セラレハヤリテ明記シアル片ニ限リテ控訴ヲ為シ得^ルトシテ^ル此ノ場合ニハ仲裁判断^ニ第一審ノ審判ヲ受ク^ル意味ヲモ含ムモノト云フヘシ果シ然レハ即チ結局仲裁判断ナルモノハ何ンタル價値ヲモ有セサレモノニ至ルヘシ

ニ至ルヘシ

是ニ於テ本法ハ独乙普通法向耳美国法制及ニ北部独乙聯邦中梅ニ
 依リ上訴ヲ許スノ規則ヲ定メ^{スレテ}猶ホ法朗西法制及ニ字漏生国
 法制ノ如クセス又バデン国第千八十三条バイルン国第千三百三十
 ハ条第千三百三十九条及ニ字漏生国訴訟法中按第千三百七十八條
 ノ如ク當事者カ之レニ付キ合意レアル場合ト免之尚ホ之レヲ許サ
 ンルナリ即テ本法第百六十六條ハ絶対的ノ法律ナリトス然リト
 虽モ仲裁判断ニ對シ然許カ不服申立ノ許スヲ要スヘキヲ以テ上
 訴ニ非ラケル他ノ方法ヲ按出セサル可カラサルナリ乃テ仲裁判断
 取消訴訟及ニ執行判決言渡ヲ求ムル^ハ訴訟ニ對スル取消理由ノ抗弁
 ヲ許スノ方法ヲ適應ノモノトス^ハ即テ本法ニ於ケル本法第百
 六十七條ニ依リ仲裁判断取消ヲ申立テ得ル原由ヲ利用セラルル為
 ノ本法第百七十一条ニ於ケル訴訟ヲ提起シ又第百六十二条第
 二項ニ於ケル抗弁ヲ申立ルノ規則ヲ明定セリ云々
 當事者ノ合意ヲ以テ特別ノ失権ニ付キ約定スルヲモ為シ得ルナリ
 (本法第百九条第百四條卷之九又合意ニ付キ其制限ヲ定メタルハ即ケ
 本法第百六十七條ノ第一第二第三及ニ第六是レナリトス(本法第
 八百六十七條卷之九
 第五條民法) 盖仲裁人ハ民法ニ拘束セラルル、^ナ即ケ任意ノ心
 証ニ憑リテ判断シ得之レヲ換言スレハ此ノ場合ニ於ケル立法官ト
 裁判官ノ兼不悖ルナリ云フ^ハ上ノ第一條第三項卷之九ノ明定セ
 サル^ハ一カヲサリレナリ何ントナレハ此ノ趣意タルヤ全ク新^ハ法
 制^ニ改定^スレタル所ナレハナリ^ハバイルン国第千三百三十二条バデン
 国第千七十五条字漏生国裁判通則第百七十二條以下卷之九^ハ理由
 說明ニ論述セル意見ノ主トスル所適正ナルヲ以テ一切ノ^ハ仲裁^ハ判断

断ニ対スル上訴ハ之レヲ許サス上ノ第四條ニ依リ且唯当事者ノ一方
カ禁止セラルルノ行為ノ施行ヲ言渡サレタル場合ニ限り本法上ノ
理由ニ基キ仲裁判断ニ対スル不服ヲ申立ルヲ許スノ意ハ之ヲ推知ス
ルヲ得ヘレ(本法第百六十五條第二條)但前段不服ノ申立ヲ許ス
云々ハ理由説明ニ於テ沈博ニ明言セシ主キニ制限ヲ加ヘタルヲ免
カレス

又当事者間ニ於テ仲裁人ハ民法ノ規定ニ羈束セラルヘキトシ合意
・約定レ得ルハ勿論ナリ然レモ後令世ノ如キ合意アリタリモ實際ハ
本法第百六十七條第二ノ規定外ノ不服ハ之レヲ許サレサルカ故
ニ別段ナル結果ヲ見能ハサルヘレ但此ノ合意ハ第百六十七條第
五ニ因レル不服理由ヲ醸成セシムルニ過キサルヘキノミ

第百六十一條 (同上)

仲裁人ハ其面前ニ任意ニ出頭スル証人及ヒ鑑定人ヲ訊問スルコトヲ
得

仲裁人ハ証人又ハ鑑定人ノ宣誓及ヒ当事者宣誓ヲ為サレタルノ権ヲ
キモノトス

第百六十二條 (同上)

仲裁人ノ必要ト信認スル判断上ノ処分ニシテ仲裁人カ為スコトヲ得
サルモノハ当事者ノ一方ノ申立ニ因リ管轄裁判所之ヲ為ス可シ但此
申立ヲ相當ト信認ル時ニ限ル
証人又ハ鑑定人ノ訊問又ハ宣誓ノ命シタル裁判所ト証言又ハ鑑定ヲ
拒ミタル場合ニ於テ必要ナル裁判ヲ為スノ権アリ

第一解理由ノ説明 盖仲裁判断ナル手續ノ法制ノ効能上ニ付テ論
スルハ仲裁人ニ與フル當ニ任意ニ出廷シタル証人及ヒ鑑定人
^{宣誓ヲ得ル}審訊レ得ルノ取権ニ止メスレテ更ニ是等ヲシテ宣誓ヲ為サシメテ
審訊ヲ為シ且當事者ノ宣誓ヲモ為サシムルノ權ヲ以テスルヲ必要
スレ然レモ仲裁判断所ノ組織ヨリ觀察スルハ仲裁人ニ証人又
ハ鑑定人ヲ強制スルノ權利ヲ付與シ且宣誓ヲ果行セシヤルハ
裁判所ニ自ラ囑托スルノ取権ヲ付與スルハ實ニ其安否ヲ得サル
ヲ以テ本文ノ如ク証人鑑定人ヲ宣誓上審訊シ又ハ當事者ヲシテ宣
誓トシカセシムルヲ禁止シタルハ北部獨乙聯邦中條第九
十五條第九百六十六條及ヒ而シテ宣誓ノ執行ニ付テハ當事者ヨリ
管轄裁判所ニ申立テ一キナリ且此ノ申立ハ本文第九百六十二條
一項ニ依リ當事者ノ各方共ニ之レヲ為スノ權アリナリ

第二解制定ノ沿革 字漏生國中條及ヒ北部獨乙聯邦中條ノ本法ト
異ナル所ハ即ケ此ノ二中條ニテハ本文第九百六十二條ノ場合ニ於
テ區裁判所ヲ相當管轄ト明言スル所ニ在ルナリ下ノ第六解卷文
國務院委員会ニ於テ任意ニ出頭シタル証人ヲシテ宣誓セシムル
及ヒ當事者ヲシテ宣誓セシムルノ權利ヲ仲裁人ニ與ヘント云フ
ノ動議アリシモ遂ニ排斥セラレタリ

第三解証人及ヒ鑑定人 本文第九百六十一條第一項ニ依レハ証人
鑑定人ハ必ス任意ニ出頭スルヲ要スルナリ即ケ仲裁人ハ之レヲ呼
出スノ權ナリ而シテ之レヲ出頭セシムルハ一ニ當事者ノ任意ニ放
任セサル可カラサルナリ但特ニ立會ハシムルキ鑑定人ノ鑑定^{本法}
第九百二十九條卷文又ハ証人並ニ証據要件ノ指定^{本法}ノ百二
十四條第一第九條卷文ハ仲裁人之レヲ為シ得而シテ此ノ指定アリタ

ル以上ハ當事者ノ各方ハ管轄裁判所ニ申立テ鑑定人ノ訊問ヲ行ハ
レハルヲ得ルノ権利アリ

蓋仲裁人ハ必スレモ証人又ハ鑑定人ニ依レル証拠ヲ採用セサルヘ
カラサルノ義務アラズ即ケ本法第百六十条第一項ニ依リテ仲裁
人ノ見込ニ一任セラレ、ナリ

〔第四條宣誓ノ実施〕 仲裁人ハ宣誓ヲ為サレハルノ権ヲ有セストモ
モ〔本文第百六十一条第二項〕然レモ証人鑑定人ノ宣誓ヲ求メ又ハ
當事者ニ向テ宣誓ヲ命スルノ例之ハ本法第百九十一条ノ宣誓〇
次ノ第五條参見ノ権利義務ニ非ラズ〇本法第百六十一条第一項参
見ノ参見^{並ニ其宣誓}ノ文式〔本法第百三十四條第百四條参見及ヒ宣誓ノ承諾
若クハ拒絶ノ結果〕本法第百三十九條第百四十二條第百二十七條参見ニ付キ
定ハルノ権利義務ナラスハ之レヲ有スルモノトス

〔第五條其他ノ訴訟上ノ行為〕 本文第百六十一条第二項ニ依レハ即
チ該項ニ明記スル以外ノ訴訟上ノ行為ハ其本末ノ権力ニ属セサルモ
ノナリ限リ仲裁人ニ於テ實行シ得ルナリ乃チ法廷ノ警察権裁判所
編成法第百七十八條参見ハ仲裁人之レヲ有セス之レニ反シ唇面ノ
^{照合}複製^{照合}本法第百四十六條第百七條参見及ヒ証拠提出義務ニ係ル手續
〔本法第百三十九條第百六十六條乃至第百九十七條参見〕ハ元ト仲裁判断ノ一
手段タル一キヲ以テ仲裁人ニ禁シアラサルナリ対手人ノ所持スル
商業帳簿ノ呈出〔本法第百三十七條〕前段参見ヲ命スルトモ亦之レヲ為
シ得ルナリ抑第三者及ヒ公然ノ職官負ハ〔通常裁判所ニ提出スル〕
訴訟ヲ以テ所持シ証信ヲ仲裁判断所ニ呈出スルトク〔本法第百三十九
十四條第百九十七條〕参見ノ拘束セラレ得ヘキヤ否ヤハ判断
シ難キカ如シ然レ本法第百三十九條ニ依レハ原則上之レヲ非難

レ雅カル一キナリ

〔第六評管轄裁判所〕 仲裁人ノ為レ能ハサル訴訟上行為ニ付キ当事者ヨリ申立テ之レノ實施セシム一キ管轄裁判所ハ即チ本法第百七十一条ニ準クル區裁判所若リハ地方裁判所是レナリ只該条ヲ讀ムルハ此ノ如キ場合ニ付キ明言シアラサレ其之レヲ適用スルキハ自ラ明瞭ナリ

而レテ其申立ハ地方裁判所ニ在テハ口述レテ裁判所書記ノ調査ニ準テセシメテ〔本法第百四十四條第一項ニ於ケルト同ク若クハ層面上代人ヲ以テ又區第百七十四條及區裁判所ニ於テ代人制裁ナリ層面上若クハ口頭上〔本法第百四十六條及區裁判所書記ノ調査記載ノ以テ之レヲ為レ得ルナリ〕而レテ此ノ申立ニ付テリ當該裁判所ノ審査上ノ立証トシテ其事者ハ其事体ニ付キ陳供シ且

仲裁人ノ決定ヲ提出ス一キナリ〔本法第百四十九條及之レニ對スル裁判ハ本法第百五十一条第一項ヲ適用シ口頭審理ヲ為サズシテ之レヲ書渡スナリ〕又証人鑑定人ノ審問ハ本法第百四十四條以下第百六十七條以下ノ通則ニ依ル一キナリ
本文第百六十二條第二項ニ於テハ証言及ヒ鑑定ヲ拒絶ニ因シ云フ所明瞭ナラス蓋呼出テ受ケル証人鑑定人カ出庭セサル中ハ即チ事實上証言及ヒ鑑定ヲ拒ムモノト爲做ス一キナリ

第百六十三條 〔仲裁手續ヲ許サレサル異議ノ効力ニ付テリ〕
仲裁人ハ仲裁判断手續ノ許サレサルコトヲ主張スル時殊ニ法律上有効ナル仲裁契約ノ存在セサルコト又ハ其仲裁契約ハ方ニ判断ス一キ事ニ因係ナキコト又ハ仲裁人其職務ヲ施行スルノ權ナキコトヲ申立

ル時ト毎モ仲裁判断ヲ続ク継続シ且仲裁判断ヲ宣スルコトヲ得

第八百六十四条 (意見ノ了致ニ付テノ条)

數名ノ仲裁人判断シテ渡ス一キ時ハ仲裁契約ニ別段ノ規定ナキ場合ニ限り過半数ヲ以テ判断ヲ為ス可シ

第一解理由ノ説明) 仲裁判断ヲ続ク許ルサル一カラサルトテ主張スル場合ニ付テハ特ニ規則ヲ定ムルヲ要スルナリ必先仲裁人自身ハ其受ケタル依託ニ於テ此ノ争ニ付テマテ判断スルノ権限ヲ付與セラレサルヲ以テノ故ニ右ノ判断ヲ為シ能ハサレハナリ而シテ若事者ノ一方カ仲裁手續ノ許サル一カラサルトテ主張シ後テ此レニ付キ管轄裁判所ノ豫案裁判ヲ經テ初テ該手續ヲ続行シ得ルカ故ニ其間ハ仲裁手續ヲ中止シ得ルモノトセハ即テ事件ヲ引延ハスノ猶

手續ヲ施シ易キ協會ヲ與フルニ至ル一キナリ是ニ於テ此ノ如キ場合ニ付テハ一面ハ其豫案ニ付キ訴訟ヲ以テ管轄裁判所ニ申立テ確定裁判ヲ受クヘキトテ言渡シ(本法第八百七十一条参看)一面ハ其部獨乙聯邦中條第九百六十七条ニ依テ仲裁人ニ付與スルニ其任意ノ見込^ニ依リテ該事件ヲ右ノ訴訟ノ結了スルマテ停止スルカ若クハ訴訟ニ拘ハラズ仲裁手續ヲ続行シ且判断ヲ宣スルカノ権限ヲ以テテスル^ル必要ト看認メテテ而シテ仲裁手續ノ許ス一カラサルトテ申立テタル当事者ノ利益ハ仲裁手續ニ行ノ為メ害セラルハ^ハ之レアラサルナリ何レトナレハ豫案訴訟ニ付キ管轄裁判所カ接者事者ノ許否ヲ是認スル判決ヲ為レタル片ハ即テ仲裁判断ヲ取消スハク(本法第八百六十七条第一参看)且仲裁判断ニ原因スル執行判決(本法第八百六十八条第二项参看)言渡ヲ妨ケヘキヲ以テナリ

「第二解制定ノ沿革」 国務院委員會ニ於テハ異議ヲカリシ又各中按
皆同趣ガナル獨リ北部独ニ聯邦中按第九十七條ノ末段ニ於テ
仲裁手續ノ施行ニ對シ異議アル者事者ハ裁判所ニ起訴スルヤトシ
明定シ且テ該章按第九十九條^{第七}而七十二條本法ノ第二而三十
一條第九而六十七條ノ規定ヲ適用セシムルナリ

「第三解仲裁判斷ノ制限」 本法ニ於ケル仲裁判斷ノ制限ハ猶ホ前項
ニ援奉らん北部独ニ聯邦中按第九十七條ニ明定スルカ如ク上
ノ第一解ニ依ツル旨ニ從ヘテ本法第九而六十七條第一ニ依リ仲
裁判斷ハ訴訟ヲ以テ^七本法第九而六十八條^七并^七該章卷若クハ仲裁手
続ヲ許スルカラザル^七統^七本法第九而六十八條第二項卷若クハ以テ
之レヲ停止スルヲ得セシメ^七了^七而レテ^七此ノ許ス可カラストナ
ス^七理由^七即ケ^七本法第九而六十三條ノ記載スル點ニ因ルヘキナリ

右ノ主義ナルヲ以テ仲裁人ハ豫審問題ニ付キ當事者ヲ拘束スルノ
言渡ヲ為スヘキ職權ノ有ヤス但仲裁人ハ申立テタル異議ヲ存却シ
テ判斷ヲ宣言スル^七得^七然レ^七此ノ場合ニ於テハ其判斷ハ^七後^七宣^七ノモ
トニシテ^七而^七カ^七管^七轄^七裁判所^七カ^七其^七存^七却^七ハ^七正^七當^七ナ^七ト^七裁判シタル^七仲^七裁^七
ノ判斷ノ効力ヲ生ズルニ過キ^七ナ^七ル^七帝國高等商事裁判院裁判録
第十二卷卷首

又仲裁人カ其判斷權限ヲ超過シテ豫審異議ヲ採用シ却テ訴訟申立
テ其理由ノ審査ヲ為サス事却シタル^七仲^七裁^七判斷^七ヲ^七受^七クル^七正^七當^七ナ^七ス
人ハ手續ヲ中止シ管轄裁判所ニ於テ仲裁判斷ヲ受クル^七正^七當^七ナ^七ス
ルノ言渡ヲ復テ初メ判斷ノ宣言ヲ為シ得んナリ
此ノ如クナルヲ以テ蓋仲裁人カ自ラ豫審問題ニ付キ判斷^七得^七ん^七ト
^七法^七律^七上^七其^七効^七力^七ヲ^七キ^七モ^七ノ^七ト^七知^七ル^七ナ^七レ^七

第四解仲裁契約の有効 本文ノ法律上有効ナル仲裁契約ナル法中
 ニハ仲裁契約ノ存立ヲ否認シテ申立テ又ハ本法第八百五十一条並
 ニ本法第五百五十九条ノ第三解ニ依^テル有効ナル^ト、是觀的及ヒ
 彼觀的ノ要件ニ因^リテ申立及ヒ本法第八百五十九条第一並ニ同条
 第四解ニ於^テル仲裁契約ノ消滅等ノ概括スル^ト而シテ存立シ且
 有効ナル仲裁契約ハ判断ス可キ条件ニ因^リテ否ヤノ仲商問題ハ
 即チ本文第八百六十三条、明記シテ
 第五解仲裁人ノ無取捨 本法第八百五十四条乃至第八百五十七条
 ノ第五解及ヒ本法第八百五十八条ノ第三解乃至第五解ニ在^ル場
 合、於^テハ仲裁人ハ取捨之シテ^ル而シテ仲裁人ハ本法第四十
 八条ノ規定ヲ排除スル者事者^トノ偏頗ノ嫌疑ノ理由トシ並ニ本法
 第八百五十八条第二項第三項ノ理由ヲ以^テ忌避ノ申立^テ為^スル後
 ツヘキ^ト本法第八百五十八条第五解^ニ而シテ本文第八百六十
 三条^ニ段ハ忌避ニ相違係スル^ト付^テハ内閣代理^ノ負^ハ之^レノ明言
 シ^リ
 第六解了教ノ意見 本文第八百六十四条ニ對^スル理由説明ハ別ニ
 之^レアラサシモ同条ニ齊^トシテ空漏生因中梅第七百七十四条ニ對
 スル説明ノ措^スレハ^即チ曰^ク仲裁人ノ意見了教^ハ絶對的^ニ了教ナル
 趣^キヤ^ハ固^トト^リテ^ハ候^タス蓋シ當事者ノ權利ニ付^テ也此ノ法
 律ノ全体ノ主^トト^ス所ニ異^{ナル}カ如^ク其後決ニ付^テモ特別ノ規
 則ヲ定^メタル^トナ^リ云^ハ
 抑本文第八百六十四条ノ規定^ニルヤ本法第八百五十九条第二及ヒ
 本法ニ於^テノ上席仲裁人主^トニ採用セザ^ルトニ因^レル結果ト云^フハ
 本法第八百五十四条乃至第八百五十七条第五解^ニ而シテ又本文第八

百六十四条ノ趣意ニ依レハ仲裁人ノ比較的多数意見ハ意見同数ト
法第百五十九条第二号ト同一視セラルヘキナリ

盖裁判所編成法第百九十八条第一項ニ依レハ即チ裁判官通常ノ評
決ニ付テモ尚ホ絶対的多数ヲ要スルノ主義トス而レテ国法院等負
會ニ於テ該条ニ二項ヲ追加レテ二箇以上ノ異ナル意見アル中ハ
最高額ヨリ順次ニ低キ意見ニ逐次シテ一ノ意見ト為ス可キ規定ヲ
設ケタリ即ケ例之ハ甲ハ損害賠償金額ヲ一千マルクト見込ミ乙ハ
五而マルクト見込ミ丙ハ三而マルクトト為ス場合ニ於テハ五而マル
クノ見込ミ以テ多数意見ト定ムルナリ必克此ノ趣意ニシテ決シテ
特別規則ナリト云フヲ得ス允リテ多数意見ナル意味ヲ擴張スレハ正
當ナシモノト云フヘキナリ何レトナレハ最高額ノ見込ミヲ為ス者ト
亦此レヨリ劣キ額ニ同意スヘケルハナリ乃チ裁判所編成法第百九

十八条第二項ノ規則ハ仲裁人ニ付テモ亦適用セラレ得ヘキナリ

第七條仲裁人^{總負}ノ共同^{總負} サツクセン民法第百四十二条ニ於

テハ^仲仲裁人ハ必ズ^仲総負共同シテ判断ヲ宣言スルヲ要ストノ明文
ヲ掲ケルカ如ク實ニ仲裁契約ノ性質ニ於テ又本法第百五十七条
第百五十九条第一ノ規則ノ結果トシテ^仲仲裁人總負ノ共同ハ止リ
得ザル所トス

仲裁人ノ署名ニ関レテハ本法第百六十五条ノ第三條第一項ヲ參
照スヘシ

第百六十五条 (仲裁判断ノ証明及ヒ送達ニ付テノ条)

仲裁判断ニハ其作製シタル日ヲ記載シテ仲裁人之ニ署名ス仲裁人ノ
署名シタル判断ノ正本ハ之ヲ當事者ニ送達シ且其原本ハ送達証書ヲ

添へる之ノ管轄裁判所ノ存託局ニ納メ置ク可シ



宣行方行
何名只知之好米
亦有必料 必知方之好米

獨逸訴訟法釋義九八稿

四十八葉

第一解理由ノ説明 仲裁人ノ署名レタル判断、正ホク當事者ニ送達スルト並ニ判断ノ原本ヲ管轄裁判所ノ存記局ニ備へ置クトハ必竟其仲裁判断ノ公力ニ付テ保証ヲ與ヘ且該手續ノ適式上ノ結局ヲ表明スル所ナリ

第二解制定ノ沿革 政府第一回第二回ノ原案共ニ同一ナリ又国議院委員会ニ於テ異議ナク採用セラレタリ而シテ字漏生因草案第七百七十五条ハ口頭ヲ以テ判断ヲ宣言シ得ルノ規則アリ又北野独乙聯邦中樞案千六百六十九条ニテハ右ノ外判断ノ理由ヲ掲クヘキトシ明定セリ本法第八百六十七条ノ第五及ヒ第二項參照而シテ二草案共ニ送達ニ付テノ規定ナク單ニ判断ノ通知ヲ為ストニ定メタリ

第三解仲裁判断ノ説明 本法ニ於テ仲裁判断ノ宣言存ニハ仲裁人ノ署名ヲ要スルノ明文アルニ依レハ即テ判断ヲ書面ニ作製スルヲ必要スルノ趣意ナルヲ知ルヘシ而シテ其署名タルヤ仲裁人総負之レヲ為スヘキナリ本法第八百六十三条第八百六十四条第七解參照此ノ署名ニ関シテハ本法第二而八十六條第一項ヲ參照スヘシ

原本ヲ管轄裁判所(本法第八百七十一条參照)ノ存記局ニ備へ置ク所ニハ即テ執行手續(本法第八百六十八条參照)及ヒ不服申立ノ場合ニ付キ便利ナラレメレカ為メナリ本法第八百六十七条第八百六十八条第二項第八百七十一条參照乃テ執行手續ノ場合ニハ判断書判断書ヲ呈出スルノ手教ヲ省略シ且其原本カ自ラ一ノ証明ヲ為スヲ以テナリ然リ而シテ其之レヲ備フルニ付テノ期限ハ本法ニ明定シラス又仲裁人ノ調停ハ之レヲ作ルヲ必セサルニ付キ從テ之レヲ備フルヲ要セサルナリ上ノ第一解參照

判断ニシテ之レヲ存面ニ作ラヌ又ハ是レニ仲裁人カ署名セサル所

ハ即チ判断ノ之レアラサケルモノト看做サルナリ又其程式ニレテ如
何シノ過失マケテ宥恕スル乎ハ各場合ノ事實尙題ナリトス、帝国高
等商事裁判院裁判録第十卷第六十九号卷尾〇完全ニ仲裁人ノ署名
ヲ具シ及ヒ之レヲ当事者ニ送達シタル所ノ判断原本ヲ裁判所ニ備
ヘ置キノ手續ヲ为ワ、ルハ其判断ノ効力ハ別ニ大ナル損失ヲ被ラ
ス只其判断ニ関シ裁判所ニ申立テ为サレトスル者カ更ニ其判断ノ
原本ノ存在ト及ヒ真正ナルトヲ明示スルノ手續ヲ为スヲ要スル
而已

〔第四解判断ノ理由上ノ第二解卷尾〕必竟判断ノ理由ヲ掲クルトハ
甚ク必要セサルナリ既ニ当事者間ニ於テ当初ヨリ判断理由ヲ掲ク
ルヲ要セスト合意シ得ルナリ然レモ若シ右ノ合意ヲ明示シアラサ
レハ即チ仲裁判断ニ理由ヲ載セスト云フヲ以テ之レニ對シ不服申

立ヲ為シ得ルナリ、本法第八百六十七條第五及七項第二項卷尾

〔第五解送達〕本条ハ旧據ニ反シ上ノ第二解卷尾口頭ノ宣言ヲ为ス
ノ規定ヲ採ラスレ而レテ判断ノ送達ヲ命スルナリ蓋此ノ送達ニ本
法第二而八十八條第一項ニ反シ仲裁人取推ヲ以テ本法第五十二
條以下ニ依リ之レヲ为スヘキナリ何ントナレハ送達ハ即チ公
方法ニ代リ且其判断ノ法律上有効ヲ証スルノ筋合ナレハ上ノ
第一解卷尾

仲裁判断ヲ^{当事者}送達セラレサル間ハ其判断ハ本法第八百六十
六條ニ述フル効力ヲ有スルトナレ乃チ^{是レ稀ホ}如キ彼ノ判決ノ^{是レ稀ホ}渡サ
レサルモノ、如ク当事者間ニ未タ存在セサルモノタルナリ、本法第
二而八十三條第五解卷尾

第八百六十六条 仲裁判断ノ効力ニ付テノ条

仲裁判断ハ当事者双方間ニ於テハ裁判所ノ確定判決ニ効力ヲ有スル

モノトス

第八百六十七条 仲裁判断ノ停止ニ付テノ条

左ノ場合ニ於テハ仲裁判断ノ取消ヲ申立ルコトヲ得

第一 仲裁手続ノ許サレサルモノナリシ時

第二 仲裁判断カ當事者ノ一方ニ對シテ禁止ノ行為ヲ為ス可キ旨ヲ

宣言シタル時

第三 當事者カ法律ノ規定ニ從テ代理セラレサリシ時但當事者

カ訴訟ヲ為スコトヲ明諾又ハ黙諾セシ時ハ此限ニ在ラズ

第四 仲裁手続ニ於テ當事者ノ一方ニ對シテ法律上ノ審訊ヲ為サレ

リシ時

第五 仲裁判断ニ理由ヲ付セサリシ時

第六 第五百四十三条第一乃至第六ノ場合ニ於テ原状回復ノ訴ヲ

許スヘキ条件ノ存スル時

仲裁判断ノ取消ハ當事者双方ニ於テ別段ノ合意ヲ為シタル時ハ第四

第五ニ掲ル理由ニ因リ之ヲ為スコトヲ得ス

第一解理由ノ説明 仲裁判断ハ現実猶ホ裁判所カ言渡レテ確定シ

タル判決ノ如ク同一ノ方法ニテ争件ヲ結了スルモノナリ 本条即チ

本文第八百六十六条ニ於テハバウルク国訴訟法第千三百三十七条

（若者回渠ケハ須クバウルク国訴訟法第千三百四十条ヲ参看スヘシ）

及ヒ北部獨乙聯邦中按第千七百七十一条ニ倣ヒ當事者間ニ於ケル仲

裁判断ニ裁判所ノ確定判決ニ同一ナル効力ヲ有セシメタリ（本法第

八百六十条第四款第二项参照

前項ニ述フルル程第ナルニ因リテ本文第八百六十七条ノ第三及ヒ第六ニ明定スル如ク判決更正並ニ判決取消ノ理由訴訟本法第五而四十二
条第五而四十三条ヲ為シ得ルヤ否然ナリトス但本法第五而四十二條ノ第一
ハ茲ニ適用シ能ハス何レトナレハ仲裁人ノ除存ハ法律上之レリ是
認セサレハナリ然レ下ノ第五款及又本法第五而四十三条ノ五
ニ適用ス可カラス如何レトナレハ即ケ他後回常争フタム事件ノ裁
判ニ係ルニ付他ノ証言ヲ察見シタリト云フニ因リテ仲裁判断ノ
取消ス片ハ同事件ヲ更ニ裁判所ニ起訴スルノ必要ヲ生スハ且然レ
ハ當事者向ニテ相背及スル所ノ仲裁ニ頼リテ判断セシメント款の
タル所ノ相互ノ意思ハ全ク相背馳スヘキヲ以テナリ加之今ヤ本法

ノ主旨ニ於ケルハ實ニ右ノ如キ趣アリ採リ能ハサル所ナルナリ又仲
裁判断カ必当ニ宣言セラレタムニモ拘ハラヌ若シ法律上禁止スル
行為ノ施行ヲ為事者ニ宣言レタムハ其判断ハ取消サレヘキト
本法ニ於テ本款及而六十七条第三右ノ主旨ノ明定シテ以テ既ニ
本法第六而六十一條第二ニ於テ外国裁判所ノ判決ニ對シ必要ト認
メタル所ノ原則ヲ此ノ場合ニモ適用スルナリ而シテ仲裁手続ノ許
サルヘキモノナリヤ否ヤニ付リハ管轄裁判所ノ審査ニ屬セシム
所モ亦必要ナル所ナリ乃ケ仲裁判断タルハ其推カテ法律上公認政
府ノ組織セシ裁判所ノ権能ヨリ受有スルモノナリトスレテ偏ニ民事
者ノ公意ニ淵源スル所ナリカ故ニ其能力ハ即ケ仲裁契約ノ法律ニ
適スルヤ否ヤ及ヒ仲裁手続カ否事者ノ意思並ニ此ノ法律ヲ補足セ
ル規程ニ適合スルヤ否ヤニ從ヘテ消長スヘキナリ若シ此ノ要件カ

欠缺スル所アル中ハ則チ其判断ハ基原ヲ缺ケルモノト云フヘシ乃
チ本文第六百六十七条第一ハ右ノ主文ヲ省略ハスニ充分ナリ而シ
テ其結果ノ如何ハ之レノ学理上及ヒ实行上ノ活用ニ一任シテ可ナ
リ高キ其解釈ニ付ケル本法第六百六十三条ノ例ヲ参照スヘシ
蓋本文第六百六十七条ノ規則トシテ^{タルヤ}仲裁判断ニ對スル^{イフクイ}上訴ヲ概シ
テ某クハ本体トシテ許サレル所^{イフクイ}新法制ニ倣フタル所ナラバイン
ン国第六百三十八条第六百三十九条第六百四十一条ニ属生
国許法中第六百三十七第八百七十二条北都獨乙聯邦中第六百七十二
条^{参照}

第二解制定ノ沿革 各中條相同シ而シテ国議院委員會ニ於テ本法
第六百四十二條第三ニ於ケル^{イフクイ}判断取消ノ理由ハ本文第六百六十七
条ニ於テ^{イフクイ}判断取消ノ理由トシテ適用スヘキカ又ハ此ノ条ノ第一中

ニ含蓄スルモノトナスカノ疑問アリシモ何レモ^{イフクイ}解釈者ニ一任スル
トニ決シテ^{イフクイ}下ノ第五解参照

第三解確定 抑本文第六百六十六条ノ規定ハ即チ絶対的ノモノニ
シテ仲裁契約ヲ以テ之レヲ変シ能ハサルナリ(本法第六百六十条第
四解参照)而シテ仲裁契約中控訴若クハ上告ヲ留保シアル民法レ
此ノ上訴ハ許サレサルナリ殊ニ若シ其仲裁契約ノ要件^{イフクイ}著シキ右
ノ留保ニ重ク措キアルトノ明瞭スル中ハ反テ之ニ其契約ヲ無効
ナラシムヘキナリ然ラサレハ即チ^{イフクイ}要用的ハ不要的ノ為メニ^{イフクイ}減却セ
ラル、トナシトノ格言ニ從フヘキナリ(口書事者双方仲裁判断ヲ推
垂スル中ハ即チ仲裁契約ノ取消ニ均シキ効用ヲ為スナリ)
抑仲裁判断ノ確定ハ本法第六百六十五条ノ規則ニ参照シテ如何レ
ノ程度ニ於テ^{イフクイ}否^{イフクイ}キカハ^{イフクイ}更テ^{イフクイ}第三条第五解ヲ参照スヘシ

又確定力ノ範圍ニ付テハ本法第百九十三条ヲ適用スヘシ又確定
判断ニ関スル異議ハ執行判決トハ相干渉セサルモノトス蓋此ノ執
行判決ハ只強制執行ニ付キ之レヲ要スルノミ本法第百六十八條
並ニ第百六十六條乃至第百七十条第百七十一条第百七十二条
百六十七條ノ取消理由ハ答弁ノ方法ニ於テ之レヲ申立ルヲ許サス
乃ク本法第百六十八條第百六十九條第百七十條ノ場合ヲ除キ管轄裁判所ニ取消訴
訟ヲ提起スルノ要スルナリ本法第百七十一条第百七十二条ノ訴訟ハ
執行判決カ下ノ第十一條參看言渡サレサル間ハ何時モ提起シ得ル
ナリ本法第百六十八條乃至第百七十条第百七十一条第百七十二条
第百七十三条ノ規則ノ適用ヲ侵カスノ原因ナラハキ
十)

裁判上ノ介入債ニ付テハ本法第百六十八條乃至第百七十条ノ
第三條ヲ參看スヘシ

「第四條外國」 仲裁判断カ外國ノ仲裁人ニ頼テ為サレタルト内國ノ
仲裁人ノ為サレタルトノ別ニ依リテ其確定不服申立及ビ執行スヘ
キトニ差異アルナリ

「第五條仲裁手續」 許サレサル工 本文第百六十七條第百六十八條
ノ規定ハ上ノ理由説明ニ依リテ述アル所ニ從ヘハ其文義頗ル廣漠ニシテ且レテ

其範圍ノ界限モ知ルニ難キモノアリ然レモ裁判所ハ必ス其否否ニ
付テ判定ヲ為サルヲ得サルナリ又彼ノ本法第百六十三條ハ「特
ニノ語ヲ用ヘテ其類例ヲ示シタルノミ」此ノ第百六十三條ニ述ヘ
タル場合ノ外高モ其例トシテ擧クヘクハ即チ仲裁人カ本法第百
六十一条第百六十二条ニ違反スルハ「内閣代理員ノ說明ニ依リ」又ハ選任セ

テレタル仲裁人總領力仲裁判断ニ協賛セサルハ本法第百六十三
 条第百六十四条第百七条第百七条第百七条第百七条第百七条第百七条
 ヲ为シタルハ本法第百五十八條第百三條第百三條第百三條第百三條
 カ確定ニ重却セシレサル限り本法第百五十四條第百四十二條第百二及百八
 七十一條第百七條若クハ本法第百四十三條ニ依リテ偏頗ノ嫌疑ヲ
 理由トスル忌避申立権ヲ失ハサル限り本法第百五十八條第百三條
 第百四條第百五條第百四十一條ノ回避理由アリ並ニ本法第百四十
 二條第百二項ノ忌避理由アル場合等是レナリトス然リ而シテ上ノ第
 二條ニ述フル所及ヒ本法第百六十三條第百六十三條第百六十三條第百六
 十四條第百五條第百七條ノ規定ハ所ニ免照セハ即ケ本文第百六十七
 條ノ修正ヲ採用セラレサリレリ以テ有効ニ忌避セラレタル仲裁人
 カ免照シタル場合ハ無論判断取消ノ理由ト爲做サレル可カラサル
 ナリ
 上ノ理由説明ニ於テ仲裁人ノ絶対的無能力ノ場合ヲ採用セザル
 結果ニ付テ論述スル所ノ第一條第百七條ニ付キ論述スル所ハ過大ニ失
 セリ蓋本法第百四十一條ノ理由ニ因ル忌避ノ許スヘキ要件本法第
 四十二條第百二項第百四十三條第百七條ハ仲裁人ニ付テモ亦適用セラルハ
 キトシ本法第百五十八條第百四條第百七條
 上東述アル所ノ制限ヲ除キテハ即ケ本文第百六十七條第百一ノ理
 由トスルノ不服申立ハ判断取消ノ理由ノ仲裁判断所ニ申立テタリ
 ト云フヲ以テ当然之レヲ爲スヲ得ザルナリ故ニ本法第百二及百六
 十七條ハ只或レ制限ヲ以テ適用セラルナリ
 第六條禁止セラルル行為ノ禁止セラレタル行為ニ関シテハ上ノ理
 由説明ニ於テ本法第百六十一條第百二ノ規定ヲ援引セリト雖モ然

カモ本文第八百六十七條第二ノ規則ハ之レノ第六百六十一條第二ニ由スレハ大ニ局限シアルトシテ遺忘スヘカラス乃チ本文ノ第二ニ於テハ偏ニ禁止セラレタル行為ノミヲ云ヘ反テ第六百六十一條第二ハ強迫レテ為サレハヘカラサル行為ヲ云フナリ此ノ他尚ホ本法第六百六十條第六百六十一條第三條^九解^九未^九終^九ス可シ此ニ於テカ即チ訴訟トシテ申立テ能ハサル紛争ノ主張ハ以テ仲裁判断ヲ付スル不^得服ノ申立ト為^得能^ハル所トス

〔第七條代理ノ欠缺及ヒ認諾(本文第八百六十七條第三) 本法第五百十三條第五及ヒ第五百四十二條第四ニ同レヤヲ以テ宜第五百十一條乃至第五百十三條第十四條^九解^九未^九終^九ス^九第^九五^九百^九四^九十^九二^九條^九第^九三^九條^九解^九未^九終^九ス^九第^九八^九百^九六^九十^九七^九條^九第^九四^九ニ付

〔第八條法律上ノ審訊ヲ為サ、ル〕 本文第八百六十七條第四ニ付テハ本法第八百六十條第一項並ニ其註解及ヒ帝國高等南審裁判院裁判録第三卷第三十四号ヲ參照スヘシ蓋チ事者ハ審訊ヲ受ケザル

トノ合意ヲ為シ得ヘキナリ(本文第八百六十七條第二項參照) 〔第九條解理由ノ欠缺(本文第八百六十七條第五) 本法第五百十三條第七ノ規定ニ相同キヲ以テ宜第五百十一條乃至第五百十三條第十六條^九解^九未^九終^九ス^九ヘシ又當事者ハ本文ニ反スル合意ヲ為シ得ルナリ

〔第十條取消〕 本文第八百六十七條第一乃至第六ニ記載スル取消理由ノ外ノ事項ヲ理由トスルニモ法律上之レヲ若認メザルナリ(上ノ第一條參照)然レ事者ハ仲裁契約中ニ掲ケルハ合意ヲ為シ得ルナリ但シ^九第^九一^九條^九第^九二^九條^九第^九三^九條^九第^九六^九條^九ノ取消理由ヲ相拋棄スルノ合意ハ本文第八百六十七條第二項ニ照シテ之レヲ許サ、ルナリ

〔第十一條期限〕 取消理由ノ申立ニ付テリ期限ハ此ノ法律ニ於テハ

只執行判決ノ言渡アリシマテ以テ程度ト為スヘキトヲ規定セリ(上)
ノ第三條及ヒ本法第百六十八條乃至第百七十条第一條(卷一)迄
レ民法上ノ期満効ニハ勿論關係ヲ有セサルナリ

第百六十八條 (執行判決ニ付テノ條)

仲裁判断ニ因テ為ス強制執行ハ其訴サルヘキコトヲ執行判決ヲ以テ
言渡シタル時ニ限り之ヲ為スコトヲ得

其執行判決ハ仲裁判断ノ取消ヲ申立ルコトヲ得ル理由ノ存スル時ハ
之ヲ言渡ス可カラズ

第百六十九條 (同上)

執行判決ヲ^為言渡シタル後ハ仲裁判断ノ取消ハ当事者カ其過失ニ依ラ
スレテ前手續ニ於テ取消ノ理由ヲ主張スルコト能ハサリシコトヲ明
示シ及ヒ第百六十七條第六ニ記載シタル理由ニ因ルニ依ラサレハ
之ヲ申立ルコトヲ得ス

第百七十条 (同上)

仲裁判断ノ取消ヲ求ル訴訟ハ前條ノ場合ニ於ケル一月ノ不可変期限
内ニ之ヲ提起ス可シ

此期限ハ当事者ノ一方カ取消ノ理由ヲ知ラシタル日ヲ以テ始マシ
執行判決ノ確定前ニハ始マラサルモノトス執行判決確定ノ日ヨリ起算
シ十年ヲ経過シタル後ハ此訴ヲ提起スルコトヲ得ス

仲裁判断ヲ取消ス時ハ同時ニ執行判決ノ取消ヲ言渡ス可シ

(第一條理由ノ說明) 抑仲裁判断ナルモノハ恰モ外国ノ裁判所ノ判

決キ於ケルト一般相濟シカラレハルノ趣也ナリ蓋二者共ニ帝國又
ハ聯邦ノ政府ノ構成レシ裁判所ニ非ラサル一裁判廷ノ言渡レシ
ル判決ニ關スル所ナリナリ此ノ故ニ二者共ニ該判決ハ執行スハキ
モノト宣言セラル、以前ニ於テ其敗訴者ヲ審訊シ且執行ノ宣言ニ
通常訴訟ノ手續ニ依リテ申立アルトテ要スヘキナリ乃テ本法ハ本
文第六百六十八條^{ノ設}彼ノ本法第六百六十條ノ外國^ノ裁判所ノ
判決ニ因レル強制執行ノ許否ニ關スル規定ヲ標準トナサレメタル
ナリ
軌近ノ新定訴訟法並ニ同草案ハシノフル國第五百三十三條第五百
三十四條^ニデン國第七十九條バイルン國第七百三十七條乃至
第七百三十九條字漏生國商法中條第六百三十三條同國^州條第六
三百八十一條乃至第七百三十八條北部獨乙聯邦中條第七百七十
四條第七百七十八條^ニ本法ノ趣意ニ異ナル^所ハ即テ其外國
裁判所ノ判決ノ執行ニ關スル規則ノ本法ニ異ナル^所大ニ其原因ヲ
成スナリ
仲裁判斷ノ取消ヲ求ル訴訟ニ付テハ別ニ提出ノ期限ヲ規定セズ然
レ本法第六百六十六條第六百六十七條第十一條^ニ解^ニ反^シ執
行判決ノ言渡ヲ求ル訴訟ヲ提起セラル、此ハ則テ必ス本法第六
百六十七條ノ取消理由ニ付テ訴訟ヲ以テ適者ノ時期ニ於テ申立テ
サルヘカラス然ラサレハ遂ニ其權利ヲ失フニ至ルヘキナリ是レ必
克ホ支第六百六十八條第二項及ヒ第六百六十九條ノ規則ニ因^テ提ス
ル所ナレ氏蓋又本法第六百八十六條第二項ノ規則ノ然ラシタル所
ナリナリ只^之レカ取消ケノ場合アルハ即テ本法第六百六十七條第
六ノ取消理由ノ規則カ一種ノ特別ナリモノナリ所ニ取由セリ而シ

戸世ノ取除ケル場合ニ付テハ本法第五百四十五条第五百四十九条
第八百三十五条ニ相照稱シテ本文第八百六十九条第八百七十条ノ
規定スル所ナリ

「第二條制定ノ沿革 政府起草ノ原案ハ兩ツナカラ本法ニ同シ而シ
テ字漏生國中按北却獨乙聯邦中按ハ遂ニ本法ニ比較シ能ハセルナ
リ蓋該二草案ニ於テハ仲裁判斷ノ執行ニ付キ本文第八百六十八条
ノ如ク訴訟手續ヲ以テ申立ルヲ要セス又判決ヲモテ立渡サ以テ
反テ只本法第六百六十二条ノ意ヲ如ク執行文ヲ求ムルヲ要スル
ニ過キサルナリ」○本文三条ニ付テハ国務院委員会ニ於テ更ニ異議
ナカリシ

「第三條確定及ヒ強制執行」 本文第八百六十八条ハ之レヲ本法第八
百六十六条ノ規定ニ比スレハ驚クヘキノ取除ケテ定メタリト云フ
クシテ而シテ外國判決ト同一ナル趣意上ノ第一條卷首ニ通告スル
所歎キカ如シ却テ稍本法第七百五条ニ近シ然レ氏世ノ第八百六十
八条ハ獨乙普通法ニ同シ即ケ仲裁手續ヲ利用スルノ場合必
ズ「^{付テ}至レリト魚モ反テ多ノ紛雜ヲ避クルヲ得タリ又本文第八
百六十八条ハ必スレモ終ヘテノ確定ノ結果本法第八百六十六条卷
首ヲ除クニ非ラサルヲ看過スルヲ勿シ」○本法第八百六十六条第八
百六十七条第三條卷首蓋仲裁判斷ニシテ其効力上別ニ強制執行ノ
要セサル場合例之ハ海法申立ノ棄却又ハ本法第二百三十一条ノ意
ヲ以テ於ケル判斷立渡ニ於ケル變ノ終ヘテノ場合ニ「^{在テハ}強者
カ不取申立ノ權ヲ利用セズルヲ止
第百六十六条ノ取リ留保スル所」^ハ限リ同トコロ本法第八百六十
六条ノ更ニ干涉スル所ニ非ラサルナリ

然リト魚モ謂フ所ノ裁判上介入使法助西民法第二千而二十三卷

看ナルモノハ一ノ取除ケテ成スヘキナリ如何ントナレハ此ノ存入
領ハ政府ノ構成スル裁判所カ言渡シタル判決ノ力ニ因テノミ成立
スヘキモノナリ以テ此ノ故ニ仲裁判断アルモ登記ヲ為スニ
ハ必ス前ニ裁判所ノ執行言渡シアルコトヲ要スルナリ而レテ法動西
民法第百二十而二十三條第二項ノ如キ本民法上ノ規則ハ本民法第百
六十六條ノ干渉スル所ナクサルナリ本民法實施法第十四條參見

〔第四條訴訟〕蓋執行判決ノ言渡ヲ未ダん為メニ訴訟ヲ提起スルハ
必要ナリナリ下ノ第五條參見上ノ理由説明ニ於テ此ノ訴訟ヲ訴訟
上ノ手續ト称シタルハ本民法第百六十六條ニ因リ要ナリト云フヘ
レ而シテ此ノ訴訟タルヤ通常ノ方法ニテ本民法第百三十條參見本
民法第百七十一條ニ記載スル裁判所ノ提起スヘキナリ而シテ判断
所ノ適法ニ備ヘ置キタルハ本民法第百六十五條參見即チ其備ヘ

シル原本ヲ利用シ得レ氏若シ然ラサルキニシテ且之レヲ為シ得ヘ
限リ本民法第百六十五條第三條第五條參見原告人ハ判断ノ原本
及ヒ送達證書添セ且吾面上ノ契約仲裁之レアルハ其法第百二
十二條ニ依リ其契約書ヲ添ヘ呈出スヘキナリ本民法第百五十三
條北部獨乙聯邦中條第百七十五條法滿生國章條第百七十八條
参見今ホ文ニ於テ之レヲ明記セサルハ即チ口頭上ノ合意ノ場合ヲ
モ包含セシメタル法文ナルヲ以テナリ本民法第百五十三條第一條

第二條參見

〔第五條執行判決〕裁判所カ執行判決ヲ言渡スニ方テハ即チ本民法第
六百六十一條第一項及ヒ其第二ニ於ケルト齊シク且本民法第百六
十七條第二ニ依リ裁判所ハ仲裁判断ヲ付上^者付キ其禁止セラレシ
ル行為ヲ強制スルヤ否ヤノ点ノ外ハ更ニ審査スヘキニ非ラサルナ

リ本法第八百六十七條第六條參照して而レテ此ノ禁止行為ノ審査
ハ裁判所取推シ以テ之レヲ為サレハ可カラズ(裁判所構成法第五
十九條第二項參照)是レ本法第八百六十八條ノ行文ニ於テ概シテ亦
法第八百六十七條ニ記載スル各欠缺ニ付取推上ノ審査ヲ明ニ禁止
シアラザル意アリ會得スルキニ由ルナリ但此ノ場合ニ在テモ亦
事者カ抑止シ得ルモノ例之ハ本法第八百六十七條第二項ノ場合又
ハ例之ハ第八百六十七條第三ノ項ニシテ(事者ノ進認ニ因リ補正
シ得ルモノハ勿論之レヲ審査スルノ必要ナキナリ)本法第二百四十
七條第二項及ヒ第二百四十七條第二項ノ場合第五條參照

第六條裁判手続 起訴ニ付テノ手続ハ通常手続ニ從フハキナリ(本
法第二百三十條以下第四百五十六條以下參照)被告人ハ本法第八百
六十七條ノ異議ノ外ニ九ノ本法第八百六十六條ニ適合スルキ異議

例之ハ仲裁判断言渡ノ後ニ為レタル并済又ハ和解ニ依ル請求ノ
消滅セシト等ヲ申立テ得ルナリ又是認シ若クハ棄却スル判決ニ付
シテハ通常ノ上訴ヲ許スナリ(下ノ第九條參照)即ケ通例訴スルキ裁
行停止ノ効力ハ亦此ノ場合ニ於テモ許サルハキナリ抑本法第七百
二條第四ハ特リ并済督促手続ニハ關係ヲ有スルモノニシテ(讀
ノ此他ノ場合モ亦仲裁判断ニハ關係スルナリ)本法第七百二條第
七及三條第一條第五條參照又本文第八百六十八條ニ云ハスル中ニ
限リトアルヲ以テ本法第七百六條ハ仲裁判断ニ適用スルキニ非ラ
サルナリ
第七條執行判決(言渡後) 本文第八百六十九條ニ「執行判決ヲ言渡シ
タル後トシテハ(明瞭ナラサル所アリ)蓋為レタル判決ニ非ラスニテ
言渡シタルモノヲ指スルモノヤ疑フ容レヌ何レトナレハ即ケ判

決ハ之レヲ言渡シテ始テ外部ニ對シ存立シ得ルヲ以テナリ、本法第
 二而八十三條第^レ五條^ニ解^ス夫^レ危^シ而^{シテ}言渡サレ^ルん各執行判決カ必スレ
 之ホ^レ文^第八^而六^{十九}條^ノ効^力ヲ有^スト云^フヲ得^ス果^{シテ}然^ラスト
 セ^ルハ即^チ故^際本法^第三^而三^條第^レ五^條ノ^レ場^合並^ニ新^事實^申立^テリ^提出^ス
 ル^ノ權^ニ本法^第四^而九^{十一}條^第一^條參^照シ^テ除^存ス^ルニ^至ル^ノ懼^{アリ}然^レ比
 此^ノ如^キハ斷^{シテ}法律^ノ精^神ニ^之レ^アラ^サン^ヘキ^ナリ^是ニ^於テ^ハ本
 文^第八^而六^{十九}條^ニ付^テハ上^ノ理^由說^明上^ノ第一^解第三^項參^照シ^テ
 參^照シ^テ以^テ本法^第八^而六^{十七}條^第一^條至^第五^條ニ^因レ^ル異^議ハ若
 シ^レ之^レヲ^ハ執行^判決^ニ付^テ争^訟ニ^於テ^ハ適^當ノ^時期^ヲ以^テ申^立テ^サ
 ル^ハ自^ラ消^滅ス^ルト^レレ^テ解^釈セ^サン^可カ^ラサ^ルナ^リ之^レニ^反
 シ^レ彼^ノ異^議ヲ^ハ執行^判決^ニ對^スン^訴訟^ニ於^テ申^立ル^ノ權^利ハ^通則^ニ
 依^テ判^定セ^ラン^ヘリ^即チ^ハ本法^第二^而五^{十一}條^第二^而五^{十二}條^第三^條
 而^七條^第四^而九^{十一}條^ヲ通^用セ^ラン^ハキ^ナリ
 執行^判決^ヲ未^ダン^訴訟^カ却^下セ^ラレ^タン^場合^ニハ^ハ本^文第^八而^六十
 九^條ノ^レ行^文ニ^依リ^テ決^條ノ^レ通^用セ^ラレ^サル^ナリ^知ル^ハシ^又原^告人^控
 訴^ヲ為^ス片^ハ被告^人ノ^レ新^事實^申立^テ權^ヲ保^有ス^若シ^テ却^下判
 決^カ確^定シ^タル^中ハ^ハ被告^人ノ^レ強^制執行^ヲ避^クル^為メ^ハ本^法第^八而^六
 十^七條^ノ異^議申^立テ^自防^ノ方^法ト^レレ^テ利^用ス^ルノ^レ必^要之^レア^リ
 又^而レ^テ仲^裁判^斷ノ^レ効^力ハ上^ノ第^三條^參照^右ノ^レ訴^訟却^下
 ノ^レ為^メ妨^ケラ^ルル^ナリ^又本法^第二^而九^{十三}條^並ニ^第二^而五^{十三}條^參照^テ以^テ判^斷ノ
 被告^人ノ^レ自^衛ノ^為メ^ハ反^訴本法^第二^而五^{十三}條^參照^テ以^テ判^斷ノ
 取消^ヲ申^立テ^サル^可カ^ラサ^ルナ^リ

「第一條特格ナル不服申立ノ認許」
 仲^裁判^斷ニ^對ス^ル特^格ノ^認許^本
 文^第八^而六^{十九}條^ハ即^チ執行^判決^ニ對^スル^訴訟^ニ於^テ之^レヲ^主張

レ能ハスト云フノ条件ヲ要スルナリ上ノ第一解^{定ル}条^ル是レカ取除
クハ即ケ^ル本法第^ル八百六十七^ル条第^ル六^ルノ規定^ルヲシテ^ル効力^ルアラシム
ルカ为メノミ且此ノ取消理由ノ^ル執行判決ニ^ル関スル^ル訴訟ニ^ル於テ自己
ノ過失ナク^ルレテ^ル本法第^ル二百十^ル条第^ル二^ル項並ニ^ル其第^ル四^ル解^ル条^ル之^ルレヲ主
張スル^ルト^ル妨ケ^ルラ^ルル^ルニ付テ^ル明^ル示^ル本法第^ル二百六^ル十六^ル条^ル条^ル之^ルレヲ主
テ必要スル^ルナリ^ル乃ケ^ル例^ル之^ルハ^ル取消^ルノ理由^ルカ^ル最初^ルノ^ル判決^ルノ^ル確定^ル後^ルハ
^ル訴訟^ルヲ^ル行^ルフ^ルニ^ル付テ^ル必要^ルス^ルレ^ルト^ルス^ル本法第^ル五百^ル四^ル十五^ル条^ル
テハ知^ルリ^ル能^ルハ^ルサ^ルル^ル場合^ルノ^ル知^ルキ^ル是^ルレ^ルト^ルス^ル本法第^ル五百^ル四^ル十五^ル条^ル

（^ル第九^ル解^ル取消^ル訴訟^ル及^ルヒ^ル不可^ル変^ル期^ル限^ル）

本文第^ル八百^ル七十^ル条^ルハ^ル特^ルニ^ル本文^ル第^ル八百^ル六十^ル九^ル条^ルノ^ル場^ル合^ルノ^ルミ^ルニ^ル付^ルテ^ル没^ル定^ルセ^ルラ^ルレ^ルル^ルモ^ルノ^ルナ^ルリ^ル蓋^ルシ^ル普通^ルノ^ル取消^ル訴訟^ルニ^ル付^ルテ^ル別^ルニ^ル訴訟^ル法^ル上^ルノ^ル期^ル限^ルヲ^ル定^ルメ^ルテ^ル制^ル限^ルス^ルル^ル所^ルアラ^ルサ^ルル^ルナ^ルリ^ル上^ルノ^ル第一^ル解^ル第^ル三^ル項^ル条^ル之^ル而^ルシ^ルテ^ル仲^ル裁^ル判^ル断^ルノ^ル取消^ルニ^ル付^ルテ^ルノ^ル理由^ルヲ^ル進^ル申^ルス^ルル^ルト^ルハ^ル必^ル先^ル執^ル行^ル判^ル断^ルノ^ル重^ル却^ルニ^ル関^ルス^ルル^ル所^ルナ^ルリ^ル以^ルテ^ル訴訟^ル提^ル起^ルノ^ル方法^ル本法第^ル二^ル百^ル三十^ル条^ル第^ル一^ル項^ル第^ル四^ル百^ル六十^ル条^ル第^ル四^ル百^ル六^ル十^ル一^ル条^ル第^ル四^ル百^ル七^ル十^ル一^ル条^ル第^ル二^ル項^ル条^ル之^ル以^ルテ^ル之^ルレ^ルヲ^ル为^ルサ^ルル^ルル^ル可^ルカラ^ルス^ル本法第^ル六^ル百^ル八^ル十六^ル条^ル第^ル一^ル項^ル条^ル之^ル蓋^ルシ^ル此^ルノ^ル訴訟^ルノ^ルヤ^ル彼^ルノ^ル判決^ル取消^ル訴訟^ルノ^ル性^ル質^ルヲ^ル具^ル有^ルシ^ル本法第^ル五^ル百^ル四^ル十^ル一^ル条^ル条^ル之^ル即^ルチ^ル必^ルズ^ル本法第^ル六^ル百^ル四^ル十七^ル条^ルノ^ル効^ル力^ルヲ^ル有^ルス^ル可^ルキ^ルモ^ルト^ルス^ル（^ル此^ル部^ル獨^ル乙^ル聯^ル邦^ル中^ル條^ル第^ル千^ル百^ル七^ル十^ル八^ル条^ル字^ル漏^ル出^ル同^ル）
同^ル中^ル條^ル第^ル七^ル百^ル八^ル十^ル一^ル条^ル条^ル之^ル又^ル執^ル行^ル判^ル断^ル其^ルモ^ルノ^ルカ^ル本法第^ル五^ル百^ル四^ル十二^ル条^ル第^ル五^ル百^ル四^ル十三^ル条^ルノ^ル意^ル味^ルニ^ルル^ル如^ルキ^ル欠^ル缺^ルアル^ルキ^ルハ^ル即^ルチ^ル裁^ル判^ル手^ル続^ルノ^ル再^ル拖^ルヲ^ル为^ルシ^ル得^ルヘ^ルシ^ル但^ル仲^ル裁^ル判^ル断^ルノ^ル取消^ルヲ^ル付^ルテ^ルマ^ルテ^ル及^ルホ^ルサ^ルス^ルシ^ルテ^ル單^ルニ^ル執^ル行^ル判^ル断^ルノ^ル取消^ルニ^ル付^ルテ^ルノ^ル裁^ル判^ルシ^ル得^ルル^ルノ^ルミ^ル
不可^ル変^ル期^ル限^ル及^ルヒ^ル其^ル起^ル始^ル並^ルニ^ル十年^ルノ^ル期^ル限^ルニ^ル関^ルシ^ルテ^ルハ^ル即^ルチ^ル本法第^ル百^ル九

十八條第一解及ヒ第二條並ニ第五而四十九條第二項ニ付ルル牙
三解第四解第五解ヲ各々スルニシ

第八十七條 裁判管轄ニ付テノ條

仲裁人ヲ選定シ若クハ忌避スルコト仲裁契約ノ消滅スルコト仲裁手
続ノ許ス可カラサルコト仲裁判断ヲ取消スコト又ハ執行判決ヲ為ス
コトヲ目的トナス訴訟ニ付テハ審面上仲裁契約ニ明記セタル區裁判
所又ハ地方裁判所之ヲ管轄シ又明記ナキ時ハ裁判上請求ノ申立ヲ管
轄ス可キ區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄ス

前項ニ依リ管轄ノ有ルル裁判所數箇アル時ハ当事者又ハ仲裁判断所
第八十六條第五條ノ最初ニ關係セシメタル裁判所之ヲ管轄ス

第一條理由ノ說明 仲裁人ノ選定若クハ忌避本法第八十五條

第八十五條第七條第八十五條第八條第九條仲裁契約ノ取消本法第八五
十九條第九條仲裁判断ヲ許サレルコト本法第八十六條第六十三條第九條仲裁
判断ノ取消(本法第八十六條第七條第九條)又ハ執行判決ヲ為スコト(本法
第八十六條第六十八條第八十七條第九條)ノ目的トナス訴訟ニ付テノ管轄
ニ關スル規則(本法ニ於テハ)物上管轄及ヒ土地ニ關スル管轄ニ付
テノ規則ト相異ナシ所ハ即チ一ニハ商事裁判管轄ヲ特ニ分別セザ
ル(合意セシ事件ハ商事ニ關スルト爲テ一切商事ナリトノ別リ之
ヲサレトシ)下ノ第三條第九條及ヒ一ニハ仲裁判断取消ニ關スル訴訟
及ヒ執行判決ヲ為スル訴訟等ヲ爲シ得ヘキ訴訟ヲ合儀シ得且
容易ナラレタリノ目的ヲ以テ數箇ノ各管轄ノ有ルル裁判所ノ中ニ
於テ最初ニ当事者又ハ仲裁人ノ關係セシメタル裁判ノ管轄ニ屬セ
シムハレト定メラルル點ニ在ルナリ

第二解制定ノ沿革 字漏生国中按第七百七十九条北部独乙縣邦中
按第千而七十四条ニ於テハ 本条ニ列載スル各場合ヲ區裁判所ノ管
轄ニ属セシ且政府起稿第一第二ノ兩原稿ニ於ケル如ク商事裁判所
ノ管轄ノ取除ヲサント上ノ第一解參照セシ他ハ各州按皆同シ
国議院委員会ニ於テ前項ニ述フル政府起稿ノ第一回第二回原稿ノ
商事裁判所ニ任ル条文ヲ採用シテ本法案ニ追加シタリ然レニ委員
公ニ於テ商事裁判所ノ特立ヲ全ク否決シタル為メ後々再ニ之レヲ
刪除シタリ(本法第二條參照)而レテ裁判所編成法第一條以
下ニ於ケル地方裁判所商事局ノ推限ニ付テハ規則ハ本文ノ場合ノ
為メ特別ノ規定ヲ掲載シアラサントナリ

第三解商事裁判所

既ニ上ノ第二解ニ述フル如ク彼ノ政府旧案ノ
条文ヲ刪除シタルヲ以テ地方裁判所商事局ノ管轄ニ付キ其否否如

何ニテ連テスルヲ得ス但上ノ理由説明ニ於テ右ノ管轄ニ付テハ
退スル所ハ今ヤ妥否ナラサルカ如シ何ントナレハ即テ法文ニ之レ

ヲ明定シアラス且必スレテ此ノ如キ妥否ニ於ケル解釈ヲ下タスヲ
要セサレハナリ乃テ商事局ノ管轄ニ付テハ到底其判断ハ事件ニ從
フヘキモノナリテ以テ必ス普通ノ物上管轄規則ニ依ラサントナラ
サルトト解シテ可ナリ

局面上仲裁契約ニ於テ商事局ノ管轄ニ属セシモノヲ相兼送シタ
リトモ其効用ハ稍制限セラルヘキナリ(本法第三十八條第三十九條
第一解第九解參照)然レモ亦第一項ノ末項ハ恰モ商事局ニ適書ス
ルノ規定ナル一レ而シテ仲裁契約ノ主要トスル請求カ裁判所編成
法第一條ノ意旨ニ於ケル商事ノ件ニシテ且其物件カ三百マルク
ノ額ヲ超過スルハ即テ其請求ノ判決ハ無論當該地方裁判所商事

局ノ管轄ニ属スヘキナリ即チ各当事者ハ該商事局ノ審判ヲ対手人ニ向テ強制的に求メ得ルナリ一項ノ第四條及ヒ本法第百二條第一項
第百四條第一項未定

（第四條專屬管轄ナリサレトモ及ヒ管轄ノ認識）本條第一項ノ裁判管轄ハ特定專屬ト明定シタルニ非ラス故ニ本法第四十條第二項ニ依リ裁判管轄ノ認識ヲ許スヘキナリ此ノ故ニ目的物件又ハ其價額ニ於テ例之ハ本法第二十五條ノ場合管轄ヲ有セザル裁判所ト爲モ亦法第三十八條第三十九條ノ規定ニ從ヒ管轄ヲ有レ得ルナリ此ノ主
義ハ商事局ニ適用スヘキ但モ其請求力商事ニ関セザルハ然レ物件價額ノ不足又ハ土地ノ管轄ニ欠缺アルシメノ場合ヲ指スニ非ラスハ取
権ヲ以テ其本案ノ審判ニ付テ決定ヲ爲サレ尙ハ裁判所編成法第百三條第一項未定該事件ヲ民事局ニ付付スヘキモノトス○裁
判管轄ノ認識ニ付テハ或ハ意ヲ示シテ制限ヲ被ルモノト知ルヘシ（下ノ第六條第七條未定）

（第五條表面上仲裁契約）本條ニ於ケル管轄認識ニ付テハ本法第三十八條第三十九條及レノ表面上ノ契約ノ必要セリ是ノ故ニ恒ニハ口頭契約ヲ以テ有効ト爲スモ（本法第八百五十三條未定）管轄ノ關係ニ付テハ口頭契約ヲ無効トナスナリ但裁判所ノ指名ヲ明ニ記載セザルハカラスト云フハ之レアラハ該仲裁契約中ニ就テ其裁判所ナルヘシト推知シテ可ナルナリ乃チ法前西國民法第百十
一條ノ法制ニ依リ住所ヲ明セシメ即チ右ノ意思ヲ示シタルモノト爲レ得ルヘシ（本法第三十八條第三十九條第六條未定）
他ノ法制ニ從ヘハ單ニ住所ノ選定ヲ以テ此ノ如キ意ヲ示シタルモノト爲レ能ハザル所ナリ

第六條 相當管轄 本條ヲ適用シ得ヘキ要件ハ即チ管面上仲裁契約
 ナリトスル以上ハ即チ本法第八百五十三條ヨリ發成スル口頭上仲
 裁契約ヲ管面ニ作製スル^{スル}訴訟ハ訴訟ハ此ノ契約履行ニ付キ管轄
 ヲ有スル^ル裁判所本法第十三條第二十九條^ル未^ル之^レヲ提出スヘキ
 モノトス
 之レニ反シ本條ノ場合ニ於テ仲裁契約ニ管轄^ル認^ル後ノ^レ意^ハ否^ト否^トサ
 ル^ルハ仲裁契約ニ関シ^ル請求セシメ^ル仲裁契約ヲ締結シタル請求ニ
 付キ^テ訴^フヘキ^ト例^之ハ不動産分割ニ関スル^ル争^ヲ仲裁判斷ニ委託
 スル^ル本條ノ場合ナルニ^テ方^テハ^ハ他^ニ專^ニ屬^スハ^ハ非^ラズ^ル上ノ第四條參
 照^ス即チ本法第二十五條ノ程式ニ從^テテ可^キナ^リ而^シテ^ハ世^ニ仲^ニ裁^ニ契約ハ
 他ノ地方ニ於テ履行スヘキモノナル^ルテ^ハ敢^テ向^テハサルナ^リ
 本條第一項ニ從^テテ相當管轄ノ裁判所ヲ見出スニハ本法第十二條以
 下ノ規則ニ照^シテ^テ其^レ請求^スル^ル裁判上ニ於テ何處ニ屬セシムヘ
 キ^キ審^ス査^スヘ^シ是^ニ付^キ被告^人ノ住所又ハ寄留所ニ依^ルヘキ^ナリ
 ハ則チ本條ヲ適用スヘキ^ナリ^ル訴訟ニ関シテハ^ハ書^事者^ノ一方ノ原告^人ノ
 住地ニ立^ツヘキ^ノ狀況如何ニ從^テテ^ハ其^レ相手^人ハ亦右ノ意^ハ也^ナリ
 於^テル^ル被告^人ノ住地ニ立^ツヘキ^ナリ
 管面上仲裁契約ニ裁判所ヲ指名シタル^ルハ即チ其^レ指名^スル^ル他ノ
 裁判管轄ヲ定^ムル^ルト^シ主^張ニ從^テテ指定^スル^ル裁判所管轄ヲ有^スル^ル然^レ此ノ
 裁判所ハ敢^テ專屬^ノ管轄ヲ有^スト^スム^ルニ非^ラズ^ル上ノ第四條參照^ス
 普通ノ裁判管轄認^ル後ハ本法第三十八條^ニ參^照管面上ノ仲裁契約ヲ
 変更スル^ルト^シテ^ハ又^ハ管面上契約ナキ^ナリ^ルハ^ハ默^シ認^スル^ルハ^ハ非^ラズ^ル
 モ更^ニ一ノ裁判管轄ヲ^テ造^スル^ルト^モ為^セ得^ルナ^リ是^レ必^ズ本條ニ
 於^テ裁判管轄ノ認^ル後ハ管面上ノ契約ニ於^テノ^レミ^之レ^ヲ為^スル^ルナ^リ

タルヲ以テナリ

並レ氏右ニ述ツル所ニ因リ又本法第三十九条ノ効用ヲ作クヘキニ
非ラザルナリ

〔第七解注意〕 昏面上仲裁契約ニ裁判所ヲ指定セス又口頭上ノ仲裁
契約ノ結ヘル場合ニ方テハ即ケ各箇ノ裁判管轄カ相衝突スヘキナ
リ上ノ第六解及ヒ本法第三十五條ニ危然シ當事者側之ハ本法第八
百六十二條第一項ノ場合ニ於ケル如シ又ハ仲裁人カ仲裁判断ノ原
本備ヘ置キリ手続〔本法第八百六十五條〕ニ以テ數管轄裁判所中
ノ一二頼リタルハ即ケ爾東該仲裁契約ニ因テ生スル事項ニ付テ
ハ其裁判所專ラ之レノ管轄スルモノトス〔上ノ第一解〕

本条第一項ニ依リテ判定スヘト所ニシテ而カモ最初ニ関任セシメ
ラレクハ裁判所ハ管轄ヲ有セムト為ス場合ニ於テハ本条第二項ヲ
適用スヘカラス但世裁判所ノ管轄トトノ判決確定シタルハ世
ノ限ニ在ラス

第八百七十二條 〔合意ニ因ラザル仲裁ニ付テノ条〕

協終処分又ハ其他合意ニ因ラザル処分ニ因リ法律上許サレタル方法
ヲ以テ設定シタル仲裁判断所ハ亦世編ノ規則ヲ適用ス

〔理由説明、制定沿革及ヒ解題〕 本条ニ對スル理由説明ハ本法第八百
五十一条第一解ノ第三項中ニ説了セリ抑本条ハバイルン国第八三
百四十四條ニ倣ヒタルモノニシテ政府第一回原案ニ於テ初テ採用
セシモノナリ右第一回及ヒ第二回ノ原案共ニ本条ニ同シ同議院委
員會ニテハ異議ナカリシ

帝国又ハ各聯邦ノ民法上ノ法律ニ於テ將來ニ生スル權利上ノ争ホ

法第百五十二条参看ニ付テノ仲裁手続ハ契約ノ方法ニ異ナル他
ノ方法ヲ以テ為シ得ハキノ規則ヲ設定シ得ルナリ蓋本条ニ於テハ
实例トシテ遺言上ノ設定ヲ示ケルノ後ノ例之ハ世襲財産寄附又ハ
家門内規ノ案ヲモ推定シテ可ナリ

民法上仲裁判断ノ設定ヲ有効トナスノ規定アリトスレハ即チ此ノ
種ノ仲裁人ニハ本第百五十一条乃至百七十一条ノ規則ノ
（本法第百五十一条第一條）^{三項参看}適用スヘキナリ然レ而シテ
鉄道營業規約又ハ株式会社ノ約款ニシテ却テノ認可ヲ經
告セラレタルモノハ一ノ契約ノ性質ヲ包含シテ即チ其仲裁判
断上ノ規定ニ付テハ直接ニ本法第百五十一条乃至百七十一
条ノ規則ニ従ハサル一カラヤムモノトス（本法第百五十一条第三

解夫危

抑本法ニ於テハ將來ノ権利上ノ争ニ関スル仲裁契約ニシテ其能ク
本法第百五十二条ニ適合スルモノハ他ノ仲裁契約ト同一視スル
ノ主クノ採リタムヲ以テ（本法第百五十四条乃至百五十七条
第一條）^{参看}何レニシテモ本法第百五十一条乃至百七十二条
ノ規則ハ適用セラルヘキモノナリ（バイルン国第千三百四十四条ノ
趣旨ハ本文ニ異レリ）

民事訴訟法
訴訟法実施法

第一条 一施行期限ニ関スルノ条

民事訴訟法ハ裁判所編成法ト同時ニ獨乙全帝國ニ其効力ヲ有スルモ
ノトス

〔制定沿革理由説明及ヒ解釈〕 政府原案ニ於テハ實施ノ期日ヲ明定
スルノ意ナリシモ 国務院委員ハ各司法上法律ヲ同日ニ實施セシメ
シテ之ヲ企圖シテ以テ本条及ヒ分赦法並ニ刑事訴訟法ノ實施法第一
条ニ本条行文ノ如ク明定ヲ為シタリ

而レテ裁判所編成法實施法第一條ニハ若シ皇帝カ集議院ノ協賛ヲ
經テ特ニ期日ヲ指定セラレザン限りハ千八百七十九年十月一日ヨ
リ實施ストノ文アリ卅ノ期日イシヤ即チ民事訴訟法ニモ應用スヘ

カリミナリ

本条ニ付テハ理由説明中別ニ叙述スル所ナシ

第二条 一費用制ニ付テノ条

民事上ノ争訟ニ関スル費用ニ付テハ獨乙全帝國ノ為メ別ニ手数料規
則ヲ以テ之ヲ定ム

〔制定沿革理由説明及ヒ解釈〕 国務院委員会ノ全會一致ヲ以テ費用
〔裁判費用証人手数料其他鑑定人代人裁判所執行吏ノ手数料〕ノ制
ヲ同時ニ統一ニ規定スルノ必要ヲ決意シタル後本法ノ第三流會ニ
方テ国務院ニ於テ本条ヲ追加スルヲニ決定セタリ
他ルニ本条ハ裁判所編成法第一條ノ為メ一層強固ヲラシメラレタ
リ即チ後條ニ帝國費用規則ハ他ノ司法上法律ト同時ニ其効力ヲ有

スル旨ヲ明セリ

第三條 (民事訴訟法ノ適用ニ関スル條)

民事訴訟法ハ通常裁判所ニ屬スル總ハテノ民事上争訟ニ之ヲ適用スルモノトス

特別裁判所ヲ設クルコトヲ許シタル民事上争訟ノ裁判権限ヲ各聯邦法ニ依リ通常裁判所ニ委任スル場合ニ限り其法律ヲ以テ之ニ異ナル審判手續ヲ許スコトヲ得

第一條理由ノ説明 裁判所編成法實施法第二條ニ曰裁判所編成法ノ規則ハ通常ノ争^{ニ對スル}裁判権及ヒ其^{ニ付テ}執行^{ノミ}ニ適用ス用ス云々

裁判所編成法第十二條ニ依レハ通常ノ争ニ對スル裁判権ヲ実行スルハ曰區裁判所曰地方裁判所曰上等地方裁判所曰帝國裁判所トス

右ノ裁判所ハ裁判所編成法ノ意ニ依レハ即ケ通常裁判所タルナリ
如何ニノ民事上争訟ニシテ通常裁判所ノ管轄ニ屬スハ十年ニ付テハ即ケ裁判所編成法第十三條ニ列挙セリ乃ケ其行文ニ曰行政官廳若クハ行政裁判所ノ管轄ニ屬セス又ハ帝國法律ヲ以テ特別ノ裁判所ヲ設ケス若クハ許ササル所ノ總ハテノ民事上争訟及ヒ刑事ノ件ハ通常裁判所ノ管轄ニ屬ス云々

右ノ法文ニ密接ノ關係ヲ有スルハ即ケ亦第一項ナリ
又帝國法ニ於テ設定スルヲ許シタル特別裁判所ニ付テハ帝國憲法第十四條ニ明示セリ而シテ此ノ特別裁判所ニ於テ為ス審判ノ手續

ニハ本法ヲ適用ス一カラサルナリ
及令各聯邦法ヲ以テ特別裁判所
ノ審判ニモ本法ヲ適用スルモトヲ定ムル
凡尚ホ之レヲ許サ、ルナ
リ
裁判所編成法^{施行}法第三条第一項ニ依レハ
即ケ民事上ノ争訟ニシ
テ之レヲ特別裁判所^ノ管轄ニ定メタル
モノニ付テハ裁判權ヲ通常
地方裁判所^ノ委任スルナリ
各聯邦法ニ於テ規定シ得ルナリ
聯邦法
ヲ以テ右ノ規定ヲ為ス
中ハ即ケ更ニ左ノ權利ヲモ與ラ
ン一キモノ
トス
即ケ第二裁判所編成法ニ規定セ
ル管轄規則外ノ規則ニ依リテ
委任ヲ為ス
推裁判所編成法
第三条第一項^及第二^及民事
訴訟法ニ異ナル
一律ノ審判手續
ヲ定ムル
ノ推是レナリ
本法第二項^及
危

蓋裁判所編成法第二條ニ依リ
通常裁判所ノ審判ニ屬セシメ
ラレト
ル民事上争訟ニ付テハ
民事訴訟法ノ手續ニ從ハサ
ン一カラケルハ
強制的ノ規定ト知ル
一ニ各聯邦^及於テ之レニ異ナル
法令ハ只帝國
法律ニ於テ^ハ明許スル
場合ニ付テリ
之レヲ規定シ得ル
ナリ
本法第
十四^及第十五^及第十六^及第十七^及
第十八^及第十九^及第二十二^及
第二十三^及第二十五^及第二十七^及
第二十八^及第三十^及第三十二^及
第三十三^及第三十五^及第三十七^及
第三十八^及第三十九^及第四十^及
第四十二^及第四十三^及第四十四^及
第四十五^及第四十六^及第四十七^及
第四十八^及第四十九^及第五十^及
第五十一^及第五十二^及第五十三^及
第五十四^及第五十五^及第五十六^及
第五十七^及第五十八^及第五十九^及
第六十^及第六十一^及第六十二^及
第六十三^及第六十四^及第六十五^及
第六十六^及第六十七^及第六十八^及
第六十九^及第七十^及第七十一^及
第七十二^及第七十三^及第七十四^及
第七十五^及第七十六^及第七十七^及
第七十八^及第七十九^及第八十^及
第八十一^及第八十二^及第八十三^及
第八十四^及第八十五^及第八十六^及
第八十七^及第八十八^及第八十九^及
第九十^及第九十一^及第九十二^及
第九十三^及第九十四^及第九十五^及
第九十六^及第九十七^及第九十八^及
第九十九^及第一百^及第一百零一^及
第一百零二^及第一百零三^及第一百零四^及
第一百零五^及第一百零六^及第一百零七^及
第一百零八^及第一百零九^及第一百一十^及
第一百一十一^及第一百一十二^及第一百一十三^及
第一百一十四^及第一百一十五^及第一百一十六^及
第一百一十七^及第一百一十八^及第一百一十九^及
第一百二十^及第一百二十一^及第一百二十二^及
第一百二十三^及第一百二十四^及第一百二十五^及
第一百二十六^及第一百二十七^及第一百二十八^及
第一百二十九^及第一百三十^及第一百三十一^及
第一百三十二^及第一百三十三^及第一百三十四^及
第一百三十五^及第一百三十六^及第一百三十七^及
第一百三十八^及第一百三十九^及第一百四十^及
第一百四十一^及第一百四十二^及第一百四十三^及
第一百四十四^及第一百四十五^及第一百四十六^及
第一百四十七^及第一百四十八^及第一百四十九^及
第一百五十^及第一百五十一^及第一百五十二^及
第一百五十三^及第一百五十四^及第一百五十五^及
第一百五十六^及第一百五十七^及第一百五十八^及
第一百五十九^及第一百六十^及第一百六十一^及
第一百六十二^及第一百六十三^及第一百六十四^及
第一百六十五^及第一百六十六^及第一百六十七^及
第一百六十八^及第一百六十九^及第一百七十^及
第一百七十一^及第一百七十二^及第一百七十三^及
第一百七十四^及第一百七十五^及第一百七十六^及
第一百七十七^及第一百七十八^及第一百七十九^及
第一百八十^及第一百八十一^及第一百八十二^及
第一百八十三^及第一百八十四^及第一百八十五^及
第一百八十六^及第一百八十七^及第一百八十八^及
第一百八十九^及第一百九十^及第一百九十一^及
第一百九十二^及第一百九十三^及第一百九十四^及
第一百九十五^及第一百九十六^及第一百九十七^及
第一百九十八^及第一百九十九^及第二百^及
第二十一^及第二十二^及第二十三^及第二十四^及
第二十五^及第二十六^及第二十七^及第二十八^及
第二十九^及第三十^及第三十一^及第三十二^及
第三十三^及第三十四^及第三十五^及第三十六^及
第三十七^及第三十八^及第三十九^及第四十^及
第四十一^及第四十二^及第四十三^及第四十四^及
第四十五^及第四十六^及第四十七^及第四十八^及
第四十九^及第五十^及第五十一^及第五十二^及
第五十三^及第五十四^及第五十五^及第五十六^及
第五十七^及第五十八^及第五十九^及第六十^及
第六十一^及第六十二^及第六十三^及第六十四^及
第六十五^及第六十六^及第六十七^及第六十八^及
第六十九^及第七十^及第七十一^及第七十二^及
第七十三^及第七十四^及第七十五^及第七十六^及
第七十七^及第七十八^及第七十九^及第八十^及
第八十一^及第八十二^及第八十三^及第八十四^及
第八十五^及第八十六^及第八十七^及第八十八^及
第八十九^及第九十^及第九十一^及第九十二^及
第九十三^及第九十四^及第九十五^及第九十六^及
第九十七^及第九十八^及第九十九^及第一百
第一^及第二^及第三^及第四^及第五^及第六^及
第七^及第八^及第九^及第十^及第十一^及第十二^及
第十三^及第十四^及第十五^及第十六^及第十七^及
第十八^及第十九^及第二十^及第二十一^及第二十二^及
第二十三^及第二十四^及第二十五^及第二十六^及
第二十七^及第二十八^及第二十九^及第三十^及
第三十一^及第三十二^及第三十三^及第三十四^及
第三十五^及第三十六^及第三十七^及第三十八^及
第三十九^及第四十^及第四十一^及第四十二^及
第四十三^及第四十四^及第四十五^及第四十六^及
第四十七^及第四十八^及第四十九^及第五十^及
第五十一^及第五十二^及第五十三^及第五十四^及
第五十五^及第五十六^及第五十七^及第五十八^及
第五十九^及第六十^及第六十一^及第六十二^及
第六十三^及第六十四^及第六十五^及第六十六^及
第六十七^及第六十八^及第六十九^及第七十^及
第七十一^及第七十二^及第七十三^及第七十四^及
第七十五^及第七十六^及第七十七^及第七十八^及
第七十九^及第八十^及第八十一^及第八十二^及
第八十三^及第八十四^及第八十五^及第八十六^及
第八十七^及第八十八^及第八十九^及第九十^及
第九十一^及第九十二^及第九十三^及第九十四^及
第九十五^及第九十六^及第九十七^及第九十八^及
第九十九^及第一百
民事訴訟法
第三条ト同
本
同
文
ヲ
同
フ
ス
刑
事
訴
訟
法
實
施
法
ノ
第
三
條
ト
同
本
同
文
ヲ
同
フ
ス

第二條制定ノ沿革 北部独乙聯邦草案ノ主スル其例言及ヒ訴訟法
第一條第二條ニ依レハ本法ニ同シキナリ政府第一回原案ノ行文ハ
異ナル所アリ氏其趣少ハ同一ナリ

第三條民事上ノ争訟 民事訴訟法ノ適用ヲ為シ得ルト云フニ付
テハ即チ民事上争訟ナルモノ、存立ノ如何ニテ同ハサル可ナラザ
ルナリ此レニ関シテハ民事訴訟法第一條第四條其他裁判所編成法
ニ付スル理由説明ヲ参看スヘシ而シテ其依ルヘキ各聯邦法律ナル
諸ノ意スル本法第十二條ヲ見テ會得スヘシ又上ニ述フル帝國法律
ノ効力ニ付テハ下ノ第四條ヲ看ルヘシ北部独乙聯邦中條第二條ハ
民事訴訟中ヨリ名譽毀損事件ヲ取除ケル是レ其力刑事訴訟法第四
百十四條以下ニ照セム亦妥当ナリナリ但民法上ノ損害賠償事件ハ
ル權ハ此ノ限ニ在ラザルヤ勿論ナリ

第四條通常及ヒ特別ノ裁判權並ニ行政事件 政府第一回原案ニ於
テハ各聯邦ハ本邦ノ民事上争訟ヲ通常裁判所ノ管轄ニ屬セシメス
シテ之レノ特別裁判所又ハ行政官廳ノ管轄ニ屬セシムルノ法律ヲ
規定シ得ルノ法文アリ然レ裁判所編成法第十四條ニ於テ特別裁判
所ヲ四箇ノ種ニ限定シアルヲ以テ前段ノ自由法制ヲ局限スルナ
リ之レニ反シ或ル争訟ヲ民事上ノモノナリト定メ若クハ否ラスト
定ムルニハ帝國法ノ規則ニ係ルニテ其管轄ニ於テ任意ニ
為シ得ル上ノ第三條參照スルニ亦本法第四條ヲ以テ一ノ制裁ヲ設ケル
リ其他例之ハ離婚事件後見事件附添人事件本法第十條參照及ヒ公
事訴訟法第一
示催告手續ハ而三十七條第一項ニ記載スル証書ニ付テノ公示催告
手續、如キハ民事訴訟法ノ規定ニ因リ又結婚合意ノ補充ニ付テノ
訴訟ハ千八百七十五年二月六日ノ帝國法律第三十二條ニ因リテ通

常裁判所ノ管轄ニ属セシメタリ而レテ是レ等ノ規定ハ各聯邦法ニ於テ変更スルヲ得サルナリ

行政並ニ行政裁判管轄ト及ヒ裁判所トノ區域ニ付テハ通例各聯邦法ニ於テ規定シ得ヘキナリ（本法第十五条裁判所編成法第十三条及 憲法ノ故ニ各聯邦法ニテ知者ノ後見事件又ハ公使ノ賦課ヲ受クル事務ニ関スル事訟ノ通常裁判所ノ管轄ニ属セシムルノ法律ヲ設クモ其効力ヲ有スルナリ（民事訴訟法第二十條第三條裁判所編成法實施法第四條參見）

帝國法律ニシテ行政ニ相對スル事件ノ通常裁判所管轄ニ属セシムルコトヲ明言シタルハ即チ本法第四條第五條帝國官吏條例第四條^九第十條第五十四條裁判所編成法第九條及ヒ全上實施法第十一條等（上）次ノ第四條及ヒ其註釈參見此ノ他ハ民事訴訟法第五而六十

八條以下第五而九十三條以下及ヒ千八百七十五年二月六日ノ帝國法律第三十二條ナリ

各聯邦法ニ於テ死シ種妻ノ事訟ノ通常裁判所ノ管轄ニ属セシメ且其事訟ハ裁判所編成法第十四條ノ特別裁判所ノ管轄ニ不適当ナル片例之ハサツケン民法第六而四十四條又ハ法朗西民法第二百零九條ニ依レル配偶夫ノ委任ノ補正ノ妻ハ即チ通常裁判所ニ提出セサルハカラサントナリ

第四條 司法裁判ノ保障ニ付テリテ

各聯邦法律ハ請求ノ事件又ハ種妻ニ依リ司法裁判ヲ許シタル民事上事訟ニ付キ國庫所村又ハ其他公使ノ團結カ原告ノ一方トナリテ關係スルカガメ其司法裁判ヲ禁止スルコトヲ得ス

(一) 制定沿革理由説明及、解起 本条ハ元ト裁判所編成法ノ會設ニ方
 テ成立シタルモノニシテ而シテ集議院ト国議院委員會トノ向、於
 テ劇キ紛争ヲ惹起シ遂ニ世行文ヲ修正セラルルヲ採用セラル、ニ至
 リタル所ナリ
 司法裁判ト行政トノ區域ニ付テハ各聯邦法制僅々ノ取除アレシモ
 確定ニ全委スアレシモ本法第三條第四條及而カモ又本条ヲ設ケテ
 以テカ制裁ヲ為シ以テ各邦法ニ於テ往々國庫又ハ公地ノ團結ニ付
 共スル特権ヲ辭ケレメルト企圖シタルモ本法第十五條第四條
 蓋本条ノ趣意タルヤ法律筆記録ニ依ルニ若シ争訟ノ性價カ民間ニ
 テハ通常裁判所ノ管轄ニ屬スルヲ勿論ナシモノナレハ其原告ノ
 又ハ被告ノ者ノ性價カ國庫其他ノ公地ノ團結ナリト云フヲ以
 テ行政廳ニ管轄セラルルヲ許サ、ニ在ルナリ例之ハ昔日字編
 生國ニテハ官有地ノ賃借ニ因リテ關係又ハ法例西法ノ行ハ、ル各
 局地ニ在テハ公地ノ事業ニ關スル請求ヲ通常裁判所ヲ管轄ニ屬セ
 レメサルノ事例アルナリ是レ等^モ向後遂ニ廢止ニ歸スヘキノミ
 法例西國法ヲ并護スル輩ハ即同是レ單ニ國庫ノ特権ニ因ルニ非ラ
 ス之レヲ司法裁判ニ屬セシメサルニ付テハ尚ホ別ニ理由アリテ存
 スルナリ其主ナル理由ハ一ニハ行政上ノ行為ヲ裁判官ヲシテ任意
 ノ解起ヲ下サシメス一ニハ行政行為ノ實施ヲ保障スルノ目的アリ
 ト為スニ在ルナリ云々然レモ此ノ并護ナルヤ法律條ノ行文及ヒ意
 旨ト相抵触スルヲ判斷ヤリ是ニ於テ第二派會ニ於テ公地ノ工事ニ
 因リテ争訟及ヒ官有土地ノ向、ル争訟ハ共ニ通常裁判所ノ管轄ニ
 ルト決定セラル

所編成法第十三条第十七条ヲ参考スルニ

帝国官吏條例第四十四条第五十条其他ニ於テ官吏ト帝国ニ庫
向ノ財産権上ノ争訟ニ付キ規定 （リ）制限スル事 如アレバ然カモ未
司法裁判ヲ禁止シテラス乃チ本条ノ趣意ニ抵触スルコトナシ是ニ於
テ本法第十三条ニ於テ帝国官吏條例ノ右ニ付テノ規則ハ一モ変更
スルコトヲ明定セサルナリ而シテ裁判所編成法実施法第十一条ニテ
各聯邦司法官吏ノ勤務上行為ニ関シ民事上許進スルコトハ或シ要件
ヲ具ハシ行政廳ノ豫審裁定ノ如何ニ依リテ許スコトヲ規定シ得
ルモノト定メリシモ亦右ノ趣意ニ因レンナリ又裁判官ノ其職務上
内係ニ原因シテ国库ニ對スル訴訟裁判所編成法第九条参考ニ付テ
ハ各聯邦ハ帝国官吏條例第五十条ニ於ケルト同一ナル制裁ヲ規
定シ得ルノ權ヲ有ス（キナリ）

第五条（聯邦及其他ノ為メニスル特別）

民事訴訟法ノ規則ハ各聯邦ノ家内法又ハ其法律ニ於テ特別ノ規則ナ
キ場合ニアラサレハ邦君及ヒ其家族並ニホヘンツルレニ他家ノ家
族ニ對シテ通用スルコトヲ得ス但チ三者ノ財産権上請求ニ関スル司法
裁判ノ許 （否） 却 （認） 可 （以） テ之ヲ定ルコトヲ許サス
第一條制定ノ沿革及ヒ理由ノ説明 政府第一回原案ニハホヘンツ
ルレルン家ノコト及ヒ家内法ノコト之レヲ列挙セス而シテ第二回案
ハ裁判所編成法実施法第五条ノ行文ト相同シ故ニ此ノ理由ノ説明
ニ関シテモ該法ノ説明ヲ参考スルニ

本条第二項ハ国議院委員会ニ於テ追加スル所ニシテ而シテ集議院
ノ反對アリタルニ拘ハラス之レヲ維持シタリ

裁判所編成法実施法第五条ノ理由説明ニ依レハ即チ該条及ヒ本条
並ニ刑事訴訟法実施法第四条ニ於テ聯邦ニ君等ノ為メ定メラル特
則ハ單ニ其自國ニ於テノミ有効ニシテ即チ他ノ聯邦ニ於テハ之レ
ヲ適用シ能ハサル如クナルヲ以テ民事訴訟法第九十六
条第三百四十条第四百四十一条第四百四十四条及ヒ刑事訴訟法第
七十一条ヲ特設シテ以テ全帝國ニ於テ必要ナル規則ヲ定メラルナ
リ内閣代理員ノ説明モ亦同シ此ノ他右ノ理由説明ニ述ベテ自各聯
邦ニ於テ本条及ヒ裁判所編成法第五条刑事訴訟法第四条ノ趣意ニ
於ケル法令ヲ新ニ制定スルヲ妨ケストナリ

〔第二解本条ノ範圍〕 各法制既ニ一致シテ然ルカ如ク上ノ第一解參
照本条ノ制裁ハ單ニ行文上然ラサルカ如シト雖モ尚該邦君ノ其本
邦ニ限ルモノト解スルヲ妥当トスヘシ然ラサレハ民事訴訟法第九
百九十六条第三百四十条第四百四十一条第四百四十四条ノ規定ハ蛇
足ニ属シ其何レノ為メニ設ケタルヤヲ解シ難キニ至ルヘキナリ民
事訴訟法第十二条第二條第三項危急迫リ而シテ尚ホ現ニ行ハル、
所ノ各聯邦ノ家内法ニシテ在位君主ノ一族ハ外人ノ肉係ト雖モ尚
ホ自國ノ控訴院ニ限リ審判ヲ受クルノ規定アレ氏尙后ハ民事訴訟
法第十二条以下ニ依リ他邦ニ於ケル裁判管轄ニ服従スヘキ場合ニ
方テハ右家内法ニ依ルヲ得ヤルヘキナリ

抑本条ニ於テハ裁判所編成法第二十条ニ於ケル如ク物上ノ特定專
屬管轄ニ付テ別ニ取消ヲ為サレルヲ以テ本条ノ規則ハ其自國ニ在
テハ凡ヘテノ特別管轄ニ付テモ効力ヲ有スルナリ又家内法ニ於テ
其新設ノ別ヲ向ハス自邦ノ為メニハ訴訟ノ許スヘキナリ並ニ裁判管
轄及ヒ審判手續ニ付テ任意ノ規則ヲ制定スルヲ得ヘレ

本条に列載せん人ニ付テハ其他邦ニ在ル場合ニハ一般ノ訴訟法ニ
服従スヘキナリ

ホヘン以テルレルニ侯家ニ族ニ付テハ帝ニ其領国ニ於ケルノミナラ
ズ千八百五十年三月十二日ノ法律ヲ以テ認令セラレシメ千八百四
十九年十二月七日ノ條約ニ依リ幸漏生全王国ニ於テ特典ヲ享有ス
ルナリ

親位ノ邦君及ヒ其家族ハ本条ニ属セズ

〔第三條 特別〕^{取除} 本条第二項ハ即ケ民事訴訟法第二十一条第四條ノ意

ニ於ケル所ノ第三者即ケ君主ノ家族ニ属セケル輩ノ有スル財産
權上ノ請求ニ付テノミ定ムル所ナリ蓋シテ規則タルヤ有テノ聯邦
ニ於テ採用ニ来リタル「^テ」^テニアルニテ帝法典ノ各邦君カ任意ニ地方
裁判所ニ服従スヘキヲ要セン趣旨ニ反對スル所ナリ

必竟本条ハ只邦石其人ニ付スル請求ニ付キ定ムル所ニシテ而シテ
其國庫ニ對スル請求ニ付テハ即ケ本法第四條^{準用スヘキ}ニ對テ

〔第四條 治外法權〕 独乙国内ニ住居シテ治外法權ヲ享有スル外国人

ハ独乙ノ裁判權ニ服従スルナレ故ニ其人ニ對シテ民事訴訟法
ヲ適用シ難キナリ〔裁判所編成法第十八条乃至第二十一条民事訴訟

法第十二条第二條卷九又独乙國臣民ニシテ治外法權ヲ享有スルモ
〔民事訴訟法第十六条卷九〕尚ホ民事訴訟法ニ服従スヘキナリ

〔第五條 貴族〕 尋常ノ貴族ニモ特別ノ待遇ヲ與ヘントノ勅諭ハ通ニ
行ハサリシニ後千八百七十六年十一月十四日ノ議會ニ於テ同ニ
ナル勅諭アリシモ亦廢止セラレシ

第六條 〔上告ノ制式及ヒ擴張ニ付テノ条〕

独乙集議院ノ承認ヲ得テ皇帝ノ勅令ヲ以テ左ノ件ニテ定ルコトヲ得

第一 法律ノ背犯ハ其成績ノ範圍控訴裁判所ノ管轄ヲ超越スルモ

上告ノ理由トナラサルコト

第二 法律ノ背犯ハ其成績ノ範圍控訴裁判所ノ管轄ヲ超越スルモ

上告ノ理由トナルコト

本条ノ規則ニ依リ發シテ勅令ハ次キノ国会ニ其承認ヲ得シカガメ
之ヲ提出ス可キモノトス此勅令ハ國會ニ於テ承認ヲ拒ム場合ニ限リ
其決定ノ日未ク裁判上權利關係ヲ成サシム訴訟ニ付テハ効力ヲ失フ
又認許ヲ得ル勅令ハ独乙帝國法律ヲ以テスルニ非ラサレハ之ヲ更
更シ又ハ廢止スルコトヲ得サルモノトス

第一條理由ノ說明及ヒ制定ノ沿革 本条ニ付テノ理由ハ民事訴訟
法第五十一条ノ理由說明ニ就テ看ルヘシ

本条ノ規定ニ依リ以テ民事訴訟法第五十一条ニ依リ上告ニ適シ
シ者クハ不適者ナシ各聯邦法律(本法第十二条参照)上告上訴コリ
取除キ(本条第二項)若クハ上告ヲ許スコトヲ一定シ得ル所ナリ

政府第一回草案ニ於テハ各聯邦法律ヲ實施法中ニ明筆シテ以テ前項
ノ趣意ヲ明カニセント企圖シヨリ

国務院委員會ニ於テ本条ノ第一條會ニ方テ之レヲ刪除シ第二條會
ニ至リ再ヒ之レヲ復シヨリ然レ國務院ノ権力ヲ^{保障センカ}鞏固スルニ爲メ第一

二項ヲ追加シタリ

第二條勅令 各聯邦ノ法律ニ關シテハ集議院カ動議ヲ起シ又ハ承
認ヲ與フルトニ付テハ本条ニ明定セス然レ内閣代理員ノ說明ニ依
レハ當該聯邦政府ノ悞謬ヲ要スルハ勿論ナリト
此ノ勅令ヲ發スルニ付キ理由說明書ニ述フル所又ハ國務院委員會

ノ動議ヲ爲シ接用スルハ別ニ其便宜アルヘカラス蓋本条第二項ニ
因リ聯邦法ノ上告ヲ許セスルニ付トハ自由ニ定メ得レハトシ
從テ本条第二項ニ於ケル國務院ノ承認ヲ要スルノ保証ハ愈之レノ
必要トスヘキトシ

勅令ノ末ニ發セラレサレハ尙又ハ發布セラレタル勅令中ニ邦法ニ奉
ケアラサル中ハ即チ只民事訴訟法第五而十一條ヲ適用スヘキトシ
第七條 最上等地方裁判所ニ付テノ条

一ノ聯邦ニ於テ裁判所編成法實施法第八條ノ規則ニ依リ民事上争訟
ニ付テ最上等地方裁判所ヲ設立シタル時ハ上告審ノ上訴ハ該裁判所
ニ提出シ此提出ハ上告狀ノ差出レノ之ヲ爲スモノトス又該本ハ職權
ヲ以テ相手人ニ之ヲ送達ス可シ

最上等^{地方}裁判所ハ豫メ口頭審理ヲ爲サスレテ上告ノ審理及ヒ裁判
ニ関スル權限ニ付テ終局ノ裁判ヲ爲スモノトス最上等地方裁判所カ
管轄ヲ有スルノ之渡リ爲ス時ハ口頭審理ノ爲メニスル如ク指定レ
原告被告兩造ニ通知ス可シ之ニ反シ帝國裁判所ノ管轄ニ属スルニ因
リ自ラ管轄ヲ有セサルノ之渡リ爲ス時ハ訴訟係争ヲ之レニ送付ス可
シ

最上等地方裁判所ノ管轄ニ関スル裁判ハ帝國裁判所ニ於テモ亦遵守
ス可キモノトス帝國裁判所ニ於ケル口頭審理ノ爲メニスル如日ハ取
推リ以テ之ヲ指定シ原告被告兩造ニ通知ス可シ
民事訴訟法第五而十七條第五而十九條ニ於ケル期限ノ定メハ口頭審
理ノ爲メニスル如日ヲ被上告人ニ通知シタル時限ニ從テ可シ
本条ノ規則ハ抗告ノ上訴ニモ亦之ヲ適用ス

第一解理由ノ說明 最上等地方裁判所ノ設立ヲ許スニ付テハ裁判所編成法實施法第八條參照帝國裁判所ト最上等地方裁判所トノ民事上法律ニ付テノ權限等ヲ防遏スル為メ規則ヲ制定スルノ必要ヲ見ルナリ

蓋亦條ハ千八百六十九年六月十二日ノ帝國高等商事裁判院設置ニ關スル帝國法律ニ模倣シテモトス

第二條制定ノ沿革 国務院委員会ニ於テ本條第二項ニ終局ノ文字及ヒ第四項ヲ追加シ且第三項ノ冒頭ヲ修正シテ「下ノ第四條參照而シテ本條ノ規則ハ帝國裁判所ノ權限スルノ限アリトノ動議アリシカ其適切ナル動議ナシニモ拘ハラズ遂ニ安部ヲ奏スル至ラサリレ而シテ本條ノ適用セラルヘキハ蓋シテ府ノ高等裁判院ナリヘケレハ即チ從來帝國高等商事裁判院ニ送付シ來テ檢査局即裁判所ノ如キ手續ヲ實行シアラサルヲ以テ敢テ前段ノ憂懼ハ深ノ意トスルニ足ラサレヘケン

第三條手續 本條ハ彼ノ千八百六十九年六月十二日ノ法律第十八條並ニ千八百七十一年四月二十二日ノ帝國法律「バイル」ニ實施スルニ關スル法律帝國第十八條ニ基ツテ以テ上告狀ハ民事訴訟法第五項十五條第一項ニ反シテ「更地方ノ裁判所ニ提出スルニハ代理人ニ頼リ」本條第十項及第八條參照正本二通「本條第一項及ヒ第八條第二項參照」ヲ以テスヘキヲ趣旨ヲ定メタリ此ノ故ニ帝國裁判所ニ上告狀ヲ提出シタル為メ又ハ之レヲ對正人ニ送達シタル為メ未タ以テ上告期限ヲ確カタルヲ得サレトシ「民事訴訟法第五項十四條第五項十五條參照而シテ上告狀ノ提出アリタル後ハ裁判所ノ裁判所ノ存記ハ一件記録ノ送付ヲ請求シ「民事訴訟法第五項六

条第五而二十九条参看並ニ上告状ノ騰本ヲ相手人ニ送達セシムル
 ナリ〔本法第八十条第二項民事訴訟法第六十四條参看又地方ノ裁判
 所ニ於ケル公開セザル席ニ於テ相手人ヲ審問スルナリシテ其上
 告ハ裁判所編成法實施法第八十条第一項ニ從ヒ自己ノ管轄ニ属スル
 キヤ又ハ同条第二項ニ從ヒ帝國裁判所ノ管轄ニ属スルキヤヲ詳定
 スルモノトス
 此ノ詳定ニ因テ管轄ヲ有スル裁判所ハ取推ノ以テ審理ノ為メニ
 ル期日ヲ指定シ且原告被告両造ニ通知スルナリ而シテ此ノ決定ヲ被
 上告人ニ送達シタル日ヨリシテ上告人ノ為メ民事訴訟法第二而三
 十四条及ヒ準備書面ヲ被上告人ニ送達スルノ期限第五而十七條民
 事訴訟法第五而十六條参看ノ期限ハ開始ニ又被上告人ノ為メニハ
 上告参看民事訴訟法第五而十九條参看ヲ相手人ニ送達スルキヤノ期
 限ハ開始スルナリ〔本法第八十条第四項参看次テ裁判所ハ其送達ヨリ
 期日マテノ間女ノ氏民事訴訟法第二而三十四條ノ期限ノ存在スル
 程度ヨリ其ノ期日ヲ長クスルキヤナリ〕
 概シテハ上告ニ付ケル通則ニ從フヘキノミ殊ニ先ツ管轄ニ付ケル
 裁判ノ最上等地方裁判所カガシタル後初テ法上告裁判所ハ其上訴
 ノ許スルキモノナルヤ否ヤ〔民事訴訟法第四而九十七條第五而二十
 九條参看及ヒ其後上ノ理由〔民事訴訟法第五而十一条乃至第五而
 十三條参看〕ニ付キ審査スルキヤナリ〕
 第四條終局 最上等地方裁判所カ自己若シハ帝國裁判所ノ管轄ニ
 属スト裁判スル中ハ即ケ原告被告両造並ニ其ニ裁判所モ此ノ言渡ニ
 關東セシムルヲ確定ノ裁判タルナリ此ノ意ハ明ニナリシカ
 為メ國設院委員會ニ於テ本条第二項ニ終局ノ文字ヲ挿入シ且第三

項ノ起頭ニ「裁判ハ帝國裁判所ヲ羈束ストアリタルヲ其ノ字ヲ加
ヘテ現行ノ如ク修正シテ第二項ノ修正ニ相貫聯セシメタルナリ

〔第五條管轄〕 蓋最上等地方裁判所ナルモノヲ許シ之レニ無上越終

ノ裁判權ヲ授ケルニ全權ヲ破壊セリリ也又此ノ裁判所ニ負ハ
スニ裁判所編成法實施法第八條ノ原則ヲ恪遵スヘキノ義務ヲ以テ
シタルナリ

然ルニ各訴ノ目的物件又ハ上告ノ目的物件カ目ノ如キ關係ニ存シ
テモ果シテ能リ適当シ得ヘキキ否ヤニ付ケル尚ホ考テ費サハルハ
カラサルモノアリ例之ハ訴訟ハ「バイルン」國ノ邦法ニ依テ判決スハ
キ權利行為ニ係リ而シテ上告シテ之レカ不服ヲ訴フル^{（原）}民事
訴訟法ノ規則ニ背反スルト云フヲ理由トスルニ過キス且本事件ハ
未^レノ裁判ヲ為スマテニ審理ノ趣シアラズ^{（此）}即ケ民事訴訟法第五

而二十八條ニ依リ本條ヲ控訴裁判所ニ送付スルヤ場合ノモノ、此
キナルハ是レ即ケ帝國法律ニ関スルノ上告ト云フヘキナリ即ケ
帝國裁判所ノ管轄ニ属スル事件ナリト云ハサレ可カラズ然ルニ^{（此）}
何レセシ^{（此）}民事訴訟法ハ獨リ帝國裁判所ニ属セシメタル法律ニ
非ラサルヲ以テ裁判所編成法實施法第八條ノ第一項ヲ準用スルコ
ト^{（此）}其第二項ニ依ルハカラサルナリ然ラハ即ケ最上等地方裁判所
ノ管轄ニ属スト云フヲ当然トナスハレ之レニ及シ^{（此）}府ノ最
上等地方裁判所ハ商事事件ハ之レヲ帝國高等商事裁判院ニ全委ス
但判決取消抗告ハ訴訟法上ノ手續ニ相抵触スル所ナリナリ
又第一第三審ニ係ル各訴物件ニ関シテ而カモ其物件カ訴訟合議又
ハ及訴ノ為メ裁判所編成法實施法第八條ノ兩項^{（此）}物件ニ付
テノ字訴ト相合セラレタルナリ即ケ帝國高等商事裁判院ニ関スル

ノ為メニスル裁判期日ノ通知ハ民事訴訟法第六十四条ニ從ヒ之ヲ
為スモノトス

(制定沿革理由説明及ヒ解款) 国議院委員会ニ於テ本条ノ第一讀會
ニ於テ當事者ヨリテ代理人ノ任定ノ為メニ重ノ費用ヲ冗出^支セシメ
サルカ^{第一項}為メ追加シ又第二讀會ニ於テ本法第七條ノ一種特様ノ手續
ナルモ民事訴訟法第六十四条ハ無論適用セラルヘキトシ確カメ
シカ^{第一項}為メ更ニ第二項ヲ追加シタルナリ

抑本条第一項ハ命令法ニ非ラスレリ一ノ許可法ナルヲ以テ民事訴
訟法第七十四条ノ主義ニ從ヒ最上等地方裁判所ニ上告狀ヲ提出ス
ルニハ法裁判所附属代理人ニ委任シ得ルナリ但本件ヲ帝國裁判所
ニ移付シタルハ又自ラ別ナリ蓋帝國裁判所附属代理人ハ代理人
規則章條第九十六条及ヒ法條ニ付テノ国議院ノ決議ニ依レハ即チ

帝國裁判所外ノ裁判所ニ於テ代理スルトシ得ス而レテ本条ニ於テ
モ此ノ帝國裁判所附属代理人ヲ明言セサルヲ以テ本条ノ場合ニ於
ケル上告狀提出ハ法條ニ於テ委任ニ應スルヲ得サルナリ殊ニ
協會ニ於テ是レニ關シテ動議アリシモ遂ニ採用セラレサリシナリ
而レテ代理人規則條第二十三条ニ依レテ帝國裁判所ニテハ法附属
代理人ノ外^{裁判所}取^{裁判所}本^{裁判所}行^{裁判所}ヲ許サルナリ以テ若シ事件カ最上等裁判所
ヨリ帝國裁判所ニ移付セラレタルハ當事者ハ必ス二回^{別各}各ナル
代理人ヲ任定セサルヘカラス此ノ如クナルノミナラス又他ノ代
人ハ無手数料ニテ上告狀提出ヲ代弁スヘカラサルヲ以テ實ハ本条
第一項ヲ制定シタル帝國ハ遂ニ果達スルヲ得サルナリ

第九条 相与管轄裁判所ノ定メニ付テノ条

數箇ノ聯邦ニ屬シ且共通上等裁判所ノ管轄區域内ニ所在ヲ有セザル
裁判所ノ管轄ニ係ル場合ニ於テハ其一邦内ニ民事上争訟ニ付キ旅上
等地方裁判所ヲ設置シタル時ト雖モ帝國裁判所カ其管轄ヲ有スヘキ
裁判所ヲ指定スルモノトス

〔制定沿革理由説明及ヒ解題〕 本条ノ理由ニ付テハ民事訴訟法第三
十六条第三十七条ノ理由説明ヲ參照スヘシ民事訴訟法第三十六条
第三十七条第一解第七項第八項參照

国政院委員会ニ於テ原案ノ各箇聯邦ノ裁判所ノ裁判管轄云々トア
リシヲ現行ノ如ク所在ヲ有セザル云々ト修正シテ以テ若シ該裁判
所カ數箇ノ聯邦ニ屬シアルモ其管轄區域カ同一ナル共通ノ上等地
方裁判所ト管轄ニ屬スル中ハ帝國裁判所ノ管轄ニ屬セスレテ上等
地方裁判所カ管轄ヲ有スル旨ヲ明カニシタリ乃チ例之ハ「シュリンゲ

レゾ」又ハ自主商市ノ共通上等地方裁判所ノ管内ノ各裁判所ニ係ル
場合ノ如キ是レナリ

本条ノ現在ノ行文ニ依レハ帝國裁判所ノ管轄ニ屬スヘキト即チ總
一テノ數裁判所カ一箇ノ旅上等地方裁判所ト管轄ニ屬セム又同
一ナル上等地方裁判所ノ管轄ニ屬セザル場合ニ制限セラレタル
ナリ而レテ「バイエルン」國ニ於テ從前ノ上等控訴裁判所ヲ仍ホ存立セ
シタル中ハ則チ「ヴロ」バイエルン國各裁判所ノ間ニ起ル管轄争ハ右上
等控訴裁判所ニ於テ裁判ヲ為スヘキナリ「シュ」特ク「バイエルン」國內
ニ在ラザル裁判所ニ係ル中ハ帝國裁判所ニ於テ之レヲ管轄ス又「バ
イエルン」國ノ除キ數箇ノ上等地方裁判所ノ管轄又ハ同一ナル上等地
方裁判所ノ下ニ屬セザル數箇ノ他ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル争ニ付
テハ頁上等地方裁判所又ハ他ノ裁判所カ一ノ聯邦内ニ在リ若クハ

各別ナル聯邦内ニ散在スルヲ論セス帝國裁判所管轄ヲ有ル
必竟本条ハ民事訴訟法第三十六條ノ不備宛ヲ補充スルノ規定ニレ
テ即チ同法第三十六條第三十七條及ヒ其條ノ欠名スヘシ

第十條 附添人ノ任定ニ付テノ條

後見事件ノ手續ニ関スル民事訴訟法ノ規則ハ精神^{衰弱}者又ハ浪費者
ノ為メニ之ニ附添人ノ任定ニモ亦之ヲ適用ス但任定ハ民法ノ規則
ニ從ヒ之ヲ要スル時ニ限ル

理由説明制定沿革及ヒ解款 本条ノ理由ニ付テハ民事訴訟法第五
百九十三條ノ理由説明ヲ参照スヘシ 政府第一回第二回原案共ニ同
一ナル又國政院委員會ニ於テ異款ナリ採用シテノ北部獨乙聯邦
草案第九百二十四條モ亦本条ニ同キ主ク採レリ但單ニ浪費者ノ

ニニ局限セリ

本条ノ解款ハ民事訴訟法第十三條第七條並ニ第五百九十三條第五
百九十四條第一條ニ就テ参照スヘシ

第十一條 催告手續ニ付テノ條

各聯邦法律ハ獨乙帝國法律ヲ以テ定メタルヨリ他ノ場合ニ付テ公示
催告手續ニ関スル民事訴訟法ノ規則ノ適用ヲ禁止シ又ハ此規則ニ他
ノ規則ヲ以テ代フルコトヲ得但民事訴訟法第八百四十九條ニ抵触セ
サル時ニ限ル

理由説明制定沿革及ヒ解款 政府第一回第二回原案共ニ同一ナル
而シテ本条末段ノ制裁ハ民事訴訟法第八百四十九條ヲ新加シタル
ノ結果ニ於テ止ヲ得ザンモノトシテ國政院委員會ニ於テ追加シ

ル所トス

本条ノ理由ニ付テハ民事訴訟法第九編ニ對スル理由ノ説明ヲ參照ス
スレシ民事訴訟法第八百二十三条第一解第九解第十解^項未^項是^此ノ他
尙ホ民事訴訟法第八百二十三条第四解第五解及ヒ第八百四十八条
乃至第八百五十条第三解ヲ參照スレシ

蓋本条ノ定^定義ハ左ノ如シ即チ帝國法律ヲ以テ例之ハ民事訴訟法第
八百三十七條第一項ノ如シ尙ホ同法第八百三十七條第一解第三解
並ニ本法第十三條第二解ヲ參照スレシ^一公示催告又ハ証券無効ノ宣
言ニ關シ規定スル所アル^ハ各聯邦ノ法律ハ其効力ヲ失フニ至ル
ナリ而シテ他ノ公示催告ノ場合又ハ無効宣言ノ場合ニ付テハ单独
ニ民事訴訟法第八百四十九條第一項ニ記載スル証券^取除^ケテ
^各聯邦^ハ其法律ヲ以テ隨意ニ規定シ得ルナリ蓋右ノ証券^取除^ケテ付テ

ハ民事訴訟法第八百四十三條乃至第八百四十八條ハ強制^的ノ意ヲ
保有スル規則ニシテ而カモ各聯邦法ニ於テハ只尙ホ他ノ要件又ハ
更ニ嚴重ナル要件ヲ掲ケルノ權利ヲ有スルニ過キサルナリ

第九十二條 法律ノ定^定義ニ付テノ條

民事訴訟法及ヒ^其法律ニ謂ヘシ法律トハ各箇ノ規^規準^ヲ云フ

〔第一解理由ノ説明〕 蓋本条ハ北部^獨乙聯邦中^中第七條ニ齊^シキモ
ノニシテ而カモ千八百六十九年六月五日ノ帝國法律第三條ハ字^字号^号ノ
規定ニ符合スル所トス^此ノ意^意ハタルヤ即チ法律又ハ各聯邦法ト民
事訴訟法又ハ本法ニ云フ所^ハ當^ニ通^式上^ノ法律ニ止ルノ義ニ非ラ
スレテ却テ其制定ノ因^因由^由又ハ^認可^可ノ原由ノ如何ニテ論^論セ^スルヘテ
ノ規^規準^法令^ヲ指^指ス^トト^解釈^セレ^ルカ^カ為^メニ設^設ケ^ラレ^ルナリ

レテ規準ナル理及ノ辭狀ハ既ニ民事訴訟法第五而十一條以下ノ為
メ之レヲ説明シタリ（同法第五而十一條乃至第五而十三條第六辭卷
看又刑事訴訟法實施法第七條ニ於テモ本條ニ同キ規則ヲ明定ス
〔第二辭制定ノ沿革及ヒ辭狀〕 各州均相同レ而レテ國議院委員會ニ
於テ異議ナク採用セラレタリ

前項ニ接奉シタル千八百六十九年六月五日（後日帝國法律トナリ）ノ
法律ハ即チ北部獨乙聯邦ノ為替法又ハ南法等ノ實施法閣ニシテ法
律ナリ此ノ法律第三條ニ字號第一ニハ南法ト聯邦法トノ關係ニ付
キ恰モ本條ニ於テ九一ノ法律ト新民事訴訟法トノ關係ヲ定メタ
ルト同一ナル規定ヲ明示セリ乃チ法律ナリ然レハ本憲法上ノ帝國
立法府（又小聯邦）ノ外布効力ナシ命令ニ民事訴訟法第五而十一條乃至第
五而十三條第四辭卷及ヒ習慣法全上第七辭卷ニシテ帝國法律

又ハ聯邦法律例之ハ南法第一條ニ依レル南軍習慣法ニ從ヒ能カク
保有スルモノヲモ概括スルノ意ヲナリトス（五）漏生内國通法九例第
一條以下バカレテ國內國法補則第六ノ字號サツクセシ國民法第二十八
各卷卷

第十三條 民事訴訟法ト帝國法律トノ關係ニ付テノ條
獨乙帝國法律ノ訴訟手續上ノ規則ハ民事訴訟法ノ為メ変更ヲ受クル
コトナシ

左ノ數條ハ之ヲ廢止ス
第一 千八百六十八年五月二十九日ノ負債上拘留廢止ニ關スル法
律第二條

第二 商法第三十四條乃至第三十六條第三十七條第二段第三十九

条第七十七条第七十八条第七十九条第四项第四百八十八条第四百九十四条及七条八百八十九条

第三 千八百七十一年六月七日、鉄道鑛業等ヲ営ムノ際死ニ致シ及ヒ身体ヲ傷害シタルニ付テノ損害賠償義務ニ関スル法律第六

条
第四 千八百七十一年十月二十八日、独乙帝国郵便ニ関スル法律
第十四条但此規則ニ於テ訴訟ノ申立ヲ以テ期滿免除ヲ中止スル
モノニ限ル

第五 千八百七十三年三月三十一日、独乙帝国官吏ノ推利上関係
ニ付テノ法律第四十四项

第六 千八百七十五年二月六日、戸籍及ヒ結婚ニ関スル法律第七
十八项第三项

为替法第八十条ハ之ヲ変更シテ民事訴訟法第九十条第二五十四
条第四百六十一条第二项第四百七十一条第二项ニ從ヘテ亦期滿免
除ノ中止スルモノトス

商法第三百四十八条第三百六十五条第四百七条ノ場合ニ於テハ民事
訴訟法第四百四十八条ニ掲ケタル區裁判所裁判管轄ヲ有スルモノト
ス鑑定人ノ任命宣誓及ヒ訊問ニ付テモ亦民事訴訟法第二編第一章第
八節ノ規則ヲ適用ス

「第一鮮理由ノ説明」理由説明ニ曰北部独乙聯邦ナルモノ、成立シ
テテ独乙国ノ分^裂アルタル当時ノ主事トスル所ニ因テ設定セ
テレタル同聯邦訴訟法草案第六条第七十四条並ニ同上実施法中條
第二條ハ今日ニ至テハ當ニ准用ス一カラサル所アリ云々且述ヘテ
曰方今ニ至テハ民事訴訟法ト帝國法律ノ訴訟手續上ノ規準トハ相

抵触セサル様ニ規定スルノ域ニ進捗セサル一カラサルナリ乃チ右ノ訴訟手續上ノ敷規準ニシテ仍チ有効ナル一キモノト及ヒ既ニ廢止ニ歸シタルモノトヲ尙究スルノ要アルナリ

盖帝國法律ノ民事訴訟上ノ規準ハ敢テ僅少ノ数ナリト云フ能ハス今此ノ民事訴訟法ノ規則トノ關係ニ從テ之レヲ研究スルニ左ノ三類ニ分別スルヲ得^{即チ}第一ハ此ノ民事訴訟法ノ規則ニ相符合スル規準^{即チ}第二民事訴訟法ノ規則ニ抵触スル規準^{即チ}第三^{即チ}民事訴訟上ノ衣服ヲ被ケリアレバ其本法ニ屬スル規準^{即チ}ナリトス

而シテ前項ノ第三ニ係ル規準ハ^{後令}此ノ民事訴訟法ノ帝國法律ニ對スル關係カ確定セラレタルニモセヨ仍然其効力ヲ保有ス又其第一ニ係ルモノハ即チ尙未ニ在テモ尙未之レヲ準用セラレサル可カラサルヲ以テノ故ニ其果テ廢止ニ屬スルト否ヤハ第二ノ尙題タルニ過キス云々

又右ノ第三ニ係ル規準ニ付キ説ヲ為シテ曰立法上ヨリ言フ時ハ右ノ規準ヲ一般ニ全廢シテ而シテ或ル部分ノ取消ヲ作ラレヨリハ寧^且口全廢ヲ有効ノモノト襲用シ且特別ノ廢止ヲ明定シテ以テ裁判官ヲシテ或ル規準^{即チ}ハ果テ此ノ第三類ニ屬セサル一キ字及ヒ實ニ民事訴訟法ニ抵触ス一キ字ヲ審究スノ勞ヲ省カシムルヲ便利トナス一キナリ殊ニ一般ノ全廢トスル片ハ止ムヲ得サルノ取消ヲ容易ニ看過シ易キノ懼アルナリト是レニ付テハ實ニ現今種々ノ帝國法律ノ抵触セル規則カ理由判然セシテ存立セルモノ之レアルハ狀況ナキニ非ラス例之ハ下ノ第八條ヲ參看スヘシ

最后ノ說明ニ曰此ノ故ニ本條第一項ノ如キ行文ヲ以テ明定スルハ即チ實際ノ利便ヲ保護スルニ最モ適當ナリトス(本條第一項ノ取

除ニ付テハ下ノ第三十三條ヲ參看スルニ

上未述ナル所ヲ以テ本條第二項乃至第四項ニ掲載スル帝國法律上ノ規則ノ廢止又ハ變更及ヒ補正ニ付テハ一定ノ理由ヲ明カニシテ
リ云々

〔第二條制定ノ沿革〕 北部獨乙聯邦草案ニ付テハ上ノ第一條ヲ參看
スルニ又第一回政府原案及ヒ第二回原案ハ同一ナルニ因テ議院委員
會ニ於テ本條第二項第二ニ「第三十七條第二項及ヒ第五條第六ヲ追加
シ且其第三項ニ民事訴訟法第四而七十一條第二項ヲ加ヘタリ又第
四項ニ於テ所在地ノ區裁判所トアリシヲ民事訴訟法第四而四十八
條ニ記載スル區裁判所ト修正シ又第二項第二ニ於テ商法第三十八
條ヲ削除シタリ而レテ此ノ第二ニ商法第三而五條第二項第二項ヲ
加ヘテ之レヲ廢止セントノ動議アリシモ之レヲ不要ナリトシテ排

斥セラレタリ蓋右ニ述フル商法ノ條項ノ廢止セラレハ即チ民
事訴訟法第八而三十七條第一項及ヒ本法第十一條並ニ民事訴訟法
第八而三十七條第一條第四條ニ依テ會得スルニ

〔第三條本條上ノ帝國法律〕 本條第一項ニ依リ帝國ノ本條上ノ法律
ハ及令其外見上訴訟手續上ノ法律ノ如クナルモノト爲テ十八而七
十一年六月七日ノ帝國義務條例第一條ノ末段ノ如キモノト爲テ變

更テ受ケサントシ上ノ第一條參看ニ應リト爲テ商法第三而十七條ノ
規定ハ民事訴訟法第八而五十三條同條第二條參看及ヒ管轄認諾ニ
付テハ各而上契約ヲ要スル第八而七十一條ニ因リ變更ヲ受ケタル所
之レアリ

〔第四條負債上拘留ノ廢止ニ付テハ帝國法律〕 本條ノ第一ニ付テハ
民事訴訟法第七而八十五條乃至第七而八十八條第三條第七而九十

六条第一解及七条七而九十七条第一解及三解并四解ニ述
フル所ニ参照シテ會得マシ

〔第五解商法〕上ノ第一解參見 商法第三十四条乃至第三十六条并七
十七条并七十八条并四而八十八条并四而九十四条并八而八十九条
ノ規定ハ民事訴訟法第二而五十九條并二而六十條ノ証拠ノ^{自由}利益
新ニ内々規則ト相容レサルヲ以テ廢止ニ属スル^リ民事訴訟法
第三而八十條乃至第三而八十三條并二解并四項參見

理由說明ハ述一ノ商法第四而八十八條并八而八十九條ノ証拠規
則ハ亦民事訴訟法第二而五十九條并二而六十條ニ参照スレハ自ら
廢止セラレサルヲ得ス而シテ此ノ第一而八十九條ノ廢止ハ只其積
極的ノ証拠^{規則}ヲ除却シタルニ過キサル^リ其^レ規則スル^レ勿レ蓋然
法第一而八十八條ニ準^ルル所ハ訴訟上完全ナル効力ヲ保有スルナ

リ乃チ疏明ノ方法獨ニ普通商法第四而九十条乃至第四而九十三條
參見タルヤ一種特種ノ組織ニシテ而カセ海上交通ノ為メ甚ク必要
トセラシム所ナレバ商法ニ於テハ其第一而九十条以下ノ組織中ニ
存在セシムルヲ必需スル如ク此ノ民事訴訟法ノ証拠保全ニ関スル
規則中ニ第一而四十七條以下置クニ適当セサルモノナリ之レニ及
シ商法第一而九十四條ノ規則ハ上ニ述^ルル理由ニ因^リテ廢止セラ
レシムルノミ云々

又商法第三十七條并二條ノ廢止ニ付テハ民事訴訟法第三而八十九
條乃至第三而九十二條第一解以下ニ依^リテ會得マシ上ノ第一解參
見

又商法第三十九條及七条七十九條并二項ハ民事訴訟法第三而九十
九條ノ規定ノ為メ廢止セラレタ^リ理由說明ニ同抑直接株主ノ原則

ニ後ハ被告ヲ受託裁判官又ハ受余裁判官ノ面前ニ提出スルハ必
ス只判決裁判所ノ任意ノ見込ニ任カスルヲ要スルノミ云々

而シテ商法第四四四六条ハ民事訴訟法第七百八十五條第三ニ
其何分ヲ重複ニ明定セリ而シテ該条ハ廢止セラレサルヲ以テ其明
定外ノ分モ亦存立スルナリ即チ以テ民事訴訟法第八百八條ノ規則
ヲ制裁ス(同法第八百八條第八百九條第四條參見)

現存スル商法第三十八條上ノ第二條參見ニ由レテハ民事訴訟法第
四四四條第四條ヲ參見スレバ他ハ下ノ第十一條ニ述フル所ヲ參
照スレ

(第六條帝國官務條例(本條第三) 此ノ條例第六條ハ民事訴訟法第二
百五十九條第二百六十條ニ依テ補^更セラル、ナリ) 必先該条ノ廢止
ハ各聯邦訴訟上法律ノ關係ニ因リテ相當タムナリ)

又同條例第七條ハ第六條ニ同ク控案ノ額ニ關係ヲ有スル規定ナリ
ニ拘ハラズ仍然存立スルナリ上ノ第三條參見

(第七條帝國郵便法) 本條第四ニ掲ケテ廢止シタリ法律ハ民事訴訟
法第九十條第二三十九條第二五十四條第四六十一條第二
項第四七十一條第二項ニ抵触スルモノトス而シテ郵便法第二十
條ハ民事訴訟法ニ對シテハ存立スルモ帝國分散法第一條第三項ニ
依リ分散処分ニ對シテハ廢止ニ屬スルナリ(民事訴訟法第七百十五
條第一條參見)

(第八條帝國官吏法(本條第五) 上ノ第二條參見) 該法第四十四條
第四項ハ本法實施法第十四條ニ依テ其効用ヲ失却シタリ而シテ該
法第五十二條第一項及ヒ第五十四條第二項ハ廢止セラレサレ
テ以テ向來右ノ場合アルニ方テハ即チ^仍民事訴訟法第五百八條第一

項ニ於テ必要ナリトスル上先償額ニ依ルヘカラサレナリ(上ノ第四
解及ヒ本法第四條ノ註解參見)

第九解千八百七十六年二月六日ノ帝國法律(本條第六〇上ノ第二解
參見) 換法第七十八條第三項ニ於ケル四ノ國ノ利便ノ為メニ
スル留保條件ハ民事訴訟法第五而六十八條以下及ヒ本法第十四條
ノ趣意ト相抵觸スルナリ)

第十解為舊法上ノ第二解參見) 理由說明ニ述ヘテ曰獨乙為舊法第
八十條ニ於テ訴訟ノ交付ニ因リ期滿免除ヲ中断スルモノト定メタ
ル所ハ即チ民事訴訟法第二而三十九條ノ規定ト相適合スト角モ換
條ニ於テ復々此ノ中新ハ訴訟ノ交付ニ限リ^{成立シ}ルノ規定ニ
至テハ民事訴訟法第九十條第二而五十四條第四而六十一條第二
項第四而七十一條第二項ノ規則ニ抵觸スルノ故ニ彼此相符合セシ

ムルヲ必要スルナリ云々

第十一解區裁判所 理由說明ハ本條第四項ニ付キ說明レテ曰抑獨
乙商法第三而四十八條第三而六十五條第四而七條ハ証拠保全ニ関
シテ規定シタル所ニシテ而シテ^手統上ニ於テハ民事訴訟法第四
而四十七條以下ニ異ナリ所^レシ是ニ於テ右三條ノ趣意ニ相量聯ス
ル所モリヲ整理スルハ蓋必要ナリニキリ以テ即チ本條五段ニ述フ
ル外ノ民事訴訟法ノ意旨ニ於ケル補正ヲ為シタルナリ云々(バイル
ニ國海法第五而三十八條參見)

商法第三而十條第三而十五條ニ對シテハ別ニ明定スル所アラズ故
ニ同法第三條ニ唯換レ權利者ノ為メニ管轄ヲ有スル區裁判所若ク
ハ地方裁判所^ノ管轄ノ為スヘキナリ
海上法ノ裁判權ニ付テハ本法及ヒ民事訴訟法ノ干涉セザル所ナリ

〔民事訴訟法第十四条第十五条^{新註}解^{新註}〕

〔第十二條帝國軍事法〕 該法ニ関シテハ民事訴訟法第十四条第十五条^{新註}解^{新註}ヲ見ルベシ

〔第十三條千八百六十九年六月二十一日ノ俸給及ヒ債銀ノ差押ニ関スル帝國法律〕 該法律第四條ノ第二第三第四ハ民事訴訟法第七而四十九條ニ依リ変更セラレタリ〔同法^{新註}第九條第十條^{新註}〕

第十四条 各聯邦法律ノ廢止ニ付テハ各

各聯邦法律中^{訴訟}裁判手續上ノ規則ハ本法第三條ニ準拠シ民事訴訟法ノ規則ニ從ヘテ裁判ヲ為ス可キ然レテノ民事上争訟ニ関シ其効力ヲ失フモノトス但民事訴訟法ニ於テ各聯邦法律ノ規則ニ委任シ又ハ其規則ノ変更セサレコトヲ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

特ニ左ニ掲ケル規則ハ其効力ヲ失フ

第一 民事裁判官ニ於テ遵守ス可キ刑事裁判上判決ノ効力ニ関スル規則

第二 或シ權利關係ニ付キ立証方法ノ各種姿ヲ禁止シ又ハ之ヲ制限シテ許スル規則

第三 一定ノ要件ヲ以テ或ル事實ヲ多ク或ル事實ナルヘシト爲認リ可キノ規則

第四 辨濟ノ延期及ヒ判決ノ期限^{新註}内シ及ヒ債務者ニ敗訴ノニ渡テ爲ス際支拂期限ヲ付與スル裁判所ノ権限ニ関スル規則

第五 附帶要求ニ付キ裁判ヲ為サレタル場合ニ於テ之ヲ否認スルノニ渡テ爲レタルモノト爲做スル規則

